
盾の勇者の成り上がり
10
アネコユサギ
Aneko Yusagi
MFブックス


盾の勇者の成り上がり⑩
アネコユサギ
Aneko Yusagi


ナディア
ラフタリア
エクレール
リーシア
岩谷 尚文
メルティ
キール
フィーロ
人物紹介
盾の勇者の成り上がり 10


「あらあら、せっかちな子は嫌いじゃないけど、
おいたが過ぎるわね」

MFブックス

盾の勇者の成り上がり　10

アネコユサギ

目次

プロローグ　霊亀の結界

絆達と別れた俺達は、波の時に起こる召喚と同じように一瞬で転送され、視界が切り替わった。

ここは……見覚えのあるメルロマルクの城下町が見える平原だった。

「戻ってきたんですね」

ラフタリアがしみじみと言った。

まあ帰ってきた気はするな。

「みたいだな」

「久しぶりー」

フィーロも同じ気持ちらしい。

「やっと帰ってきましたぁ！」

リーシアに至っては感動までしている。

と、安堵するのとほぼ同時だっただろうか、俺の盾から眩い光が空高く放たれ……まるで空に溶けるように消えていく。

「うわ！」

「こ、これは……!?」

「霊亀のエネルギーが世界に還っていくんだろうな」

それは、そこまで長くはない時間だった。

それでも、感慨深いものがある。

思えば短いようで長い戦いだったな。

世界を守る結界を生み出す存在、霊亀……その霊亀本体が乗っ取られたから助けてほしいとオストに頼まれ、霊亀を操ってこの世界に多大な被害を与えたキョウを追いかけて異世界に行った。

その異世界で俺と同じく四聖勇者をしている絆と知り合い、共にキョウと戦い、報いを受けさせて、霊亀のエネルギーを奪還して帰ってきたんだ。

霊亀を含めた守護獣と呼ばれる化け物は、生き物の魂を糧にして波という世界融合現象を止める結界を作り出す

役目を持っている。
この結界を生成するエネルギーが十分に溜まると波が起こらないようにできるらしいが、十分でないにしろある程度溜まった状態でも時間的な猶予くらいは作り出せる……らしい。
俺達はそのエネルギーを取り戻し、こうしてこの世界に本来の役割をもたらすために解き放った。
幻想的な光景だし、遠くからでも見えるんじゃないか？
そう思いながら……自らの盾である霊亀の心の盾を見つめていた俺は、光が完全に抜けたことに気付いた。
どうやら盾の中に入っていたエネルギーは全て出し終えたようだ。
今ではぼんやりとした明かりすらも消えてしまった。
専用効果のエネルギーブラストは表示が０％になってしまっているな。能力も若干低下している。
完全に役目を終えたと言わんばかりだ。
「さて、どうなったか確認だな」
「はい、ナオフミ様」
今、俺の名前を呼んだのはラフタリア。
もはや誰の声か確認する必要もないくらい共に戦い続けている元奴隷の亜人の女の子だ。
俺が親代わりをしているのだが、今では俺の方が頼りにする場面も多い。
異世界で刀の眷属器に選ばれて、奴隷ではなくなってしまった。
巫女服が不思議なほど似合う、実は和風美人だ。
耳と尻尾が生えていてタヌキっぽいからか？
「さーて、次の波までの時間は……」
俺は視界に浮かぶ砂時計の数字に目を向ける。
すると……赤い方の砂時計の数字が止まっていた。
そして、青い方の砂時計のアイコンが動き出しているのが確認できる。
数字は８？
確かオストが次の守護獣が出るまでの猶予、とか言っていた覚えがあるぞ。
鳳凰だったか？

なるほど、その鳳凰の封印が解けるまでの猶予が表示されているのか。
封印が解けるまでの時間は三ヶ月半ほどだな……アレだけの激戦をして三ヶ月半しかないのか、それとも三ヶ月半も時間があると喜ぶべきなのか。
「次の守護獣の封印が解けるまでの時間は三ヶ月半のようだ」
「そう……ですか。思ったよりも時間はなさそうですね」
「そうでもない。今までと比べれば十分あるだろ」
俺が召喚されて一ヶ月目に最初の波が起こった。
次が一ヶ月半後。
割とすぐに三勇教事件、勇者同士の情報交換、カルミラ島での波、そして霊亀事件だ。
メルロマルクの波も近づいていたはずだったんだから……俺がこの世界に来て、今、四ヶ月目に入るかそこらだな。
「この世界にいた時間とあんまり変わらん。絆達の方の世界では一ヶ月の戦いだったしな」
「そうなのー？」
「ま、フィーロの年齢を考えたら、あと三ヶ月半も時間があれば十分だ」
フィーロはフィロリアルという魔物の女の子だ。
馬車を引くことを至上の喜びとする変わった鳥型の魔物の上位種で、天使のような姿に変身する能力を持っている。
黙っていれば金髪碧眼の可愛らしい幼女だな。
実年齢は俺が異世界に召喚されてから一ヶ月引いた数字だ。
つまり、三ヶ月半の猶予というのはフィーロが今まで生きてきた年月とあんまり変わらない。
「ふぇええ……休む暇もなさそうです」
今、ふぇええと喚いたのはリーシア。感情で能力が上下する主人公体質の少女だ。
キョウを相手に最も活躍した功労者。
勇者仲間である樹に戦力外として捨てられたのを俺が拾ったのだけれど、ここまで活躍するなら十分に戦力だ。
今はまだ感情が高ぶらないと力を発揮できないが、開花したら化けるだろう。

大器晩成のようなので、ステータス的な要素もこれから伸びていくはずだ。

「まあな。どうやって強くなるかを考えていかないと出遅れるな。しかも、次に戦う相手は鳳凰だ。十分に鍛えるんだぞ。時間は有限なんだから」

「はい！」

「ラフー！」

リーシアと一緒にラフちゃんが鳴く。

ああ、ラフちゃんというのはラフタリアの毛髪を元に作られた式神だ。

タヌキのようなアライグマのような可愛らしい……ラフタリアを擬獣化させたらこんな感じかという生き物。

思いのほか賢くていろんなところで役に立つ。

そこで盾が反応しているのに気付いた。使い魔の盾？

盾のアイコンが光っているので確認すると使い魔の盾というのが解放されている。

内容は式神の盾とほぼ同じだった。

どうやらラフちゃんを行使するのに必須だから出現したようだ。

いやー、絆の世界と仕様が違うからと消えたりしなくてよかったな。

どうも世界間で互換性のないものは文字化けみたいになって機能しなくなってしまうんだ。

式神の盾が文字化けして、ラフちゃんが何も言わないぬいぐるみみたいになったら落ち込みそうだと思っていたが、何事もなくてよかった。

「ナオフミ様？　何かおかしなことを考えてませんか？」

「この世界でもラフちゃんが運用できるようで何よりだと考えていた」

「はぁ……」

どうもラフタリアはラフちゃんに苦手意識を持っている。

「ま、どうやら鍛えた要素がなくなってしまっているから一からやり直しみたいだが、こちらでは色々と知っていることも多いからな。すぐに絆の世界にいた頃よりも強くしてやるぞ」

「ラフー！」

ホント、ラフちゃんはノリが良くていいな。

俺の言葉にやる気を見せるつもりなのか二本足で立ってみせている。

「……あ、城の方から迎えが来たみたいですよ」

俺とラフちゃんが見つめ合っていると、メルロマルクの城下町の方から見覚えのある馬車が近づいてきた。

そうそう、俺達の背後には霊亀の死骸がそびえ立っているんだよな。

どうやら転送で霊亀の目の前に飛んだようだ。

一ヶ月も経っていて、ある程度除去も済んでいる。

肉とかは切除され、山の部分の緑が侵食してきているように……見える。

オスト……帰ってきたぞ。

一瞬だけ、俺の思いに応じるかのように、ふわっと霊亀の死骸から光が漏れたように見えたのは……きっと気の所為だな。

「さて……と、じゃあこっちへ向かってきてる連中と話でもつけるか」

「はい」

「積もる話や、土産も色々とあるしな」

「メルちゃん喜んでくれるかな？」

「さあな」

フィーロは今、自らのフィロリアル姿を模した寝巻きを着用している。

どうもフィーロの親友であるメルロマルクの第二王女、メルティにお土産として渡したいらしい。

「これから忙しくなるだろうな。ラフタリア、覚悟しておけよ」

そう、俺達には絆達と同じくいろんな問題が待ちかまえている。

霊亀に敗れて捕まっていた三人の勇者共のこととか色々とな。

今度こそやつらと話が通じると思いたい。

「はい」

「後は……そうだな。鳳凰と戦うまでの期間でやらねばならないことをやって、行けたら行くとしよう」

「ど、どこへ行くつもりなんですか？」

「それは……少しだけ待て」

「は、はぁ……」

「ふぇええ……」

思わせぶりにラフタリアにウィンクすると、その動作になぜかリーシアが脅えたような声を出す。

失礼な。そんなにも似合わないことをしたか？

なんてことをしていると馬車と騎士達が隊列を組んで俺達の前で止まった。

そして馬車からメルロマルクの女王が降りてきて一礼する。

「よくぞお帰りなさいました、イワタニ様」

「久しぶりだな」

一ヶ月ぶりだが、女王も特に変わった様子はないようだ。

うん。外見に変化はない。

「して、首尾のほどは？」

「お前等もある程度は察したんじゃないか？」

「ここへ来る前にまばゆい光が空へと溶けていったことを確認しております。アレは、イワタニ様が霊亀の力を奪還した証でしょうか？」

「ああ、霊亀の力で彼はしばらく起きなくなったようだな」

俺の言葉に周りにいる騎士達が感嘆の声を漏らす。

「どうやら次の四霊、守護獣である鳳凰の封印が解けるまではひとまず安全だと思っていい」

「それはどれほどの期間なのでしょうか？」

「三ヶ月半だな。短いかもしれないが……ま、やるしかないだろ」

「承知しました。異世界の、それも敵地での厳しい戦いでお疲れのことでしょう。こちらへ」

「……そうだな。そっちの様子も色々と聞きたい」

俺が頷くと女王は道を譲るようにして馬車へと案内する。

俺達は女王の用意した馬車に乗って城へと移動したのだった。

一話　杖の七星

「さぁ、イワタニ様。国民がイワタニ様へ惜しみない感謝の言葉を贈っています。どうか手をお振りください」

「ああ、はいはい」

ここまで盛大に感謝されると逆にウソ臭く感じるな。

「盾の勇者様ありがとう！」

「勇者様ー！」

女王が用意した馬車に乗って城へ向かっていると、凱旋パレードみたいに城下町の連中が俺に手を振ってくる。

現金な奴等だ。

ま、民衆意識ってそういう単純なところがあるんだってアニメとか歴史で知っているけどさ。

問題のない程度に手を振って応じる。

しかし、これが二、三ヶ月前だったらゴミの一つでも飛んできてるよな。

なんたって盾の悪魔だし。

というか最初の波を乗り越えた時、なんでお前がいるんだ？　みたいに睨まれたぞ。

やっと正当な評価を受けたと喜ぶべきところなんだろうが、どうにも引っかかる。

こっちの世界じゃアレからどれだけの時間が経ったのか。

「そういえば女王」

「何でしょうか？」

「俺が旅立ってから、こっちじゃどれくらいの時間が経ったんだ？」

一応数えていたつもりだが、念のために確認を取る。

浦島太郎みたいに実は結構な年月が過ぎてたとかありそうだし。

「二週間半ですね」

「……そうなのか？」

おや？　どうやら絆の世界の方が時間の進みは速いらしいな。

二週間半という女王の言葉にラフタリアとリーシアが唖然とした表情を浮かべている。

「何かあったのですか？」

「俺達が追撃した先の世界では一ヶ月ほど経過していた」

「なるほど、そのような変化が……」

良いのか悪いのかよくわからないが、時間の節約には……なったんだろうか？

やがて城に入ると玉座の間に通された。

「連合軍の連中は？」

「それぞれの国で復興活動に尽力しております」

霊亀の被害はかなり酷かった。

俺もその爪痕を知らないわけじゃない。

メルロマルクで倒すことはできたといっても、草原にデカデカと霊亀の死骸が転がっていて、その背後には広大な瓦礫の荒野が広がっているのだ。

「現状を確認いたしましょう。現在、世界中の龍刻の砂時計が停止しております」

「俺の方も赤い方の砂時計は止まっている」

「はい」

「ただ、もう一つの砂時計に三ヶ月半の時間が映っている」

その場の空気が重くなる。

「期限は三ヶ月半。それまでに鳳凰と戦う準備を整える必要があるだろうな」

鳳凰が復活するのはわかっている。

「それでだな。霊亀のエネルギーを奪った敵、キョウを追跡した先の世界で知った事実なんだが」

俺は女王に絆の世界で知ったことを説明した。

絆の世界では、波とは世界同士の融合現象だと伝えられており、今回の融合が完了してしまうと世界が容量の限界を迎えて滅んでしまうとされている。

それを回避するために、眷属器の所持者と呼ばれる勇者が波の亀裂から他世界に乗り込み、その世界の支柱である聖武器の勇者を殺そうとして行動していたという話だった。

女王の側近が騒ぎ始める。

「……その話は真のことなのでしょうか？」

「正直に言えば眉唾だな。実際に試したわけではないし、あっちの世界じゃ対人戦闘能力が欠如している聖武器……四聖が存在した。その話がホントなら、四聖こそ対人で強くなければならないだろ？」

正しいのかもしれない。

だけど、と絆は否定していた。

「その波に関する別の見解が記されているらしいものを、あちらの世界で見つけてきた。リーシア」

「は、はい！」

リーシアは絆達に託された写本を取り出して見せる。

「何が記されているかわからないが、描かれているものに波を連想する箇所が多い。解読さえできれば何かわかるかもしれない」

「……わかりました。では各国総出で取りかかれるよう、解読ができる者を派遣するよう要請いたします」

「そのメンバーにリーシアを組みこんでおいてくれ。あっちの世界の言語も習得しているし、コイツはどうもこういうのが得意みたいだからな」

ぶっちゃけ、戦闘よりも才能があると思う。

「ふぇええ……」

「グラス達に任されたんだ。がんばれよ」

何でもできるように育ってもらわないとな。

「まあ、そういった資料のほかにあっちの四聖と話をつけてきた。ついでにグラスやラルクとは一時的とはいえ休戦協定を結んできた。次に奴等と遭遇することがあっても戦う可能性は極めて低いだろう」

「……わかりました。確かに、波が起こらない現状、警戒を強める意味はあまりないと判断いたします」

「他にあっちの世界での物品をある程度もらってきた。上手く機能するかどうかわからないが様々なものがある」

俺は絆達から受け取った物が入った袋を女王達に見せる。

上手くいけば波への対処はもとより、一攫千金になる逸品ばかりだ。

伝説の武器にあるドロップを再現する道具、波における砂時計の召喚を再現、転移スキルを再現させる帰路の写本など、いろんな物を絆達から譲り受けている。

「それでだ。重要なことだから先に言わせてくれ」

俺は一歩踏み出して女王に提案というか質問をする。

「ここ三ヶ月半の間に俺達は戦いの代償で受けた呪いを治療しなければならない」

そう、今の俺達、俺とラフタリアとフィーロはアル・サクリファイス・オーラの影響でずいぶんと能力が低下してしまっている。

しかも完治するのはまだまだ先という始末だ。

「そのようなことが……」

正直かなりきつい状態ではある。

呪いの治療が終わるまでは無茶はできない。通常の戦闘でもかなり厳しいだろう。

絆の世界の治療師の話では全治約三ヶ月。

自分でも色々と治療を試みるが、その間は低下した能力でどうにかしていかねばならない。

勇者同士の強化方法を共有することで、化け物じみた強さを持っていたとか自覚していたんだがな。

幸いにして防御力は呪いの効果を免れているから、どうにかできなくもないかもしれない。

「三ヶ月半後には鳳凰の封印が解けるし、その先の戦いも厳しくなるだろう」

絆達の世界の魔物達が強くなっているのは波が関わっているとも聞いた。

徐々に厳しくなる現状で勇者は必要不可欠だ。

俺一人で手が回りきるはずもないし、刀の眷属器を持つとはいえラフタリアだけでどうにかできるはずもない。

フィトリアとだって約束をしているんだ。

せめて四聖勇者同士で結束を強めなきゃならない。

「これからのことを考えて、改めて勇者同士で話し合いをする必要があると思う。四聖や眷属器……いや七星か？」

おそらく眷属器とはこの世界では七星勇者を指す言葉だと俺は思っている。

そいつらと話をして、できれば強化方法の共有をしておきたい。

「……」

女王が俺の言葉を聞いて扇で口元を隠す。

「……イワタニ様のお言葉、確かに伺いました。七星勇者との会談の件……フォーブレイや各国と連絡を取り、実現できるよう努力いたします」

女王の返答に俺は首を傾げる。

七星勇者？　四聖のあの三馬鹿共はどうした⁉

「おい。四聖……俺以外の連中はどうした？」

俺が尋ねると、女王は目を逸らす。

「おい！」

「ま、真に申し訳ないことなのですが……数日前のこと……」

俺以外の四聖とは剣、槍、弓の勇者である天木錬、北村元康、川澄樹のことだ。

奴等はゲームの世界に入ったと思いこんで、自分の知るゲーム知識だけを頼りに暴走し、霊亀に挑んで返り討ちに遭い、キョウに捕えられて霊亀を動かす力の供給源にされていた。

俺達が異世界に旅立つ直前、エクレールと変幻無双流のババアに運ばれていったのを覚えている。

で、女王の話ではこうだ。

勇者共は治療院で目を覚まさずに眠り続けていた。

けれど数日前、治療師がそれぞれ勇者達が意識を取り戻したのを確認したらしい。

診察した治療師によると、勇者共はそれぞれ、何があったのか状況を聞いた後……自分達が霊亀に挑んで敗れたことを自覚したらしい。

「で？」

「目覚めた日の夜……勇者様方は忽然と姿を消したとの話でして……」

頬が引きつるのを感じる。

あの馬鹿勇者共！　転移スキルで逃げやがったな！

なぜ逃げるかはわからん。別に悪さなんてしてないだろうに……。

まあ、カッコ悪すぎるのは確かだが。

「情報封鎖を行っておりますが、国民の間で霊亀が凶悪化した原因の一つは盾以外の四聖勇者が負けた所為だとの噂が流れており、勇者様方の消息が心配な状況です」

「はぁ……どこへ行ったか知らないが、できれば保護をする方向で話を進めておいてくれ」

「善処いたします。ただ、被害を拡大させたと自らを追いこんでいる可能性もあるため、十分注意して対応するように命じております」
まったく……どこまで厄介な問題を起こせば気が済むんだ、あのボケ共は！
「気をつけねばならないのは敗北により傷心の勇者様方に言葉巧みに取り入り、世界統一の旗頭にしようとする国がないとも限らないことでしょう」
「ああ、やはりそういう連中もいるのか」
「もちろん、相応の批難を浴びることになりますが。我が国はもとより、フォーブレイも黙っていないでしょう」
「えっと……確か、四聖勇者を一番に召喚しようとした大国だったか？」
「はい。四聖勇者と密接な関わり合いがある国です。彼国の許可なくそのような行いをすれば、戦争は回避できないでしょう」
割と戦争とかその辺りの問題は絆達の世界よりもないと思っていたが、転がっているもんなんだな。
勇者は自分に取り入ってくる国に亡命すると、政治の道具として使われる危険性があるのか。
俺は勧誘を知らないうちに蹴ってしまったから、そういうことにはならなかったけど、アイツ等なら乗りかねない。
本当、碌でもない連中だ。
その連中の一人でもある俺が言うのもアレだけどさ……。
現状でできるのは七星勇者の招集だけか。
敵か味方か怪しいが、会って話くらいはしなきゃいけない。
強化方法の共有という重要な目的がある。
もちろん、聞き出すことができるのかという問題が先にあるがな。
絆達の世界でもキョウのような例がある。
七星勇者が味方かどうかはわからないのが現状だ。
だが、なんとか強化方法を聞いて、呪いで能力が下がっている現状をどうにかしておきたい。
「勇者の状況はわかった。他に、これだけの災害だが……復興できるのか？」
俺の問いに更に女王や周りの連中の表情が曇る。

ああ、やはり厳しいのか。
「霊亀への内部進入や誘導で連合軍自体の被害も相当出ております」
「守りきれなくて申し訳ないな」
盾の勇者である俺は本来、犠牲を如何に出さないようにするかを考えて動かなくてはいけなかった。にもかかわらず、相当な被害を出してしまった。
「いえ……彼らも本望でしょうし、内部進入に参加した者は皆、盾の勇者様がいたお陰で死地を乗り越えられたと申しております」
「そう言ってもらえるのは嬉しいが」
「近隣諸国の打撃も大きく、復興には長い時間が必要となるでしょう」
「……そうか」
「正直なところ、イワタニ様への援助も若干厳しくなっております」
ここは頷くしかあるまい。これだけの大災害を受けてなお、俺への多大な援助ができるというのなら、どこからそんな金が出ているのか気になる。
「できる限りの援助は行いますが、当初に予定していたものと比べると……」
「ああ、わかっている。金が必要なら自分で何とかしよう」
むしろ復興資金とかを集めなきゃいけないだろ……考えていた計画を切り出すとするか。
「なあ、援助って金じゃなくてもいいんだよな」
「ええ、むしろ現状ではお金以外の方がこちらとしては助かります」
これは連合軍を引き連れていてわかった問題点でもあるし、今まで思っていたことでもある。
「じゃあ、領地をくれないか？」
そう、俺は絆達のことを見て、波への対処法について考えていたことがあった。
と、同時にラフタリアへの、俺ができる最大限の礼として考えたことだ。
仮に世界が平和になった時、俺はこんな世界に留まるなんて馬鹿な真似はせず、元の世界に迷わず帰る。
だが、ラフタリアは？
ラフタリアにとってはこの世界こそが居場所なのだ。

ならば俺を信じ、苦楽を共にしたラフタリアには死ぬまで幸せに過ごせる場所が必要だ。

「領地ですか？　問題ありませんが、理由をお聞かせくださいませんか？　今までのイワタニ様は……失礼ながらこういったことには無頓着だったと思うのですが」

ま、表向きの理由も言っておこう。

「波の先の世界での四聖は仲間を十分に鍛えて、勇者なしで波に挑ませていた。これからは必要になることだと俺は分析する」

結果的に霊亀を倒したのは俺達だったが、防御だけの俺にはやはり仲間が重要となってくる。

「……イワタニ様のお考え、理解いたしました」

「先に述べておくが連合軍がいなければ俺達は霊亀にすら負けていた。そこは前提としてくれ。だが、今のままの連合軍では波を乗り越えることは難しい。正直に言えば弱い」

「むう……」

騎士っていうのはプライドが高くて鬱陶しいな。

「弱いと言ったのは全体の戦力だ。霊亀が波と関わり合いがある以上、霊亀よりも強い化け物がこれから現れる可能性が非常に高い。だから波に備えた私兵を育成したいと考えた……金も必要だし、その下地として領地が欲しいんだ」

「なるほど、イワタニ様の考えが見えてきました。恩賞も出さねばなりませんし、いい機会ですね」

女王は扇を閉じて、地図を取り出した。

「……城下町の近くがよろしいかと思いますが、ご希望の場所はありますか？」

「ここだ」

俺は迷いなくカルミラ島へ向かう港の近くの海岸線にある地域を指差した。

「え……？」

ラフタリアが声を出しそうになるのを堪えた。

「ふむ……その地域は……セーアエット嬢が現在、領主をしている地域ですね」

「エクレールだな。アイツも案外色々とやっているんだな」

「ええ、私も領地の復興に力を貸そうとしていた地域なのですが、報告される話では現状……あまり芳しくないとの話です」

「そうか……」

俺が召喚される前の最初の波で大きな被害を受けた場所らしい。

俺も何度か通りかかったが、無人の廃墟とかが続く、閑散としている地域だ。

波の所為なのか草木も育ちが悪いようだし、復興させるのは難しいだろう。

まだ二週間と半分なんだしな。

「できれば他の地域を勧めたいところです。最初の波によって多大な被害が出て廃墟となっている場所ですから」

「どうせ開拓するんだ。城の近くのような既に開拓が済んでいる場所よりも自分好みにしやすいから、丁度良い」

「……わかりました。後は、領地を得るということはそれ相応の地位を授けねばなりませんね」

「どうせ俺は波が終わったら帰るつもりなんだ。一代限りで十分。それこそ、その後はエクレールにでも返してやれ。いや……好き勝手にさせてくれるなら領主はアイツのままでもいい」

エクレールとは知らない仲ではないし、あのクソ真面目に亜人と仲良くしようという意志を見せる奴となら上手くいくだろう。

「そうはいきません。イワタニ様、貴方はご自分の活躍を過小評価しすぎです。相応の報酬を与えなければ他国にメルロマルクを攻める大義を与えてしまいます」

なぜか女王に咎められたぞ。

「伯爵の地位を授けましょう」

「おい……」

盾が伯爵と翻訳したということは、継承権利が発生する地位じゃないか。

随分前に熱心に読んだ貴族のマンガで爵位については知っているんだよな。

あのマンガは中世ではなく、近世だったが。

公爵、侯爵、伯爵、子爵、男爵。

通称五等爵と呼び、上から順により偉い爵位と考えていい。

一般的に爵位は二つに分類され、家門と領土、俺の世界だと……ヨーロッパの場合は基本領土に対して爵位が生じ、その領土を支配している者を総じて貴族と呼んだ、だったか。

そのため、複数の領土を保有する貴族は当然複数の爵位を持っていた。
そして爵位を持つ＝最低一万エーカー以上の土地を保有している貴族ということだ。
まあこの世界で通用するかどうかは知らないが。
「もしかしたらイワタニ様にお子様ができるかもしれませんからね。その時のためですよ。例えば……メルティとの子とか」
「ねぇよ」
そんなにも、俺とメルティを婚約させたいのか？
アイツは幼女だぞ。十歳児に欲情とかするわけないだろ。
「少々お待ちを。称号授与の儀式を行わねばいけません」
「めんどくさいなぁ……」
「そうは言いましても、この度の活躍にふさわしい形式と報酬でなければ国の威信に関わるので」
確かに、あれだけの被害を出した首謀者を仕留めた勇者に金を渡しただけでは示しがつかないというのも頷ける。
「亜人が信仰する盾の勇者様がメルロマルク国内でも亜人を差別しないことで有名だったセーアエット領を所望するとは。エクレール嬢の父親は、それはもう人望も厚く、私も頼りにしていたのですよ」
……女王の奴、俺の意図を完全に理解しているな。何度も視線がラフタリアに行くぞ。
「いい宣伝にもなりますしね。そこをお任せします」
「期待されても困るがな」
女王が俺に儀式用の剣を持たせる。
盾に弾かれると思うかもしれないが、戦闘意志を持たない限りは弾かれないから問題はない。
剣を抜いて女王に渡し、女王が俺の肩に交互に剣をかざして認証をすることで称号授与は終わるそうだ。
「盾の勇者、ナオフミ＝イワタニへの称号授与！」
ラッパのような楽器を吹き鳴らす城の兵士達。
俺は玉座で待つ女王に向けて扉から堂々と進む。
そしてギザったらしくポーズを決めて頭を垂れ、脇に差した剣を抜いて女王に手渡す。
女王は剣を受け取り、俺の肩にかざした。

「汝、我が国の決まりに則り、此度の活躍によって伯爵の地位を授ける」
そして女王は俺に剣を返す。
「活躍を期待している」
剣を鞘に戻して、俺は立ち上がった。
「ということです。本当はもっと大々的に行いたいのですが……」
「面倒」
「そう言うと思って略式で致しました。ですが、民衆には宣伝させていただきますよ」
「わかったよ」
これで大っぴらに城下町を歩けなくなったような気がする。
そういえばクズはどこだ？　もうずいぶんと昔に思えてきたけど、居るのだろうか？
女王の代わりをしていた代理の王で、女王の夫だ。別の名前があったのだが、罰で今はクズという名前に改名されている。宗教的理由で俺を冤罪に陥れた犯人の一人だ。
……いた。忌々しそうに俺を睨んでいる。
女王が目を光らせているから何も言えないんだな。
そう思っていたら……よく見ると首輪をつけている。
「――――！」
あ、何か言おうとして首輪に触れている。
締まっているみたいだ。笑える。笑ってやった。
「――――!!」
メッチャ腹立ってるみたい。
だけど叫ぼうとしようものならその前に首輪が締まって黙らされる。
いやぁ笑える。
「ナオフミ様……？」
ラフタリアが注意するように声を掛けてくる。
どうやらラフタリアにはクズの首輪が見えていないようだな。

「あ、はい。そちらにいる……国王様が杖の七星勇者様ですよ」
「は？」
俺は唖然としながらなぜか抵抗しているクズを指差す。
「今、メルロマルクや各国が存在するのも国王様のおかげなんですよ」
いやいや、この馬鹿で愚かで権力欲の塊であるクズが七星勇者？
ありえない！　杖なんて持っているところを見たことがない。
何が英知の賢王だ。無知の愚王の間違いだろう。
「リーシアは面白い冗談が言えるな」
「！」
クズが鼻息荒く俺を睨みつける。
「冗談ではないのですが……このお姿もきっと何かの策略だと思います。国王様がいればメルロマルクは安泰だってパパとママがよく話していました」
「……お前のパパとママはそんなんだから没落貴族なんだよ」
「ふぇええ……」
「ナオフミ様！」
ラフタリアが俺に注意してくる。事実だろ。
話を聞く限り、俺の世界でいう有名な軍師か何かだったんじゃないか？
馬鹿な行動をしていても、何かの罠だ、迂闊に触れないって感じで深読みされるような……。
まさかな。
「これはアレだ。本物は別に居るんだな。コイツは影武者か何かだろ」
俺が挑発的に指差すと、我慢も限界を超えたのかクズが握りこぶしを作って殴りかかってきた。
「させません。アイシクル・プリズン」
「!?」
クズは氷の檻に閉じ込められて女王を睨む。
「もしくは既に死んでいてクズはその後釜に座ったとかそんなところだろう？」

「いや、だって笑えるからさ。見ろよアレ」
「まあ……ナオフミ様らしいですね」
と呆れられてしまった。
「そうそう、イワタニ様。七星勇者と話がしたいとのお申し出でしたね」
「ん？　そうだが……」
女王が思わせぶりにクズの方へ視線を向ける。
クズは周りの騎士共に強引に連れてこられて俺の前で膝を突かされる。
「とある七星勇者の話をしましょう」
なんでクズを連れてきて言うんだよ。
「旧名はルージュという優秀な人物でした。過去に世界支配を目論んだシルトヴェルトに対して真っ向から衝突し、二十数年前、メルロマルクをはじめ多数の国を救いました」
「随分と評価の高い奴だな」
二十年も前ということは今は相当な年齢だ。
俺の知り合いで出てくる奴といえば、ババアか奴隷商、アクセサリー商辺りか。
後半の二人は論外として、ババアは十分考えられるな。
薬で劇的な復活を遂げて大暴れしていたし。だけど、何か違う気がする。
「人々は彼を杖の勇者としてではなく、その知略を恐れ……英知の賢王という通り名で語り継ぐことにしました」
「――!!」
何かクズがめっちゃ抵抗してるな。
ふむ……英知の賢王か。ずいぶんと立派な奴がいたもんだ。
それだけ頭が良いとすると……俺はリーシアを見る。
「お前の親父？」
「ふぇえええええええ！」
ブンブンと首を横に振られた。違うらしい。
「リーシア、お前は誰か知っているか？」

「いえいえ、本当の話ですよ。ね？　クズ」
「！」
「ああ、その首輪の所為で喋れませんでしたね。イワタニ様、よく考えてください。ビッチを奴隷にすることはできてもクズを奴隷にしなかったわけを」
そういえば……クズは割とすぐに諦めたような気がしたから放置したのかと思ったが、どうも罰が軽かった気がしなくもない。
「イワタニ様ならおわかりでしょうが、四聖も七星も奴隷にさせることは不可能なのです」
「はあ……つまりクズは絶対に奴隷にならないから、こうして首輪で黙らせていると……首輪は平気なのか？」
「ええ、まあ本人が壊そうとすれば容易く壊れてしまいますがね。壊したら罰があるのでしないでいるだけですよ」
と女王が言った直後、クズが首輪を引きちぎった。
「もう我慢できん！　盾――――！」
相変わらずうるさい奴だな。
「……今回は見逃してあげましょう。そういうことです。オルトクレ――おっと、クズ。貴方の杖の強化方法をイワタニ様に提供なさい」
「誰が話すものか！　ワシは、ワシは認めんぞ！　盾に伯爵の地位？　絶対に認めてはならん！」
「……どういたしましょうか？　命ばかりはどうか容赦していただきたいのですが」
と言いつつ、女王はクズの頬を殴打してる。
微妙に楽しくなってきた外道な俺だが、現実的に考えてクズの持ってる強化方法を聞き出すのは難しい。
その場合は殺して別の所持者が現れるのを待って聞いた方が早い。
だけど女王は寛大に見逃してほしいと言ってるわけか。
難しい問題だな。
「女王、できる限りの拷問をして吐かせろ。世界平和のために戦う気のない勇者に生きる価値などない」
「なんじゃと！　――ふべ!?」
女王が命じてクズの口に物をねじ込ませて黙らせる。
「……わかりました」

「期限は――」
と、俺が猶予の期日を言おうとした瞬間、女王は遮る。
「他の問題として我が娘ビッチに関してです」
む。何か進展でもあったのか？
強化方法も重要だがあのビッチの話となると別だ。
なんか逸らされたような気がするが、まあ次の機会にでも指摘してやろうじゃないか。
「意識を取り戻したキタムラ様の話により、生存の可能性が高いと思われます」
「確かにな……早急に発見して捕えろ」
キョウの話じゃ元康は霊亀を目の前に仲間に逃げられたとか言っていたな。
間違いなく生きているだろう。
「仰せのままに」
元康の元に戻るかどうかは知らないがな。むしろ敵前逃亡罪で処刑か？
「まずはあの子と話をしなければなりませんね。場合によってはイワタニ様にとって愉快な結末になるでしょう……」
「そうなることを願ってるよ。フフフ……」
とまあ、女王と腹の探り合いをしながら俺達は笑い合う。
「ナオフミ様！」
「ああはいはい。わかったから……」
まったく、少しくらい悪ふざけに合わせてくれよ。ラフちゃんみたいにさ。
「ラフフ……」
ちなみにラフちゃんはさっきからずっと俺の真似をして邪悪な笑みを浮かべている。
「とにかく、私からもお聞きしたいことが山ほどあるんですよ」
「わかってるって、とりあえず準備だ」
異世界から帰ってきたばかりだし、色々と準備もあるんだ。
「じゃあな、この世のクズ。これから貴様は勇者を罠に掛けた無知の愚王として永遠に名を刻むんだ。よかったな、

有名人だぞ？」
「――――！？！？」
俺達が玉座の間を出ようとすると、クズが必死に俺を指差し、氷の檻を壊そうとしている。俺に殴りかかりたいのだろうが、取り巻きの兵士がそれを許さない。女王も良い仕事をしてくれる。
というか、コイツは本当に七星勇者なのか？

二話　奴隷の行方

客室のベッドに横になり、体を休める。
ああ、やっぱ重いな。横になると実感する。呪いの効果が強くてキツイ。
今日は女王達と陽が落ちるまで今後のことを色々と話し合ったが、どうしたものか。
「そういえば……」
俺は徐に自分の装備品を確認する……案の定、鎧は文字化けしている。
バルバロイアーマーは機能していないようだ。
「ラフタリア、リーシア、フィーロもか？　装備品をチェックしておけよ」
「あ、はい……変な文字になっていて効果がないようでした」
ラフタリアはさっさとこの世界に居た時の鎧に着替えていた。
く……いつの間に着替えたんだ。
「なんで嫌そうな顔をしてるんですか？」
「別に？」
似合っていたからだしー、今の姿よりも気に入ってるしー。
とか子供のような答えを脳裏に浮かべているとラフタリアが俺を怪訝な目で見てくる。
「あ、私の胸当ても変な文字になってます」
「着ぐるみがいいか？」

確か予備のペックル着ぐるみがあった覚えが……どこにやったかな？
城の倉庫に預けていたんだったか？
「ふぇえええ」
「まあまあ、ナオフミ様。リーシアさんも成長しているのですから着ぐるみは……」
「ねえねえごしゅじんさま？　メルちゃんは？　お部屋にいなかった」
フィーロが寝巻きを広げて尋ねてくる。
とりあえず鑑定。
お？　フィーロ寝巻きは互換性があるようだぞ。
「メルティか？　確かエクレールのところへ補佐に行ったと聞いたな」
「そうなんだ？　じゃあ明日には会える？」
「かもな」
どうせ行く予定の場所なんだしな。
「それよりもナオフミ様」
ラフタリアがズイッと横になっている俺に顔を近づけてくる。
「領地ですよ。それに爵位も……大出世なんですよ」
「元々勇者だしなぁ……あんまり実感が湧かない」
「……ナオフミ様は、何が望みなんですか？」
ラフタリアが疑惑の瞳で俺に尋ねる。
そういえば、女王に欲しい領地の指定をしたら声を出しそうになっていたな。
「さっきの領地の話か……言った通りだ。これから先の厳しい戦いを視野に入れたら絆やグラス、ラルクと同じく私兵の部隊を作ったほうがいいだろうってな」
「ですが、なぜ、最初の波の被害地域を領地に？」
素直に言うべきか？　言わざるべきか。
何か恩着せがましい気がしてきたから誤魔化すか。
「勝手知ったる場所でやりやすそうだったからだな。エクレールの親との関わり合いが深いし、俺が手に入れても

「誰も文句を言いそうにない地域だったからだな」
　しばしの沈黙が俺とラフタリアを包む。
　やがてラフタリアは諦めたように溜息をついた。
「はぁ……わかりました。そういうことにしておきましょう」
「集める奴隷はラフタリア、まずはお前の知り合いで固めるぞ。気心の知れた奴の方が戦いやすいだろう。次は普通の奴隷だ。戦力が固まったら城の兵士辺りでも鍛えてやるか」
　奴隷達が強くなって、仮にグラス達と戦うことになってもすぐに仕留められる程度に戦力を強化しておきたいな。
「同時に……フフ」
　ラフタリアの知り合いにとっては、大事な故郷に戻りたければ俺の私兵になるしかないということだ。俺の領地がいわば人質といったところだな。
「また悪ぶってますね。たぶん人質とか考えてますよ」
　う、どうやら見抜かれてしまったみたいだ。
「フフ、まるで長年連れ添った夫婦みたいですね」
　リーシアがなんか爆弾発言をした。
　まあ、ラフタリアとはこの世界で一番長い付き合いだし、理解はしてくれているだろうなぁ。夫婦とかじゃないけど。
「な、な、何を言っているんですか!?」
　ラフタリアが恥ずかしそうに顔を染めて怒鳴る。
　ああ、やっぱりそういった色恋沙汰は逆鱗か。リーシアも地雷を踏んだな。
　元は子供奴隷だが、ラフタリアは人一倍心優しくてお節介な奴だ。
　家族を失い、住んでいた場所を奪われた悲しみは容易く想像できる。
　つまりラフタリアは自分と同じ境遇の者を一人でも増やさないために戦っている。
　こんな崇高な目的のあるラフタリアが色恋なんて考えるはずもない。
　そもそもラフタリアは外見こそ大人だが、年齢的には子供だぞ。恋愛する年頃じゃないだろうに。

　まあリーシアは樹に恋しているから、その辺の感性が良くも悪くも女なんだろう。
「そうだぞ、リーシア。ラフタリアはそういう冗談が嫌いなんだ。気をつけろよ」
「な、ナオフミ様……」
　顔が赤かったラフタリアが落ち着きを取り戻していく。

よしよし、あんまり怒らせるのもよくないからな。

「は、はい……？」

リーシアが首を傾げながら俺とラフタリアを見つめていた。

「さて、明日は色々と忙しくなるぞ」

とは思ったがこれから先のことでふと思い出したことがあった。

「そうだリーシア。お前、Ｌｖリセットするかどうか話していたな」

「はい」

「やらない方向で考えられないか？」

「ど、どうしてですか？」

「確かナオフミ様の資質向上を受けるにはＬｖ１からやり直した方がよかったのではないですか？」

「そのことなんだが、絆の世界に居た時、リーシアの能力をある程度観察していたんだ。それは知っているな？」

「はい」

俺はリーシアがどんな感じに伸びていたのかをきちんと確認していた。

「正直に言って、今のリーシアと絆の世界にいた時のリーシアでは能力にそこまで差異はない。微々たるものだ」

「そうなんですか？」

「まあ、多少は差があるんだがな……ラフタリアやフィーロと比べたら……」

「ふぇええ……」

「で、リーシア。俺はお前の能力がこれから大きく伸びるだろうと分析している。クラスアップでの資質という問題があるかもしれないがな」

ラフタリアやフィーロはクラスアップで開花した資質があるそうだ。

フィーロはフィトリアの羽の力で特殊なクラスアップが可能で、いろんな資質が開花するらしいからな。

資質によってその後もそれなりに影響が出てしまう。

リーシアは器用貧乏だが、魔法とかで得意な属性が出るようなクラスアップ先があるかもしれない。

「え、あ!?　そ、そうですよね……うーん。私は……イツキ様が選んでくれた今の私を大切にしたいです」

「そうか……わかった」



捨てられたにもかかわらず一途な奴だな。が、それを見返すことに意味がある。
俺は嫌いじゃないぞ。
こうして俺達はゆっくりと休み、明日に備えた。

「さてと」
城で朝食を終えた俺達は女王と軽く話をして出発の準備を整える。
「どこへ行きますか？」
「奴隷商のところだな」
「イワタニ様」
そこで女王が何やら手を挙げて俺に提案したいようだ。
「ラフタリア……様の同郷の者を購入しに行こうと思っておられるのでしょうか？」
「そうだが……」
「そのことで私達の方で少々込み入った問題が起こったことを先にお詫び申し上げます」
「……」
何だろう。すごーく嫌な予感がして俺の頬が引きつる。
正直に言えば聞きたくない。だが、聞かないと先に進めない。
「なんだ？」
「はい。霊亀事件の後、セーアエット嬢の地位を復権させたおり、私は国の貴族を含め、各方面に対してセーアエット領の亜人達を即時解放するように御触れとして命じておりました」
「ああ……」
「幸い、ラフタリア様の同郷の者がいる手前、村の者の生き残りはすぐに見つかるかと思ったのですが……」
女王が何を言わんとしているのかを完全に察する。正直、聞きたくない。
ラフタリアなんて顔が青ざめてんぞ。
「結果は芳しくなく、調べたところ……どうやら国が解放を命じるよりも早く売却されており、大半の方の行方がまだ掴み切れておりません」

おい！　どんだけこの国の闇は俺の足を引っ張るんだよ！
俺もオンラインゲームで弱体化すると判明したアイテムとかをいち早く売り飛ばしたことがあるからその心理は理解できないわけじゃない。
だが、なあ……はぁ。ウンザリするな。
「現在、調査中であり、イワタニ様が贔屓にしている……魔物商はラフタリア様のご友人を捜している最中です」
つまりいないと……それで捜している最中ってことか。
若干よろめくラフタリアを支えて俺は計画が早くも暗礁に乗り上げかけていることに気付く。
「幸いにしてキール様を含めて四人ほど、セーアエット領に戻っております」
キールを含めて四人か……少ないなぁ。
これからの開拓を考えるともっと人手が必要になるぞ。
しょうがないな。
「とりあえず……選り好みせずに亜人奴隷を多少集めた方がよさそうだな」
「ナオフミ様!?」
「四人じゃ開拓にならん。人手が足りない」
これから色々とやっていかなければならないんだ。
「しょうがないだろ、安めで使えそうな奴を買っていくぞ」
「わ、わかりました……」
「ま、結局は子供の奴隷を買うんだろうな……」
伸び代とか色々な意味を兼ねてだがな。
そう思いつつ女王と別れて奴隷商のところへと出かけた。

ローブを羽織り、裏路地を歩いて、久々のテントに足を運ぶ。
「おや？」
そこにはあんまり関わりたくない奴隷商が暇そうに座って客を待っていた。
ラフタリアの同郷の奴等を捜してんじゃないのか？

ローブから顔を出して挨拶とばかりに手を上げる。

「これはこれは盾の勇者様、お久しぶりです。ご活躍は耳に入っておりますよ」

「久しぶりだな」

「忘れられてしまったのかと思っておりました」

「お前のような奴を忘れてたまるか」

なんていうか、独特のテンションのコイツを忘れるのはちょっと難しい。

並の商人よりもやり手に感じる。

こういう商売は、覚えてもらうのが一番だからな。

考えてみれば……フィーロのツメを買いに来たのが最後だったな。

龍刻の砂時計でクラスアップができなかった時以来だ。

あの時にシルトヴェルトとシルドフリーデンへ行くように唆されたんだ。

って、コイツ、さっきの話から考えるに裏で女王と繋がっているんだっけ？

「色々とやらかしてくれたよな。まさか国と裏で繋がっているとは」

「盾の勇者様のことを一目見て気に入ったのは嘘ではありませんよ」

「はいはい。そういうことにしといてやる」

「して、今日は何をお望みで？」

「お前の本業の方だ」

「おお！」

奴隷商の目が一際輝く。

何がお前をそんなにワクワクさせているのか知らんが、想像通りの展開にはさせない。

恐らく有名人になっても奴隷を買う俺を内心喜んでいるとか、そういうところだろう。

「とりあえず安めの亜人奴隷を買いたい。できる限りＬｖの低い奴をな」

「予算はどれくらいですかな？」

金は霊亀事件よりも前に銀貨五千枚を女王からもらっている。

「銀貨五千枚の範囲でだ。もちろん、捜索中の奴隷も込みでな」

「新たな事業への投資ですね」

「前にも言ったが、知っていることをわざとらしく聞くな」

本当、コイツはどこまで知っているのか……未来を見通せるとか言われても信じられそうだ。

「こちらでございます」

奴隷商は俺達をテントの奥の方へ案内する。

その後に続こうとすると、フィーロが足を止めた。

「どうした？」

「……なんか行きたくない」

ああ、独特のあの暗い雰囲気や匂いを感じ取っているんだな。

俺はもう慣れたが、気持ちのいいものじゃないのは確かだ。

「じゃあそこで待っているか？」

「うん」

フィーロはクンクンとたまごガチャの方の匂いを嗅ぎながら頷く。

そこは俺達が出会った場所だぞ。

食べるなよ、と注意をして俺は奴隷商の後を追う。

奴隷商の後についていって、ラフタリアと出会った檻の近くへと進む。

「……ここが私の運命が変わった場所なんですよね……」

感慨深いような気がしなくもないが……思えば、長いようで短いよな。

まだ半年にも満たないんだし。

「サービスさせていただきますよ」

「気前がいいな」

「面白い事業を始めるご様子に私、ゾクゾクしています！　これからお得意様になってくださるのでしょう？」

「まあ……な」

「盾の勇者様のお陰で儲けさせていただいておりますからね」

「どういう意味だ？」

「神鳥の時と同じ現象が起こっていると思えばご納得いただけるかと」

ああ……ラフタリアがかなり活躍したからな。

連合軍でも功労者扱いだろうし、そんな奴隷を売ったところだと知られれば儲かるか。

「だが、それでラフタリアの同郷が売り切れなら意味がないな」

「いえいえ、それとこれは別です。ハイ！」

「とりあえず……」

目に留まった奴を選んでいくか。

「コイツとコイツ、あと、そいつだな。ついでにそこにいる奴と、そこの毛布を被った奴、で、そいつ」

割と丈夫そうな男の子を二人、仲が良さそうに手を繋いで震えている奴二人。で牢屋の奥で毛布に包まって震えている奴と、入り口近くでジッとフィーロを凝視している奴を選んだ。

エクレールのところに四人いるなら合わせて一〇人。最初に使うにはいい塩梅だろ。

「ああ、後で俺の領地でも奴隷登録をするから登録ができる奴を同行させろ。資質を伸ばすには必要だからな」

「大雑把なようで、質の良い奴隷を選ぶ勇者様の眼力に脱帽です。ハイ！」

「ふぇええええ……」

「あの、ナオフミ様？　もっと丁寧に選ぶべきでは？」

「元気な奴と問題ありそうな奴を交互に選んだつもりだ。そこの毛布の奴は早くこっちへ来い」

絶対に衰弱してるだろ。恐怖で震えてるのがわかる。

奴隷商が指示を出すと屈強な男が檻を開けて子供の毛布を奪い去る。

「や、やめて！」

「ほう……」

毛布を取るとそこには……モグラみたいな奴が居た。

「ルーモ種という手先が器用な獣人です。元々目が光に弱い種族故、夜間の警備にも向いている種族です。この者は子供ですな」

「あわわ……」

怯えて隅っこで縮こまるルーモ種の奴隷。

ラフタリアが心配そうにしているな。

俺はそのルーモ種の子供の外見を確認した。

一言で言うのなら、モグラだな。ワーウルフとかみたいに人型のモグラだ。

身長は低いな。俺の腰くらいしかない。子供だからか？

手先が器用か……色々と事業もやる予定だから問題はない。

「器用さならばお連れのラクーン種も手先がそれなりに器用ですよ？」

俺はラフタリアを見る。

そういえばラフタリアには何も教えていなかったなぁ……せいぜい魔物の皮とかをなめす作業をさせていた程度だ。

自発的にやりたがらないということは生来、不器用なのかもしれない。

「何か失礼なことを考えてませんか？」

「別に……」

「そうですねぇ。ルーモ種なら手先を使う細かい作業が向いていますかね。気性も大人しいですし、お勧めです。ハイ」

俺は震えるルーモ種を再度確認する。

「なあ、この国は虐待趣味の奴が多くないか？」

どいつも体の各所に鞭で打ったような痕があるのだ。

「この国は亜人と長い間、戦争をした歴史がある故、しょうがありませんです。ハイ」

「その時に戦っていた貴族とかが、過去の憂さ晴らしに虐待ってか？」

ラフタリアと因縁がある貴族もそうだったな。

「虐待だけして返却する格安なプランがあるくらいです。ハイ。再起不能にさせたら高額で買い取っていただくのです」

この国の闇は深いな。

亜人の村を復興させる俺のことを、貴族連中は苦虫を噛み潰すような感覚で見てるのかもしれない。

「虐待はさすがに法律で罰せられますです。ハイ」

「非合法ってやつか……事実上合法にも見えるがな」
なんだかんだで裏路地の奥にあるこのテントを見て常々思う。
「その点、私のところでは健全に商売を行っております。ハイ」
健全ね……これ見よがしに自慢する奴隷商だが、凄く胡散臭い。
そもそも、じゃあなんで虐待された奴隷を売っているんだと……。
「そういえば……確かにマシな方ではあります……ね」
ラフタリアがポツリと零す。
割とマシなのは本当なのか。
俺はルーモ種の奴隷の背中の傷を見る。
……思いのほか深そうだ。何度も鞭で打った痕が何層にもわたって痣になっている。
「ツヴァイト・ヒール」
回復魔法によってルーモ種の奴隷の傷が塞がっていく。
とはいえ、傷の根が深いからか、完治には程遠いが。
「え？」
「お前、手先が器用なんだってな」
「……わかりません」
ルーモ種の奴隷は顔を逸らしながら答えた。
できないことをできると言うよりはマシな返答だな。
「教えたらやるか？」
「……それが命令ならやります。だから……ぶたないで……」
今にも泣きそうな声を絞り出してルーモ種の奴隷は縮こまる。
まあ、奴隷なんてこんなもんだよな。
「そんなことする趣味はない。ぶたれたいなら他の奴に頼むんだな」
「え……？」
ああもう、胸糞悪いなクソ！

「とりあえず、薬を渡しておくからコイツ等を応急手当てしておけ。その後は奴隷紋登録を済ませておけよ」
「勇者様の奴隷の扱いを期待して私、ゾクゾクしていますです。ハイ！」
「いいから黙ってやれ！　ああ、俺はその間に色々と準備してくる。任せたぞ」
「ふふふ、楽しくなってきましたです。ハイ」
奴隷商に後を任せ、俺はラフタリアとリーシアを連れてテントの入り口へ戻った。
フィーロが俺を見つけて駆け寄ってくる。
「終わったー？」
「ああ……まだ色々と準備があるんだがな。手続きが終わるまでの間にやることがあるんだよ」
俺はテントから出る。
他にも寄る場所は沢山あるからな。

三話　知人達

再度ローブを纏って町を見て回る。
やはり損害が激しいな。霊亀の爪痕が深く残っている。
使い魔の猛攻の形跡も数多い。
やがて、目当ての店に辿り着いた。
うん。よかった。この店は特に目立った被害はなく、通常営業をしている。
俺は武器屋の親父のところへ顔を出す。
「いらっしゃい」
「無事で何よりだな」
「その声は……アンちゃんか！」
俺はローブのフードを脱いで親父に挨拶した。
幸い親父の方も傷一つない、五体満足の状態だ。

「どうしてローブなんて纏ってんだ？」
「目立ちたくない」
「一躍有名人だもんな、アンちゃんは」
一番の問題はそれなんだよな。
樹(いつき)じゃないけど、盾の勇者様！って歓迎されると虫唾(むしず)が走る。
優越感には浸れるんだろうが、この国の奴に慕われてもな……。
それに今はやらなければいけないことがありすぎる。無駄なことに時間を割くわけにはいかないんだ。
「ゾロゾロとついてこられたら困るだろ？」
俺は店内を見渡して親父に答える。
「見た感じだと、特に被害はなさそうだな」
「まあな。出てきた魔物は追い払ってやったぜ」
「それは何より」
「色々な意味で見違えたな。ここに来た時は、なんか残念そうだと思っていたのに」
「言ってろ」
あれこれとしてくれた親父とそんなことを言い合う。
「アンちゃんが全然受け取りに来ねえからすっかり埃(ほこり)を被っちまったぞ」
と、武器屋の親父は一本の小剣を持ってくる。

ペックルレイピア　品質　良い
付与効果　敏捷(しゅんびん)上昇　魔力上昇　ブラッドクリーングリス

あー……ずいぶん前にリーシアにって依頼した武器か。
「また何か依頼に来たのか？」
リーシアに丁度良いか。もしくはエクレールにでも持たせるか。
「城からの援助が厳しくなってな。武器防具作りは中断してもらおうと思ってさ」

「そりゃあしょうがねえだろうなぁ……城下町はそこまで問題ねえが近隣諸国を含めて大災害だ」
「店の方はどうなんだ？」
「こんな被害があったばかりだからな。みんな武器を欲して買っていくぜ」
「繁盛中か」
「そうだな。売れすぎて在庫が心許(こころもと)ないところだ」
「そりゃあ盛況なことで」
「だがなぁ……心得がない奴が買い占めに走っていて微妙な心境だぜ」
それはしょうがないだろう。たとえ心得がなくても身の危険を感じれば武器が欲しくなる。
あれだよな。災害が起こってから水や食料を買い占めようとする意識と同じように、争乱があったから武具を欲しているんだろう。
見たところ略奪なんかは起こっていないみたいだから、マシな方ではあるが。
「今日はそれだけか？」
「そこなんだ」
親父に奴隷用の武器を大量に発注するか悩む。
女王には話を通してあるから中古の武器は譲ってもらうことはできる。
だけどそれ以上の武器は物資的に厳しい。
そこまで必要かと考えるのだが……中古故に問題も多い。
ま、それも兼ねて親父には話してもいいか。
「女王から領地をもらってな。手広く事業を始めるんだ」
奴隷の武器の作製やその他諸々で親父は役に立つ。誘うだけの価値はある。
「で、それが俺に何の関係があるんだ、アンちゃん」
「スカウトに来た、と言えばわかるか？」
領地に武器屋の親父が来てくれれば、収入の一つに充てられる。
腕は良いと見込んでいるし、売れ行きは期待できるだろう。
「俺にはこの店があるしなぁ……」

「わかっている。別に強要はしない。もしかしたら……一人か二人、弟子にしてもらうかもしれない。ちょっと考えておいてくれ」

「ああ、そういうことか……わかったぜアンちゃん。弟子とかを取るほどの腕じゃねえけど」

よし、言質は取った。これで手先が器用な奴を親父の弟子にさせて技能を覚えさせるという手段が取れるようになった。

技術は金になるからな。無論、恩を仇で返すようなことをするつもりはないが。

「謙遜するな。腕は信用してる」

「はは、期待に応えるようがんばってるんだよ」

「ま、俺が事業を始めるから、知り合いには話しておいてくれよ。場所は——」

親父に俺の領地を教え、拠点にする村に関しても説明しておいた。

新たな事業を広げるなら乗ってくる奴も多いだろう。

そういう奴等の中で信頼できる者を人選して伸ばせば利益を上げられる。

俺の領地は城下町からも距離的にある程度近いしな。

「わかったわかった。まあ、みんなアンちゃんのことは心配していたし、いい機会だから話に乗るかもしれねえな」

「恩もあるから優遇はする。親父には特によくするつもりだから考えておいてくれよ」

「わかったわかった」

と、軽く会話を交わしたところで親父が俺を凝視する。

「他にもあるんだろ？」

「わかるか？」

「アンちゃんは色々と一度に持ってくるからな」

「そうか……」

あんまり見せたくなかったけれど、俺は纏っていたローブを脱いだ。

それを見て親父は理解した。

「なんだこりゃあ？」

バルバロイアーマーを凝視して首を傾げている。

それを脱いでカウンターに載せた。

「霊亀を暴走させた犯人を追いかけて別の世界に行ってな。そこでは蛮族の鎧は効果を発揮しなかったんだ。だから現地の鍛冶師に改造してもらってバルバロイアーマーという名前の鎧に打ち直してもらったんだが、今度はこっちで機能しなくなった」

親父はバルバロイアーマーをマジマジと観察している。

いろんなところを弄っては反応を確かめているようだった。

「核にしている部分は問題がないが……他は調べねえとなんとも言えねえな」

「どうにかできるか？」

「できなくはないと思うがな。時間をくれよ」

「ああ、いい結果を期待している」

「俺の店はアンちゃん御用達だろ？　ついでに今はあの化け物の素材を配布しているような状況でな。上手くいけば使えるようになるかもしれねぇ」

霊亀の素材は腐るほどあるからなぁ……。

オストからの礼と思えば悪い気は……微妙に悪い気がしてくるな。

「後で金を払うなら色々と作ってやってもいいぜ」

「いいのか？」

「他ならぬアンちゃんの頼みだし、未知の素材に興味が尽きねえ。こりゃあ相当の名工が作ったもんに違いねえな」

「おお……」

金が心許ないのにこの懐の深さ……ほんと報いたいと思う度量のある奴だよなぁ、武器屋の親父。

正直言えば領土の鍛冶師としてぜひとも欲しい人材だ。

今は引き下がっておくが、領土の開発が済んだらもう一度頼むとしよう。

「とりあえずは優先順位だと鎧か……後は盾を作れば、アンちゃんには損にはならないだろ」

「そうだな。最悪、盾はコピーだけさせてもらえばいいし」

「わかってるじゃないか。じゃあ鎧は置いていけ」

「任せた」

「おうよ」
親父は鎧に付けていた核石を取り外して俺に渡す。
「核石は一応、アンちゃんが持ってな」
「いいのか？」
「後ではめ込むようにしておく。その時にでも金を払ってくれればいい」
「助かる」
「アンちゃんはその間どうするんだ？」
「城にある中古の鎧でも着ているさ。そんなわけで頼んだぞ」
「おうよ！　で？　他にもあるんだろ？」
親父の言葉に俺は頷く。
「次は……」
天女の胸当てとラフタリアが着ていた巫女服をカウンターに載せる。
フィーロ着ぐるみはどうするかな？　後でいいか。
「なんだ？　胸当てと……巫女服だな」
「異世界で使っていた防具だ。鎧と同じく使用不能なんだがどうにかできないか？」
上手く使えればかなり優秀な装備だからな。
ラフタリアの外見のこともあるし、無茶を覚悟で頼む。
「こっちは元々フィーロ着ぐるみを元に作ってある。今、フィーロが使っている寝巻きもそうだが、それは機能してるから問題ない」
「難しい問題ばかりだぜ……そもそも巫女服って嬢ちゃんが使ってたのか？」
俺は頷く。ラフタリアに聞こえないよう、親父に耳打ちする。
「ものすごく似合うからこっちの世界でも着せたいんだ。どうにかしてこれ以外の装備はないってことにできないか？」
「そんなことを企んでいるんですか……」
どうやら聞こえてしまったようだ。ラフタリアがいない時に頼めばよかった。これは失敗したな。

「アンちゃん。嬢ちゃんの巫女姿がそんなに気に入ったのか？」
「割と。語ると夜までになるかもしれないがいいか？」
「やめてください」
「アンちゃんが行った世界では服が防具として優秀なんだろうが、こっちじゃ限界があるからな。むしろ洋裁屋や裁縫屋の管轄だぜ……」
ああ、あのフィーロの服を作ってくれた同人やってそうな奴か。
アイツも元気そうだよな。
「一応預かっておくが期待しないでくれよ」
「わかっている。できたらの範囲でいい」
「ナオフミ様、最近私を着せ替え人形にしようとしていませんか？」
「娘を持つ父親の気持ちと言え」
「ナオフミ様、それはどういう――」
ラフタリアの詰問を俺は適当に誤魔化して回避した。
親父の腕に期待だな。
「ま、こんなところか。金の工面ができたらまた来る。その時は頼むぞ」
「あいよ！　アンちゃんの装備でしばらくは研究ができそうだぜ」
「良いものができることを期待してる」
そんな感じで俺達は武器屋を後にした。

四話　Eフロートシールド

「さて……」
女王とこれからの方針を話し合うのも悪くはない。
どうせ中古の装備を譲ってもらおうと思っていたし……城に帰り、女王がどこにいるかを尋ねる。

会議が終わって部屋で書類を纏めているらしい。
書類が山のように机に載った部屋に女王がいた。
「女王」
「イワタニ様達ですか。どうしました？」
「倉庫の装備品は譲ってもらってもいいんだよな」
「はい。問題はありません。ただ、今回の戦いで少々劣化したものが多いです」
「わかってる。いらないのなら領地で使いたいだけさ」
後はどんなものがあるかを確認しに行くか。
「そうだ。ラフタリア、フィーロ、リーシア」
「なんですか？」
「馬車に物品をある程度運んでおいてくれ。領地で使うから軽めの装備品を重点的にな。フィーロはこれから定期的に馬車で荷物運びを頼むぞ」
「はーい！」
ラフタリア達が頷いて俺より先に倉庫の方へ歩いていく。
ま、フィーロも呪いの影響で弱体化してるから重いものを運べるかどうか怪しいんだけどな……。
もう一匹、フィロリアルを育てるかな？
「そうそう、丁度イワタニ様をお呼びしようと思っていたところです。倉庫前の訓練場に霊亀の素材を集めたのでお納めください」
「わかった」

俺は女王と別れて城の倉庫前に行き、文字通り訓練場を覆い尽くして山積みになっていた霊亀の素材を確認する。
「おいおい……」
山の中から大きな目玉や、脳ミソが出てきて驚いた。
ただ……如何せん相手が知り合いだからこう……嫌な感じがするな。
そう思っていたら……。

「な、なんだ!?」
霊亀の素材が淡い光を放って勝手に盾に入る！

霊亀の甲羅の盾の条件が解放されました。
霊亀の皮の盾の条件が解放されました。
霊亀の肉の盾の条件が解放されました。
霊亀の骨の盾の条件が解放されました。
霊亀の血の盾の条件が解放されました。
霊亀の体液の盾の条件が解放されました。
霊亀の免疫細胞の盾の条件が解放されました。
霊亀の筋の盾の条件が解放されました。
霊亀の心臓の盾の条件が解放されました。
霊亀の心筋の盾の条件が解放されました。
霊亀の血管の盾の条件が解放されました。
霊亀の心臓眼の盾の条件が解放されました。
霊亀の瞳の盾の条件が解放されました。
霊亀の神木の盾の条件が解放されました。
霊亀の使い魔（蝙蝠型）の盾の条件が解放されました。
霊亀の使い魔（雪男型）の盾の条件が解放されました。
……etc.

霊亀の心の盾と接合します！
強制解放！

霊亀シリーズがコンプリートできるくらい途方もない数の盾が出た。

統一して防御力が高い。

というか……霊亀の盾が全て勝手に解放されたんだが……。

凄いな霊亀の心の盾。

俺の視界に、霊亀シリーズ周辺のバックスクリーンに霊亀の姿が映し出されてるぞ。

で、内容は……っと。

お？　解放済みでスキルが使えるようになっている盾を発見。

霊亀の甲羅の盾　0／40　C
解放済み……装備ボーナス、スキル「Eフロートシールド」
専用効果　グラビティフィールド　Cソウルリカバリー　魔法防御（大）
熟練度　0

Eフロートシールドか……エアストの略称かな？

どんなスキルなんだ？

試しに変えて、唱えてみる。

「Eフロートシールド！」

すると視界にONという字が浮かび上がり、空中に盾が出現した。

……やはりエアストシールドみたいなものか？

そう思いながら近づくのだが……俺が歩いた分、盾が移動する。

なんだ？　俺を基軸に出現する盾なのか？

位置的に言えばエアストシールドと流星盾の間のスキル？

と、思いつつ、効果時間を測定する。

……消えない。効果時間が長い。

うーむ……考え込んでいると俺の目の前でEフロートシールドがくるくると回り始めた。

なんだろう……つーか邪魔だ。どけ。

そう思ったら思い通りに逸れた。

……思った場所に移動する魔法の盾か。こりゃあ便利だな。

チェインシールドよりも便利だ。あっちは拘束効果もあるから、差別化はできているけどさ。

射程範囲は一メートル程度。

ONとOFFができるところを考えるにセミパッシブスキルだな。

SPは……三〇秒ごとに少量ずつ減っている。

燃費自体は悪くない。特にスキルを使わなかったら自然回復するSPと合わせて赤字にはならないぞ。さすがは霊亀の素材から出た盾といったところか。

「チェンジシールド」

チェンジシールドを唱えるとEフロートシールドもそれに合わせて形状を変える。

おお……結構便利なスキルだなこれ。一枚しか出せないのがネックだけど。
他の盾は……単純性能は高いけどステータス系や耐性アップ系が多い。
霊亀の心の盾とリンクしていて、どれも性能がアップしているようだな。
ただ……役目を終えたとばかりに霊亀の心の盾の基本性能が若干低下している。
まあ、今までがんばってくれたんだからしょうがない。
「ナオフミ様！」
盾の実験を終えて休んでいるとラフタリア達が駆け寄ってきた。
「準備は終わったか？」
「はい。後は奴隷商さんのところへ行くだけですよ」
「そうか。じゃあ行くぞ」
「はーい！」
フィーロがフィロリアル形態でご機嫌に馬車を引く。
微妙に腰に力を入れているな。やはり能力低下で重く感じているのだろう。
「おや？　準備は終わったのですか？」
女王が散歩でもしていたかのように近づいてくる。
「一応な。残り物は後で領地に届けてくれ。肉類は当面の食事に充てる」
奴隷共のＬｖを上げたらしばらくは食費が凄い勢いで飛んでいくからな。
食料の当てがないわけではないが、色々とやるつもりだからな。まずは領地の整備からだ。
「では兵士の一部を作業の支援に派遣いたします。ご自由にお使いください」
「ああ、感謝する。準備のために出かけてくる」
「何でも言い付けてください。できる限り対応いたしますので」
「わかった。とりあえずは建設資材と泥棒対策の警備だな。今夜には出発するから準備しておいてくれ」
奴隷を大量に馬車に乗っけて出発する勇者とか風聞が悪いだろうし、夜に出た方がいい。
フィーロって鳥目かと思ったけど、夜でも目は利くし、夜の移動でも問題はあるまい。
「了解しました」



女王の返事を聞いた俺は頷き、城から出て奴隷商のテントへと向かった。

奴隷紋の登録を終え、奴隷どもが不安に震えているようだ。
ここはビシッと指示を出した方がいいだろうな。
ラフタリアも最初は臆病、フィーロは我が儘だった。
一気に数が増えるんだ。これまでの経験を生かさせてもらう。
「これからお前達は俺の奴隷となる。なーに、言うことさえ聞けばひどいことをする気はない。だが——」
あまり甘い条件を提示しておくと舐められるからな。
「怠け者は嫌いだ。真面目に働かねば遠慮なくお前等を売るから覚悟しておけ！」
俺の宣言に合わせて奴隷商が部下に命令してなんか銅鑼のような楽器を鳴らす。
……誰がそんなことをしろと言った。見ろよ、怯えているじゃないか。
いや……原因は俺だろうけどさ。
「ヒィイイ！」
よし！　いい感じに脅えてんぞ！
「あーもう……また誤解が……」
「ふぇえええええ」
「あとは行商をしたいので乗り物になる魔物が欲しい」
「ではフィロリアルを寄付させていただきます！　ハイ！」
「いや、そうじゃなくてだな。フィロリアルは一匹だけで他の種類の魔物も欲しい」
「フィロリアルは苦手で？」
「あいつ等でも使えそうな手頃な魔物がいいんだ。他に土壌整備とかに使えそうな奴だ」
町では馬やフィロリアルだけじゃなく、牛とか芋虫みたいなのに荷車を引かせている光景をよく見る。
それに、フィロリアルまで育てたとして……フィーロがいっぱいになるんだろ？
『「ごしゅじんさまーおなかすいたー！」』
想像するだけで寒気がする。勘弁してほしい。仮に育てるにしても一匹ずつだ。

特にフィロリアルに関しては管理を厳重にしなくちゃいけない。
戦力的なことを考えたらいいのだろうが、まだ下地作りの段階だ。あの食欲の化け物を群れ単位で育てるのは難しいだろう。
霊亀の肉があるといってもずっと城下町で餌をやり続けられるわけでもないし。
できることからやっていかないと、管理ができずに借金塗れになるという未来が容易く想像できる。
「なるほど……では見繕っておきましょう」
「任せる」
「卵からがよろしいでしょうか？　それとも成体を購入されますか？　一応、卵の方がお安いですよ」
「今のところは卵でいいだろ」
「了解です。ハイ」
奴隷商は魔物を扱っているテントへと歩いていった。
それから俺は奴隷項目を設定する。
ふむ……よくよく見ると仕事の禁則事項とかも設定できるようだ。
後で従事させる仕事を考えよう。
テントから外を見ると、日が沈みかけている。
「リーシア、俺はこれからお前に役目を与える」
「な、なんですか？」
「これからお前にはラフタリアやフィーロと一緒に俺が購入した奴隷や魔物の育成を手伝ってもらいたい」
「は、はあ……」
「お前が筆頭になって行え」
リーシアのような器用貧乏タイプは状況分析さえ覚えさせればリーダーとしての資質が高い。
一応、護衛としてラフタリアやフィーロがついていくだろうが、Ｌｖだけ高いような戦力外を作るつもりはないんだ。
単純に戦闘を経験することに意味がある。
だから徐々にラフタリアやフィーロを戦線から離脱させる。

この環境はリーシアにＬｖでは測れない強さを経験させるにはもってこいだ。
「もちろん。変幻無双流のババアの修行も並行して行うんだぞ」
「はい！　がんばりましゅ――」
また噛みやがった。まったく……コイツという奴は。
「盾の勇者様のご要望通り、卵を見繕っておきましたです。ハイ」
奴隷商が何個か卵を持ってくる。
「ああ、礼を言うぞ。さて……」
んー……必要なことがあるか。
「……その前に」
揉み手をする奴隷商に振り返って告げる。
「飯を作ってやる」
フィーロが持ってきた霊亀の肉を使った料理を、俺はテントで作って披露した。
基本の焼き肉、そのほかにスープ、鍋。
霊亀の肉が素材だからな、少し変わった味だ。
「お！　おいしい!?」
「何コレ？　お母さんのよりも美味しいわ!?」
「うん！　なんだろ？」
「ナオフミ様は料理がとてもお上手なんですよ」
「うん！　フィーロ、ごしゅじんさまの料理大好き！」
奴隷達が和気あいあいと料理を貪る。
「こりゃあ絶品ですな。勇者様の手料理に私、頬が落ちそうです。ハイ」
どさくさにまぎれて奴隷商やその配下も食っているが……気にしたら負けだな。
こいつらに作ったつもりはないが、場所を提供してもらっているし文句は言わないでおこう。
「ちゃんと言い付けを守ったらまた食わせてやる。存分に働けよ」
俺の言葉に奴隷共が料理を食いながら頷いた。

前祝いのようなものだ。
これから忙しくなるんだからな。栄養をつけておかなきゃもたないだろ。
そんな感じで食事を終えた後、奴隷共と奴隷商人とその配下を連れて俺達は夜の城下町を抜けて領土へと出発したのだった。

五話　セーアエット領

フィーロに馬車を引かせてゆっくりと夜の行軍をし、朝方には領土であるラフタリアの村の周辺に到着した。
「ごしゅじんさま着いたよー」
女王の話だと、エクレール達がいるのはラフタリアが住んでいた村ではなく隣町辺りのようだ。
しばらくして若干荒廃した様子の町に辿り着いた。
「あ……」
町の入り口には国の兵士……というか二度目の波の時に俺と一緒に参加したいとか言った少年兵がいた。
「盾の勇者様！」
「久しぶりだな」
「はい！　霊亀の時も近くにはいたのですが、話まではできなくて……」
よくあの戦いの中で生き残ったと素直に称賛する。
かなりの死者が出た接戦だったから参加していたとなるとゾッとするぞ。
「話は聞いております。エクレール様とメルティ様のところへ行くのですよね？」
「ああ、まずは挨拶だけでもしておいた方がいいと思ってな」
「ではこちらへ」
兵士の案内で俺達は廃墟と化している町へと足を踏み入れた。
波での被害なのか、崩れ落ちた家やまだ使えそうな家などいろんな建物が続いている。
……そこまで大きな町ではなかったみたいだ。

屋敷も普通で、他の町に比べたら大きいというほどでもない。
で、少年兵が屋敷の門番に話しかけると扉はアッサリと開いた。
「よ！　は！」
屋敷の庭から何やら掛け声が聞こえてくる。
馬車を降りて俺は庭の方へ行く。
するとエクレールとババア、キールと知らない子供が三人、稽古っぽいことをしていた。
「イワタニ殿！」
来客に気付いたエクレールが稽古をやめて俺達に手を振る。
「あ、メルちゃんの匂い！」
フィーロが馬車を引くのをやめて屋敷の方に駆けていく。
「調子はどうだ？」
「盾の兄ちゃん久しぶり！　聞いたぜ、異世界に犯人を倒しに行ったんだろ？」
「ああ、仕留めてきたぞ。後で奴の最期を聞かせてやろう」
「くー……俺も着いていきたかったぜ！」
キールは悔しそうに地団駄を踏んでいる。
お前がついてこられなかったのは無謀な戦闘をして怪我の治療をしていたからだろ。
「キール、お前の怪我はもう大丈夫なのか？」
「大丈夫だぜ！　兄ちゃんのお陰でそこまで深くならなかったからよ！」
「お久しぶりですね。キールくん」
ラフタリアが微笑んでキールに近づく。
するとキールの周りにいた子供が数歩下がって絶句している。
「聞いて驚けよ。これがラフタリアちゃんだぜ！」
「うそ……」
「アレがラフタリアちゃんなの？」
「別人みたい」

「ラフー」
その時ラフちゃんがラフタリアの肩に乗って鳴いた。
「あ、ラフタリアちゃんの声が聞こえる」
「この子？」
「何だその生き物？　ラフタリアちゃんの声がするぞ？」
「えっと……この子は、気にしないでください」
「ラフタリアの毛髪を元に作られた式神……こっちじゃ使い魔のラフちゃんだ。仲良くしろよ」
「へー！　ラフタリアちゃんの分身？」
「キールくん！　その言い方はやめてください」
とまあ旧交を温めているラフタリア達をしり目に、俺はエクレールと変幻無双流のババアに声を掛ける。
「経過はどうだ？　ここの復興を目指しているんだろ？」
「うむ……そのことなんだが……」
途端にエクレールのテンションがダウンする。
「エクレール門下生は稽古に力が入っているのじゃがな……復興の事業はそこまで進んでおらん」
「ほう……」
ババアでもわかるほど、復興が上手くいってないのか。
確かメルティに手伝いをさせているんだよな。
「亡き父の跡を継いで私もこの地を復興させようと思っているのだが……人もあまり集まらない。時間が掛かりそうなのだ」
「ま、親のコネだけじゃ限界があるよな。結構三勇教の被害とかあったらしいし」
「……」
ラフタリアの家族をはじめ村の連中もずいぶんと死んだらしいしな。
挙句、奴隷狩りにまで遭ったと聞いた。
「元々ここに住んでいた奴等も死んでるのが多いのなら、戻ってくる可能性も低い。しかも奴隷にされた奴等は国が没収する前に売られてしまって追跡中だろ？」

「そうなのだ……できる限り連れ戻すように根回しをしているが……」
「連れ戻してどうするんだ？　一〇人……いや、二〇人見つかったとして、こんな廃墟みたいな町に放って『さあ！　お前達が町を再建するのだ！』とでも言うつもりか？」
「……」
エクレールは黙りこむ。
図星かよ。もっと未来を見据えろよ。
「はぁ……」
思わず溜息が漏れるな。
エクレールの奴、とても真面目な性格をしていて騎士としては優秀だが、領主としての能力は足りないな。
「おい、キールを保護してくれた優男はどこだ？　国の幹部でもいい。復興のイロハを叩きこまなきゃいけない奴がいるぞ！」
俺はエクレールを指差して言い放つ。
「なんだと!?」
そこにメルティがフィーロに引っ張られてやってきた。
「メルちゃん、ごしゅじんさまはこっちだよ！」
「フィーロちゃん落ち着いて、わかってるから」
「メルティか、丁度良い。コイツに領地経営を任せるとか、馬鹿じゃないのか！」
「再会していきなりそれ!?」
「私の何が足りないというのだ！」
エクレールが不快そうに眉を寄せて言う。
「あのな！……メルティも理解しているだろうが、エクレール、お前は領主として必要なことを何も理解していない」
「なに!?」
「俺だってそこまで詳しいわけじゃないが、領地の経営、生活する上で必要なことくらいは理解している」
エクレールに座るように指差す。
メルティがエクレールにそれとなく座るように指示をしてくれたな。
ラフタリア達の方は……うん、とりあえず旧交を温めさせておくのがいいだろうな。
これから色々と忙しくなるわけだし。
「まず領地経営というのは土地を得ることだけじゃない。そこに住む連中が重要なんだ」
「そのくらいはわかっている。だから領地の者を取り戻そうとしているのではないか」
「取り戻しただけでどうするって言ってんだよ！」
俺は地面に人の絵を描く。これは人数だな。
「領地の復興に必要なのは人手と、衣・食・住だ！」
まずは食事の確保。異世界の場合は魔物とかを仕留めて食料にするのが手っ取り早いな。
次に生活拠点……家とかだ。そして衣服……異世界の場合は装備も含まれる。

「人手についてはエクレールが元々この地の者、失われた者を優先するその心意気は買おう。だが、無理だ。優先できる限界どころか根本的に足りていない」
「そ、それはわかっている。メルティ王女がその辺りの指揮をなさっているぞ」
「とは言ってもね。復興に参加する志願者がそこまで集まってないのよ。どうやら母上の考えだとナオフミが来たからシルトヴェルト辺りが協力を申し込むと思ってるみたいだけどね」
「確かにそれで上手くいくかもしれないな。だが、現実を見ろ。時間は有限なんだ。もっと貪欲に集めるしかないだろ」
はぁ……まあ、ここはラフタリアの故郷の村じゃないから俺が指図する必要はないんだがな。
「この国の貴族がどんな役目を担っているのか俺もよくわからんが、今必要なのは安全な生活なんだ。何が悲しくて未来が見えない廃墟を復興させなきゃならない」
エクレールが俺の言葉に俯く。
「俺がいない二週間半の間、お前は修行でもしていたのか？」
「……概ね間違っていないわね」
「いや！　私はキール達と協力して人を集めようとしていたのだ！」
「母上に進言はしたわね。配下の優秀な者も屋敷には来てるわよ。建物の修復を進めているわ」

メルティが事実を報告してくれる。
まあ、一応やることはやっているというところか。
「で、この町の復興が終わったら隣の村に取り掛かる計画だったってところか？」
俺の質問にメルティとエクレールが頷く。
「はぁ……まあ、好き勝手やるがいい。一応、俺が領主にはなったが町の方の復興はお前等に任せようじゃないか」
「え？　ナオフミは手伝わないの？」
「俺は隣の村を自分なりに復興する気だ。その上でお前等との連携も必要になってくる。だから他人任せというわけじゃない」
別にメルティやエクレール達の上に立って指揮をする必要はない。
同時並列で作業をすればいいんだ。
上手く俺の方で復興させられれば自然とこっちの町も人手が集まるからな。
「ということで」
俺が指を鳴らすと馬車から奴隷商とその配下がやってきて、キールの周りにいた三人を捕縛する。
「な、何をする気だ！」
「や、やめて！」
「ああ、やっぱり覚えがあるのな」
元々奴隷経験者なんだろうな。
「盾の兄ちゃん！　まさか……」
「ああ、キールは既に経験していたよな。そうだ。お前等が自分達の村を復興させるんだ。そのために、俺の奴隷となって資質を向上してもらう」
「わ、わかってるけど……」
「ナオフミ様！　強引なのはちょっと……」
ラフタリアが心配そうな顔で俺に尋ねてくる。
「問題ない。形式上だけだ」
「いや！　もう奴隷になんてなりたくない！」

必死に抵抗するガキ共。
だが、奴隷商の配下は拘束を解くようすはない。
「イワタニ殿！」
「慈善事業だけで村は返ってくるのか？　お前等はエクレールやメルティが復興させてくれるのを待つのか？　それで、本当に村に戻れると……本気で思っているのか？」
俺の問いにガキ共が呻く。
そうだ。とっくにわかっているはずだ。
失われた者は戻ってこない。
ましてやエクレールに頼ったところで現状が改善されるはずもない。
「俺の奴隷になれば……霊亀戦で大活躍したラフタリアみたいに強くなれるぞ」
「噂で聞いたけど……本当に？」
「キールも多少は強くなっているだろ？」
「そういえばキールくん、ちょっと見ない間にすごく強くなったように見えるよね」
「そ、そうだろ？　盾の兄ちゃんの奴隷になってLv上げたんだぜ」
キールが胸を張っている。
「ま、無謀な突撃をして入院したんだがな。今度は無茶をするなよ」
「うん！　俺が無茶をした所為で置いてきぼりにされたんだもんな！　絶対に無茶しない！」
「というわけだ。言わばお前等は盾の勇者に選ばれたんだから、素直に奴隷……勇者の使徒になって村を復興させる作業に従事しろ」
「言い方を変えてきたわね……」
「フィーロも勇者の使徒？」
上下関係は重要だぞ。
この世界の連中は、怠けているようなのが多いからな。
自分達の平和が黙っていても訪れるとか本気で思っている可能性は捨てきれないぞ。
「別にお前等じゃなくてもいい。だが、何もしないで……不幸が起こった時に抗おうともせず、また奴隷に身を落

とすつもりなのか？」

「盾の兄ちゃん……わかったぜ！　俺は兄ちゃんの方に付く！」

キールが俺の前に立った。

俺が言うのもアレだが、こいつってその場のノリで決めるところがあるよな。

「俺があの村を取り戻すんだ！」

「いい返事だな。お前等はどうする？」

俺の問いにラフタリアの同郷の奴等はそれぞれ顔を見合わせる。

「ナオフミは口は悪いけど、面倒見はいいわね」

メルティが援護とばかりに間に入る。

「正直……ここで養ってあげられるのも限界が来るわ。できれば、ナオフミの元で自立してほしいというのが私達の考えね」

「メルティ王女……」

エクレールがメルティの言葉に深く考えるようにして頷く。

「いいんじゃないかしら。ナオフミがこうして来てくれたわけだし、私達は私達でやって、協力して復興させていくべきじゃない？」

「……わかった。ラフタリアの友人達よ。君達の自由に選んでくれていい。私達もできる限り復興に協力する」

エクレールの宣言の後にラフタリアが一歩踏み出して友人達に提案した。

「その……このまま手をこまねいているよりは、自分達でやる方がいいと思うの。ね？」

そしてラフタリアは村のある方角を見て、それから屋敷に掲げられている旗を指差す。

「あの時失われてしまった旗だけど……今はもう目の前にある。みんなと一緒にあの場所を……あの旗を取り戻したい。そのために協力して！」

その言葉に友人達はしばらく考えていたようだが……。

「うん！　わかった！」

「ラフタリアちゃんは姿は変わっても、全然変わってないね！」

「そうだね。村にいた時もおんなじことを言ってたもんね」

「はい。みんなで、あの時の旗を取り戻しましょう！」

「「「おー！」」」

なんだか奴隷商が若干微妙な顔をしてるな。

こういう雰囲気は苦手なんだな。

「では、奴隷紋の儀式をしましょうです。ハイ」

「馬車馬のようにコキ使うつもりだ。楽しみだな……くくく」

俺が呟くと奴隷商がハイテンションになりやがる。

「やる気が出てきましたです。ハイ！　希望を植え付けてその上前をはねる計画に脱帽です。ハイ！」

単純なのか、人の不幸が好きなのかどっちなんだコイツは！

まあ、こうして俺はエクレールから領地を正式に受け取り、村へ行くことになった。

六話　餌付け

ラフタリアやリーシア以外の奴隷は拘束を厳しめにしてあり、不真面目な態度を取った場合、速攻で奴隷紋が作動するわけだが……。

初日は村の建物の残骸を撤去する作業を奴隷達と行った。

「この家は俺の大事な家なんだ！」

そう拒絶するのはキール。

どうもキールの家だった場所らしいのだが、破損した家屋が邪魔になっている。

「大事に思うのはいいが、屋根は落ち、壁は無残にも破壊されている。残念だが、補修できる家とできない家があるのを理解しろ」

何か金目になるものや使えるものはないかと調べたのだが、あっても錆びていたりして使えそうなものはあまりなかった。

井戸がまだ使えるのが救いか。

畑も……整備すればどうにかなりそうだ。

「思い出にしたいという気持ちはわからなくもないが、復興する上で邪魔になりそうなのは廃棄しないといけない」

「でも——」

「キールくん！　あんまり我が儘を言わないで」

ラフタリアが注意する。ま、止める必要はないな。

「ここはお前が住んでいた家なんだな」

「ああ！」

「じゃあ、そこに新しく建てる家はお前のものだ。ただし、お前が管理する共同の家となる。他にも人を集めるからな、責任を持って管理するんだぞ」

「う、うん……」

言葉を濁してキールは頷く。

「そういうわけだ——今だ！　フィーロ！」

「はーい！」

キールが隙を見せたその瞬間。廃屋にフィーロが突撃し、支柱を蹴り飛ばして破壊する。

「あぁぁぁぁぁあああああああああああああ!?」

呆然とするキールを置いて、俺は次の作業に移る。

昼前には女王に手配させた家の材料と城の兵士が到着した。

石材に木材……後は石膏か？

「盾の勇者様はここを復興なさるので？」

エクレールとメルティから話は聞いているだろうに、兵士が聞いてきた。

「ああ、せめて陽が落ちるまでに屋根のあるものにしたい。無理を承知で頼む」

「お任せください」

「頼んだ。とりあえず建物は兵士に任せて、ラフタリアとフィーロ、そしてリーシア」

「はい」

「なーに？」

「なんでしょうか？」

三人が俺の呼びかけに答える。

「これから昼飯を作る。お前等は飯を食い終わったら奴隷共と一緒に魔物退治に出かけろ」

「わかりました」

「うん」

「がんばります」

「班分けは任す。あんまり大人数で動いたら経験値の入りも悪くなるだろうからな」

実測で試したことはないけど、集団で戦った時の経験値ってどうなっているんだ？　というか分配方式なのか？　それとも共有なのかいまいち理解していないんだよな。

「誰か詳しい奴はいないか？」

「あの……」

リーシアが申し訳なさそうに手を挙げる。

「やっぱりこういう時はリーシアだよな。それで？」

「えっと……経験値はパーティーを組んだ人数全員に入ります。資質やＬｖによって上下しますが、公平に入ります。上限人数は六人。それ以上になると減っていきます」

ああ、だからお前は樹の仲間からハブられたわけか。

とか言ったら『ふぇぇえ』が飛び出すから黙っていよう。うるさいしな。

大人数で遠征する場合は班分けすれば問題はなさそうだな。一つの班を六人ずつで組ませればいいわけだし。

「余裕があったらエクレールとババア辺りも招集するか」

「はい。こちらで人の割り振りを致します」

俺はラフタリアに権限を渡して隊を作らせた。

現在奴隷の数は一〇人だからリーシアに四人、ラフタリアとフィーロに三人ずつ受け持たせよう。

キールはある程度強くなっているから、リーシアと組ませるみたいだな。

「じゃあ、飯を作るから作業を手伝っていろ」

「はい！」

三人は各々ができる範囲で手伝いを始める。
「ラフタリアちゃんは手伝わないの？」
放心から立ち直ったキールが料理の下拵えをしている俺を睨みながらラフタリアに尋ねる。
意外に復活が早いな。子供だからか？
「ラフタリアちゃん、料理上手だったじゃないか」
「ラフー」
「えーっと……」
困った表情でラフタリアは俺に視線を送ってくる。
なんだ？　俺に何を期待しているんだ？
何やら友人にいいところでも見せたいのか、ラフタリアは恐る恐る口を開いた。
「手伝いましょうか？」
「ん？　珍しいな。嫌ならしなくてもいいぞ？」
「いえ……ナオフミ様があまりにも手際がよかったので、手伝いができなかっただけで……」
「……そうか。じゃあこの肉を捌いてくれ。包丁よりも眷属器の刀で切った方が味が良くなるかもしれない」
「わかりました」
ラフタリアが手伝うとなると献立は何にするかな？
ま、妥当なところで焼き肉だな。
「歯応えが悪くなるから筋はちゃんと切れよ。絆じゃないが解体技能を持っていれば場所がわかるはずだからな」
「はい」
他には適当に煮物とかも作るか？　灰汁が出るから下準備とか面倒だが……。
手元の素材が少ないから作れるものも自然と種類が少なくなる。
野菜もいいが……あんまり手の込んだものを作っても奴隷共がすぐに完食するだろう。
うん、ちょっと勿体ないがせっかくラフタリアが手伝ってくれてるんだから香草焼きとかも作ろう。
「いい匂いがしてきましたね」
「まあな。他にスープでも作るか」

「はい」
肉を煮込んでスープ作りだな。
「ラフタリア」
「なんですか？」
「ついでにハンバーグとか作るから肉を挽肉にするのを手伝ってくれ」
「わ、わかりました」
俺達はテキパキと料理を作る。
思えばラフタリアと一緒に料理なんて、ほとんどしたことがなかったな。
親から料理を教わっていたと聞いたが、確かに手際はいい方だ。
「親直伝の料理とかあるのか？」
「ないことはないですけど……手持ちの食材じゃ作れませんね」
「じゃあ、食材が揃ったら今度料理してもらうとするか」
実は知り合いの女の子に料理を作ってもらうとか夢ではあった。
だが、大抵俺の知り合いって料理作らないんだよな……。
ラフタリアの親直伝の料理ってどんな味付けなのかを楽しみにするとしよう。
「な、なんかナオフミ様に作ってみせたら問題点を指摘されそうで怖いんですが……」
おや？　俺の想像とは違う返答をラフタリアがしたぞ。
「俺はどこの美食家だ？」
「違うのですか？」
「違うだろ」
別に俺自身が料理で相手に文句を言うことはない。
ラフタリアの頭の中にいる俺ってどんな奴なのだろうか？
できれば理想に近づきたいとは思うが、美食家扱いは心外だな。
むしろ美食家はフィーロとラフタリアじゃないのか？　特にフィーロは味にかなりうるさい。
「じゃあ……今度作ってみますね」

「ああ、楽しみにしている」

「ラフー」

ラフちゃんがポンとラフタリアの肩に乗っかって何やら鳴いていたのが印象的だったな。

「ほら、ラフタリアと一緒に俺が昼飯を作ってやったぞ。さっさと食って出かけてこい」

「やっぱ、すげえうめえ！」

「うん！　美味しい！」

奴隷共がこぞって笑顔で飯を貪る。

ついでに家を作ってくれる兵士達にも振る舞う。

「これは……今まで食べたことがないくらい美味い焼き肉だ!?」

「うそだろ？　材料があのカメの肉って……城でも同じのが出てきたけど、こんなに美味くなかったぞ」

盾の手作り補正は果てしないな。

ラフタリアの刀の補正も入って相乗効果的に美味くなったんだろう。

下ごしらえに香辛料と塩を練りこんでいたのが効いたか？

ハンバーグもあっという間になくなったぞ。

奴隷共はそれなりに俺の作った飯を食った。

Lv上げから帰ってくるとなると……それに備えて、もっと作っておかないとだめだな。

「さて、お前ら、それぞれに武器を渡す。それで戦ってこい！」

俺の宣言に奴隷共は怖気づく。城でもらった中古の武器をそれぞれに渡す。初心者用に大半が短剣だ。女の子の奴隷なんて、最初のころのラフタリアと同じように刃物を持って血の気が引いていた。

「戦わない限り、胸が苦しくなるから覚悟しろ。あと、お前等の故郷は帰ってこないと思え」

「わかってるよ盾の兄ちゃん！　やってくるから楽しみにしてろよ！」

まあ、やる気があるのはいいんだがな。

「俺は別にお前達じゃなくてもいい。ここを領地にするだけだからな。だが、俺の言うことを素直に聞いているラフタリアへのご褒美としてお前等を勧誘したんだ。履き違えるなよ」

憎まれ役はこの世界でも慣れている。別に俺は慈善事業をしようとしているわけでもない。どうせ元の世界に帰るのだから後顧の憂いなど気にする必要もない。ラフタリアが平和に過ごせる場所を用意できればいいんだ。

「口は悪いですけど、いい人ですから嫌わないでください」

ラフタリアが余計なフォローを入れてるな。

ここは鬼にならなきゃいけないところだろ。

「さて……フィーロ、倒した魔物は荷車に乗せてこい。使い道は沢山あるからな」

「はーい！」

当面は食料だけどな。

「ごしゅじんさま、どんな魔物が欲しいー？」

「できれば肉にしやすいやつだな。羊型の魔物がいるならウインナーとか作れるぞ」

「わかったー。じゃあ探してみるねー！」

俺はフィーロの馬車を指差して命令する。

奴隷共はしぶしぶ馬車に乗って、フィーロに引かれて狩りに出かけた。

「速度には気を付けろよー」

「はーい」

ごとごとごとフィーロが引く馬車は進んでいく。

とはいってもフィーロも呪いの所為でそこまで速度が出ないけどな。

「さて、じゃあ、家の建設を頼む」

「わ、わかりました」

兵士に建設を頼んで、俺は盾に調合を指示し、次の料理の準備を始めた。

魔物を孵化させるのはもう少し後だな。

霊亀の肉が底をつく前に、食材を調達する方法を模索しないとな……。

ラフタリア達と一緒に狩りへ出かけた奴隷達はその日の夕方には帰ってきた。

全員、くたくたになっている。馬車に連結させている荷車には倒した魔物がそのまま積載されていた。ご丁寧に

指名した羊型の魔物もあるようだ。
「うう……」
ぐううううう……。
きゅるるるるる……。
ぐぎゅるるるる……。
「腹減った……」
爆音のように腹を鳴らしている。
急成長しようとする体が栄養を欲して空腹を訴えているのだ。
「よく帰ってきたな。ちゃんと戦えたか？」
「ええ、みんながんばりましたよ」
「ふへぇ……疲れました」
「ま、ちゃんとがんばっているならいいだろう。飯だ」
俺は前もって準備していた霊亀の肉を使ったシチューやステーキをテーブルに出す。
こうなることは予想済みだったからな。量だけは無駄にある。
沢山作ったが、きっとすぐになくなるだろう。
「「わぁああ！」」
奴隷共は興奮しながら群がり、食べ始めた。
「ごしゅじんさまーフィーロのは？」
「あるぞ」
フィーロの分を出す。食べ盛りである奴隷達の一・五倍くらいだ。
「これだけー？　もっと食べたい」
「欲しいのなら、自分で狩って食え」
「ぶー……」
ふてくされるフィーロ。
残念だが、これでもかなりの量を作っているんだ。俺一人じゃ賄いきれないんだよ。

「「ごちそうさまでした!!」」
なに？　フィーロと雑談している間に完食しただと!?
子供の食欲は凄まじいというが……とりあえずは満足してくれたか。
「さてガキ共、明日に備えてさっさと寝ろ」
「……はーい」
城から派遣された兵士が半日かけて補修した家の一軒に奴隷達を押し込んで、残った方の家で俺達は休むことになった。
まだ窓とかは割れていて、雨は防げても風は吹きぬけの家だ。
「私はみんなのところで眠りますね」
「ああ、少しでも慣れるように頼んだぞ」
「はい！」
ラフタリアは昔の友人達と一緒に寝るために出ていく。
フィーロは既に半分眠っていた。コクリコクリとしている。
リーシアは絆達からもらった書物を解読中だ。地味に体力があるな。
俺は次の計画の準備のために調合を始めた。
合間に奴隷全員のＬｖを確認する。
一応、平均で15Ｌｖにまで上昇しているようだ。ステータスも軒並み上昇していた。
ラフタリアの成長パターンからして戦闘の適性がない奴でも30までは上げておきたい。
それからしばらくして……コンコンと部屋の扉を叩く音が聞こえる。
「あの……」
なんかラフタリアが……女の子の奴隷達を連れてやってきた。
「どうしたんだ？」
「えっと……」
言葉を濁しながらラフタリアは俺に何かを頼もうとする。

なんだ？　察しろとか無茶なことを要求する気か？
「おねしょか？」
「違います。ほら、ナオフミ様にちゃんと言ってください」
「えっと……その」
ぐー……っと腹の音を立てて女の子奴隷達が恥ずかしそうに俯いた。
「……はぁ、わかった。どうせ他のガキ共も同じことになっているんだろ？」
「ありがとうございます」
俺は外の調理場に向かい、料理の準備を始める。
ホント、腹減るの早いな。
狩りに行かせた時に持ってきた魔物を捌いて、適当に串焼きにする。
小さいのは面倒だから丸焼きにしよう。
軌道に乗ったら早速、料理班とか作らないと俺の時間がないぞ。

そんなこんなで翌日。
「さて、夜食まで食ったお前等に言っておこう。食料は日に日に減る。増やすには狩りで補わねばならない。つまりお前等が狩ってきたもので俺は次の献立を考えている。わかるな？」
「「「うん！」」」
……妙に素直だ。
若干気持ち悪いが、やる気が出ているのなら問題はないだろう。
「夕飯までは作ってやるが、次の飯はまだだ。そこは勘違いしないように」
「「「……はーい」」」
昨日の夜は大変だった。
作っても作ってもお代わりを要求するし、本当に腹が減っているみたいだった。
ここに着いてからずっと飯を作っている気がする。
俺は母ちゃんじゃないっての。

ある程度成長が止まったら色々と仕事を教えるつもりなんだ。
それまでの辛抱だな。
「「「ごちそうさまでした！」」」
「おそまつさまだ。さて、じゃあ夕方まで狩りに行ってこい」
「「「はーい！」」」
昨日よりは表情が明るめでみんなフィーロの馬車に乗っていく。
爆走はさせていないから酔う奴は少ないと思いたい。
……帰ってくる頃には平均20と少しくらいまで上がっていてくれたらいいのだが。
目下必要なのは、食材の調達だ。
下手にあれを使って変異されようものなら何が起こるかわからないからなぁ。
だがとりあえず、困った時に役に立つあの道具に頼る時が来たようだな。

七話　バイオプラントの運用

「「「ただいまー！」」」
全員泥だらけになりながらも笑顔で村に帰ってくる。
昨日よりも元気だな。反面、リーシアはくたくたになっている。
ラフタリアやフィーロは特に疲れた様子はない。
まあ、二人とも呪いの影響があっても強いからな。
「おう、お前等今日もがんばって狩りをしたか？」
「うん！」
「あったりまえだろ！」
子供の適応力はすさまじいものがある。二日目にして慣れたか。
「じゃあ約束通り、飯は作ってあるぞ」

「「わー!!」」
掻き込むようにして用意した夕飯を貪る。
「さて、ラフタリア」
「なんですか?」
「飯の後は、ちょっとしたことをする……ある意味、怒られるかもしれないことだ」
「な、何をするのですか?」
「ジャングルだよ。絆のところでも役に立っただろ?」
俺の返事に思い当たることがあったのだろう。
ラフタリアが青ざめる。
「あれを植えるんですか?」
「ああ、どうせこの辺りは荒野が続いているしな。丁度良いだろ?」
「ですが……」
「後の世を考えると土壌に問題が起こりそうだよなぁ……一応、奴隷商に土壌整備ができる魔物を頼んでおいたけど」
「その……わかりました。背に腹は代えられませんよね」
「ものわかりがよくて助かる」
「効率を考えたらしょうがありません」
ラフタリアは効率主義者だよな。微妙に世間体を気にするタイプでもあるが。
とは言いつつ、ラルク達にラフタリアの教育について文句を言われた。
なんか俺の真似して値切り交渉とかしてたらしい。
客観的に聞きかされると、反省しなきゃと思わせられる話だったな。
「ついでに色々と研究したかったんだよ。薬草とかも生産できないかって」
「待ってください。まさか更に改造するつもりですか!?」
「ああ、できれば金になるようなものを実らせるつもりだ」
そう、俺の計画では金も必要になる。一〇人程度の奴隷で村を再興するなんて不可能だろう。
仮に奴隷商に頼んだ奴隷が追加でやってきたとしてもだ。
「一応、管理がしやすいように滅茶苦茶な改造はしない。あいつ等が育ってきて、問題に対処できるようになるまでは食料生産を最優先だ」
「はぁ……本当に、気を付けてくださいよ」
「わかってるって」
根底から破綻するような真似をするわけにはいかないけど、やれることはしていかないとな。
こいつ等には戦闘以外でも金稼ぎをしてもらう予定だし。
そんな風に考えていると、あっという間に今日作った飯がなくなった。
「「ごちそうさまでした!!」」
「おそまつさまだ」
ガヤガヤと楽しげな会話が聞こえてくる。
ここに来て数日だというのに大分生活にも慣れてきたみたいだな。
キールを含めて四人は土地勘もあるし、故郷というのも理由の一つか。
少なくとも奴隷として生活するよりは精神的に安定もするだろうし。
「さてお前等、ここで一つ重要な話をする。ちゃんと聞けよ」
「なーに?」
フィーロと同じく奴隷が首を傾げて聞いてくる。
「いいから全員ついてこい」
俺は畑の方に歩いていき、全員がちゃんとついてきたのを確認する。
「ここに一つの種がある。南西の村でちょっとした問題を起こした植物の種だ」
この話題を、城の兵士達は聞いた覚えがあるのだろう。囁き合う。
「それを改良したものがこれだ。お前等、昨日の夜は腹が減って夜食を食ったよな?」
「う、うん……」
キールが頷く。
「さすがに毎日俺が料理するわけにもいかなくなるのはわかってくれ」

「でも……盾の勇者様の料理、とても美味しい！」

「そうそう！　毎日食べたい」

「お前等に作っているといる俺の仕事ができないんだ。もちろん、それ相応のがんばりを見せれば望み通りに披露してやる」

こういう開拓や復興事業ってなんにしても食料が最優先だ。

となれば、やることは一つ。

「でだ。今夜から俺が飯を作る時間以外に腹が減ったらどうするか、それを見せてやる」

俺はポンと地面に種を落とし、水を掛ける。

種から芽が出てみるみる成長していった。

バイオプラントは身の丈三メートルほどに伸びて大きなトマトのような実を宿す。

「ある程度繁殖力は制御してあるが、今夜中にはこの畑を埋め尽くすだろう。お前等の仕事は、この植物の管理だ」

「ど、どうするの？」

「定められた敷地を超えたら伐採しろ。とはいえ、予定範囲は大きめに取るから、まだ切らなくていい。実の収穫は任せた」

「その実……食べられるの？」

「ああ、南西の村じゃ今でも扱っているはずだ」

特産品として城下町で見かけた。料理の材料にも使われていたはずだ。

「腹が減ったら食べてもいい。ただし、何か問題が起こったら近くの大人に伝えろ。以上だ」

大きなトマトみたいな実をもいで、フィーロに与える。

食い足りないって顔をしていたフィーロはもぐもぐと食べ始めた。

それにつられて一緒に食べる奴もいる。

「すごいね……」

「うん」

「俺達がこの村を復興させるなんて最初は無理なんじゃないかと思ったけど、この人ならしてくれるって思えてきた」

何か不思議なものを見る目で見られているような気がするのは気のせいか？

この実の管理が上手くいけば食料問題は一気に解決していく。

むしろこの問題を解決しない限り、三ヶ月半という短い時間で役に立つ部隊を作るのは不可能に等しい。

俺が今まで異世界で得た知識や人脈、そして道具をフル活用してどこまでできるか試す時が来ている。

さあ……これからが正念場だ。

翌朝。

畑を覆い尽くさんばかりのバイオプラントを後目に朝の指示を出す。

「いてて……」

奴隷共は節々の痛みを訴えている……成長痛だな。

えっと、全員のＬｖを確認する。

昨日の推定通り20前後まで伸びたな。これからの成長が楽しみだ。

八話　海の男女

更に数日後。

「あはは！！」

バイオプラントで木登りをする奴隷達。

全員のＬｖは30前後になり、成長がなだらかになってきている。

ただ……どういうわけか、ほとんどの奴は外見年齢が十四～十五歳前後だ。

ラフタリアよりも若干幼い。これが戦闘に適した年齢なのだろうか？

顔も良くなるかと思ったのだが、思いのほか普通だ。

確かに他の子供とかと比べれば……という程度で、ラフタリアに匹敵する奴はいない。

栄養が行き届いていたらもしかして、というくらいだ。

男の中で顔が良いのはキールだろうな。
妙に女顔で美少年のうちに入るか？　男に言うには失礼だが、ボーイッシュって感じ？
イミアとかいうモグラ獣人は、多少は打ち解けてきたみたいだな。
キールと仲良く遊んでいる。
「なー盾の兄ちゃん！　最近、肉と野菜ばっかで飽きたよ」
「ワガママを言うな！」
最近、キールが俺に馴れ馴れしい。
ここはガツンと言ってやるのも手だが、やることはやっているから注意しきれないな。
なんか親しくなってきたからか、今までの奴隷生活をつらつらと俺に話して、最後は『ありがとう』で締める奴等が増えてきた。
やる気があるのはいいんだがなぁ……。
「海に行って魚捕ってくるから料理作ってくれよ、兄ちゃん！」
「お前の兄になった覚えはない！」
キールに関しては完全に舐められている。説教してやろうか。
盾の兄ちゃんなら認めるが、兄ちゃんは認めん。が、一向にやめる気配がない。
「あー……サディナ姉ちゃんがいれば魚介類を毎日食えるのになー！」
ふむ、ラフタリアも以前話していた相手だ。
確か水棲系の獣人だったか。
よほど頼りにされていたのか、ラフタリアをはじめ、この村出身の奴が時々名前を出す。
この際、どういう奴なのか詳しく聞いておくか。
「ラフタリア、前にも少し聞いたが、そのサディナという奴はどういう奴なんだ？」
「サディナ姉さんは漁師ですよ。そして、この村でも一、二を争うほど強い人です」
「そうか……となると波で……」
死んでいる、という言葉を使いそうになって濁した。
普通に考えれば波と戦って、戦死した可能性が高い。

「サディナ姉ちゃんがいれば波の敵も奴隷狩りも返り討ちにできたと思うぜ」
「……待て待て。そいつはそんなに強いのか？」
「おう！　サディナ姉ちゃんが負けたところを見たことないぜ。俺の見た感じ、騎士の姉ちゃんより強いぜ！」
エクレールより強い……？　それって相当強いことになるぞ。
しかしそうなると大きな疑問が浮上してくる。
「じゃあなんで波が起きた時にお前等の村は滅ぼされたんだ？」
「えっと……その当事サディナ姉さんは村の漁師達と遠洋漁業に出ていまして……」
なるほど、波が発生した時点でその場にいなかったのか。
しかも波が起こると様々な場所が荒れるからな。海も例外じゃなかったんだろう。
……これは俺の心に留めておくが、二次災害で死んでいる可能性が高いな。
仮にそれだけ強い奴が生きていたなら、ここに戻ってこないはずがない。
俺から話を振ったとはいえ、キール達には悪いがこの話はやめておいた方がいいだろう。
「なぁなぁ兄ちゃん！　海、ダメか？」
「ふむ……そんなに食べたいのか？」
丁度良いな。話題を逸らせる。
「兄ちゃんの魚料理食いたい！」
「食いたい！」
「食べたい！」
……フィーロみたいなのが大量生産されている。
フィロリアルの卵を孵化させなくてよかった。
「わかった。今日は海の幸を捕ってこよう。ついでにフィーロは泳いで魔物を狩ってこい」
「はーい！」
と、奴隷共と海へ行くことになった。
ここのところ暖かくなってきているしな。海水浴にはいいだろ。
そもそもこの村出身の連中は海は慣れているから泳げるんだよな。

少し歩いて浜辺に着いた。

「キャハハ！」

と、奴隷達が全員服を脱いで下着姿になり、銛を持って楽しげに海に入っていく。

「ラフー！」

おやおや、ラフちゃんも楽しそうに海へ走っていくぞ。

使い魔の技能改造で水中適性を上げるかな？　尻尾をスクリューのように回転させて泳ぐとか見てみたい。

なんて思っている途中で、とある問題に気付いた。

「フィーロ！　キールを捕まえろ！」

「へ？　わかったー」

「わ!?　なんだよ！」

海に入ろうとしているキールをフィーロがフィロリアル姿になって捕まえる。

あっという間に捕まったキールがフィーロの翼の中でジタバタしている。

「なんだよ、兄ちゃん！」

「とりあえず、お前の扱いについて、大きく考え直さなくちゃいけない問題が浮上した」

「だからなんだよ!?」

奴隷共が騒ぎに気付いて俺達の方を見ている。

そして、何が起こっているのか察したらしい。

ラフちゃんを肩に乗せたイミアがキールに近づいて尋ねる。

「キール君……もしかしてキールちゃん？」

「ラフフ？」

「はぁ？　何言ってんだよ。俺は男だ」

そのキールの胸にはサラシが巻かれていて、股間には……ふんどしが。そこにラフタリアが近づいて、なぜか当然のように股間へ手を伸ばした。

最近、ラフタリアの行動が読めない。

「キール君……男と女の違いってわかる？」

「は？」

「あのね……男の人っていうのはね」

ぼそぼそとラフタリアがキールの耳元で何かを囁く。

「そんなわけねーじゃん。俺が神様だったら男とか女とかめんどくさくしねーし」

「じゃあ他の男の子、いえ、ナオフミ様を見てみなさい。色々と違うし、胸は膨らんでないでしょ？」

「なに言ってんだ。あれは大人になったら生えてくるんだ。胸だって腫れてるだけで、そのうち治るさ」

生えてくる……凄い発想だ。

……キールって奴隷になる前はどんな家庭環境で育ってきたんだ？

オレっ子の女の子……俺の脳裏で絆が『呼んだ？』って手を上げている。

残念だが呼んでいない。『帰れ！』と心の中の絆に叫ぶと『酷い！』と言って消えていった。

いやいや、さすがにアイツはオレっ子だったが、女である自覚はあったぞ。

そもそも奴隷生活で気付かなかったはずがない。

まあ、男でも女でも関係なかったのか？　もしくは売った奴隷商人がマニア向けにと黙っていたかだな。この国は腐っているからな。必ずそんなクソみたいな性癖を持った奴がいるはずだ。

その手の変態からすればキールみたいなタイプは珍しいし、高値で売れるだろう。

俺達が相手をしたクソ貴族は虐待趣味だったみたいだがな。

まあどの奴隷にも虐待を受けていた痕があるから、どいつもこいつも嗜虐癖があったんだろう。

「で、でも父ちゃんが男子は自分が漢であれば、たとえなんであっても漢だって……」

海の漢ってやつだったのか？　娘はそれを真似て男と女の違いを知らずにいたと？

というか、その発言そのものがお前は女だと言っているようなものだぞ。

「キール君、かっこいいなって思ってたのに……女の子だったんだ」

「でも素敵よね。性別なんて関係ないわよ」

女の子の奴隷が楽しげに囁き合う。

確かに男装の麗人とかはあこがれの対象になるらしいが……海の男になりたがる女ってのはどうなんだ？

「そんな……そもそも男とか女とかなんのために分かれているんだ！　わけわかんねー！」

キールの奴、自分の性別が根底から揺さぶられて滅茶苦茶だ。

ん？　フィーロ……？　なぜ貴様がしゃしゃり出てくる。

「えっとねー……雄と雌が分かれている理由はね、交尾をするためなんだよ？　それでね――」

うろたえているキールにフィーロが答える。

それはもう濃密に……甘美な響きを纏わせながら、男と女の役割をフィーロは能弁に語った。

単純なものではなく、嗜好の領域に至る甘く甘美な儀式……。



俺は噂嗟にラフタリアの方向を眺めるが、ブンブンと首を振っている。

では、リーシアか？　とリーシアの方を見ると『ち、違います！』と叫ばれた。

あの説明が下手くそなフィーロがここまで濃密に話せるのは、誰かが教えた場合だけだろ。

ということは絆達、おそらくスケベなところを考えるにラルクだな。

「なぜお前がそこまで知っているんだ？　ラルク辺りに聞いたのか？」

「ううん。フィーロ最初から知ってた」

遺伝子からの記憶ってやつ？

いやいや……きっとフィーロは野性のフィロリアルの雄とやったことがあるんだ。

その時の囁きだったに違いない。ハミングフェーリーの時かもしれんな。

「なんか変なこと考えてるー！」

フィーロが心外そうな声で俺に抗議する。

知るか。まあ、フィーロが卵を産むかどうか観察しておかないとな。

「ぶー！」

最近、抗議がうるさいな。

「ラフー？」

「ラフちゃんはそういうことをしなくていいぞ。お前を嫁には出さん」

「なんでラフちゃんに父親みたいな台詞を言っているんですか……？」

「フィーロも言ってほしいー」

ふん。知らんな。メルティのところにでも嫁に行くがいい。

なんて雑談をしているとラフタリアを含め、全員が真っ赤になっている。

男子勢は……海に浸かって出てこない。大丈夫か？

「い、いやだ！　そんなことしてたまるか！　俺は兄ちゃんと絶対そんなことしないぞ！」

「なぜ俺がそんなことをしなきゃいけないんだ」

まるで性奴隷にするために買って育てたみたいな言い方はやめてもらいたいな。

クソッ。イライラしてきた。

これだから色恋に現を抜かしているガキ共は嫌いなんだ。

「くだらない話題をいつまでも続けるな。とりあえず決まりごとが一つ増えたな。恋愛は禁止だ」

「「「えー!?」」」

奴隷共が抗議する。

なんと言われようとダメなものはダメだ。俺が欲しいのは戦力であって、少子化対策ではない。

ボコボコ増えたガキと親の面倒を見るほど余裕はない。

そもそも三ヶ月半だ！　増える暇はない！

「そういうくだらないことは世界が平和になってから俺のいないところでやれ」

「なんでだよ！」

「なんで？　そんなの決まっているだろ？　俺が嫌いだからだ。それにラフタリアも嫌っている」

「ラフタリアちゃんが!?」

「え!?」

なぜかラフタリアまで声を上げる。

ああ、私に話題を振らないでってことか。わかったよ。

「俺の目的は波と戦うことだ。お前等の中で志願する者を波との戦いに連れていくつもりだぞ？」

「え!?　あの波と!?」

「そうだ。お前等の家族を奪った波を鎮めるために俺は召喚されたわけだからな。志願するのなら戦わせてやる」

奴隷はもっと増やす予定だし、何通りか班を設けたい。

「その前に鳳凰っていう化け物と戦うことになるがな」

その後、戦闘班は志願した奴等で作るのが理想だろう。戦闘は向き不向きもあるからな。

俺の言葉を聞いて、沈黙していたキールが不貞腐れ気味に口を開く。

「どうせ俺は女だったらしいから駄目なんだろ？」

「はぁ？　そんなわけないだろ。俺の周りを見てみろ」

俺はラフタリアとフィーロ、そしてリーシアを指差す。

「そ、そういえば女ばかりだ！　恋愛は嫌いって嘘じゃねえか!?」

キールがキレた！　何が不満なんだ。
「お前……参加したいのかしたくないのかどっちなんだよ」
「恋愛禁止って、女はぺらせて何言ってんだ！」
「別に俺はラフタリアが男でも問題ない」
「え⁉」
「ええ⁉」
「フィーロは？」
「誰でも問題ないぞ」
「ぶー！」
何が不満なんだ。こいつ等、一度講義してやるか。
「男女平等というのは男とか女とか比べないんだ。使えるのならどっちだって平等に使う」
「そっか……盾の兄ちゃん、両刀なんだね。挙句、人外もOKなんだね」
奴隷の一人がボソリと呟く。どこでそんな知識を知った？
「違う……」
「なーに？　両刀って？」
フィーロはそういうのは知らないのな。
やはり遺伝子の記憶か。というか人外もOKってラフちゃんとフィーロを見て言ったな？
「あのね、売られている時に聞いたんだけどね」
「説明するな！　とにかく下手に恋愛して戦えなくなったら困るんだよ。だから禁止だ」
納得しかねるといった感じでキール以外の奴隷が渋々頷く。
「そうか、じゃあ俺もがんばれば戦えるんだな！」
「ああ。だが、戦後のことを考えて……いや、そういった嗜好にヒットするかもしれないから、キールは行商の練習をしろ」
「なんでだよ！」
「この中で顔が良い方だからだ。物怖じしないし、行商には向いているだろ」

「お、俺が⁉　や、やだよ！」
「大丈夫だ。いつも通りにやればいい。人間の方が魔物より厄介で楽しめるぞ」
「盾の兄ちゃんに言われるとそっちの方が怖いよ！」
何かおかしいことでもあったか？
とにかく、行商班にはキールを入れるとよさそうだ。
男装でもさせてアクセサリー辺りを売らせたら女性陣に受けがいいだろう。
ついでにラフタリアも一緒に並べて男女共に金を差し出させればいい。
「ああ……キール」
「何だよ？」
「最初の頃、俺に反抗的だったのもラフタリアが好きだったからだろ？　残念だったな、お前が女で。さすがに同性では……戦えなくなることはないからいいのか？」
霊亀事件のちょっと前、キールは俺に対して多少警戒していたからな。
それもこれもラフタリアのためだと睨んでいたんだがな。
「ち、ち、ちげーよ！　兄ちゃんも何を言ってんだ！」
キールがなぜか震えだした。その視線の先は……。
「……ナオフミ様？」
メラッと殺気を迸らせながら満面の笑みでラフタリアが近づいてくる。
ふむ……やはりこの手の話題は禁句だな。
「そんなわけだ。全員、解散して海の幸を漁ってこい」
「はーい！」

それからしばらくしてキール達が戻ってきた。
「盾の兄ちゃん！　捕ってきたよ！」
うれしそうな顔でキールが網に貝とか魚を入れて持ってくる。
「はいはい」

鉄板は既に熱してある。後は捌いて焼くだけだ。
「キズナさん達の世界で学んだお刺身もありますよ！」
ついでにラフタリアが刺身を披露している。
問題は寄生虫とかだが……鑑定技能で見る限り大丈夫そうだな。
と、そんな感じで今日も……料理していた。いい加減、料理を作るのをやめたい。
そうだ。そろそろ、魔物の卵を孵化させてもいい頃合いか。
食料も大分集まってきている。問題もあるまい。
「飯を食い終わったら、帰るぞー」
「わかったー！」
昼過ぎになり、みんなで海から村へ帰る。
まずは魔物の孵化だな。
昨日の段階で大半の契約は終わらせておいた。
倉庫にしている納屋に並べてある魔物の卵の様子を見る。
「兄ちゃん、何するんだ？」
「食料の備蓄もある程度済んだだろ？　これは次の段階に入るための準備だ」
「へー」
「問題は……フィロリアルなんだよな」
馬車を引く魔物として優秀なんだけど、食欲魔人が二匹になると思うと不安になる。
「フィーロ？」
フィーロが首を傾げて聞いてくる。
「違う。新しいフィロリアルの卵だ」
「フィーロちゃんに妹や弟ができるの？」
「すごーい！」
騒がしいなぁ……見た目中高生なのに、子供っぽい。
いや、こんなものか？

「カテゴリーで言えばそうなんだが……」
「ごしゅじんさま、新しい子がフィーロみたいになってほしくないの？」
答えづらい質問をフィーロはしてくるな。
言い方によってはコイツはいらない子、と思われかねないぞ。
「乗り物として、馬車を引く魔物として欲しいんだ。食欲魔人はいらん」
「ふーん。多分、大丈夫だよー」
俺はそんな返答をしたフィーロに顔を向ける。
「ごしゅじんさまが望んでいないのなら、多分フィーロみたいにならないよ？」
……フィーロのアホ毛がフィロリアルの卵に向かってピコンピコンと動いている。
なんだその反応？　何かあるのか？
「フィーロの眷属が生まれるんだよね？」
眷属！
まあ……フィーロからしたら普通のフィロリアルはすべて眷属か。
「じゃあそうならないようにするね。ごしゅじんさまだけだと、なっちゃうかもしれないし」
「……できるのか？」
「うん！」
フィーロがフィロリアルの卵に触れて魔力を注ぐ。
「これでフィーロが命令しない限り、フィーロと同じにならなくなったよ」
「あ、ああ……助かる」
新しく生まれる命の可能性を摘み取ってしまったような気がしなくもないが……。
フィーロが大量にいても騒がしくなるからな。しょうがないか。
実験の結果によってはフィーロにフィロリアル育成を任せるかもしれない。
で、しばらくして魔物は孵化した。
「ピイ！」
一匹はフィロリアルの雛。若干、紫っぽい子だ。

次に芋虫が二匹……これが大きくなると馬車を引けるようになるのか。
名前はキャタピランド。卵の殻を盾に吸わせたが効果なし。
次にミミズが三匹。デューンという魔物らしい。土壌整備はこいつ等に任せられるのか？
基本的な禁則事項はセットして……。
「というわけだ。お前等、こいつ等のLv上げをしてこい」
「「はーい！」」
子供が親にペットを買ってもらったような感じで、みんなして魔物を入れた箱を担いで馬車に乗っていく。
フィロリアルの雛はフィーロの頭に乗っていて、生まれたばかりだというのに楽しそうに「ピイ！」って鳴いている。
……俺、異世界に来てなんでこんな大人数の親代わりをしているんだ？
気にしたら負け……自分を納得させるんだ。これも波に備えた投資だ。
「あ、それと」
「何？」
「そろそろ料理とか細かい作業をする班を新設するから、この中で料理を覚えたい奴は名乗り出ろ。どちらかというと戦闘は苦手でやりたくない奴でいい」
ラフタリアも手伝ってくれるようになってはいるが、それでも手が回らない。
「じゃ、わたしが……」
「私も……」
女の子奴隷とイミアという獣人が馬車から降りる。
「いいのか？」
確か、ラフタリアと一緒に夜食を要求してきた奴だったはず。
イミアの方は……全身毛が生えた獣人だからな。毛が入ると文句を言う奴が出てきそうだ。
食事班にはさせられないが……別の作業でもさせるか？
手先は器用らしいし、やりたいことでも見つけたのだろう。
「うん……料理、作るの好き。戦うのは……やっぱり……」

「そうか、じゃあ大変だけどがんばるんだぞ」
イミアの方を見る。
「えっと……何か細かいことなら、その、やりたくて」
「そうか、まあ少しずつ覚えていくが、Lv上げも結局やるんだから逃げられないぞ」
「わかってます」
イミアと女の子は頷き、俺の隣に立つ。
「行ってきますね」
ラフタリアが手を振る。
「おう、行ってこい」
「ラフタリアちゃん、心配しなくても大丈夫だからね」
「は？」
料理班になった子が手を振りながら呟く。
何の話だ？
「ね？」
「心配してません！」
なんだ？　ああ、俺が脅すかもしれないけど信じてるから安心してという意味だな。
「じゃあ行ってきます」
「いっくよー」
ガラガラと音を立てて、馬車は進んでいった。
「……さて、じゃあ手伝ってくれ」
「はい！」
こうして俺は料理や雑務を教えていくのだった。
「盾のお兄ちゃん、手先が器用だね」
「そうか？」
「うん、魚とか魔物とか捌くの上手！」

こう言われて悪い気はしないな。
「盾の不思議な力で美味しくなるわけで俺自身は上手じゃない。お前は……親に教わった味をイメージして作れ」
「うん！　じゃあ盾のお兄ちゃんにわたしが美味しい料理を教えるね」
親に教わった味……ちょっと地雷を踏んでしまったけど、笑顔で答えてくれた。
笑ってくれるのならいいんだが……。
結果で言えば、俺が教わる立場になってしまった……まあ、いいか。
「宝石をこういうふうに削ればいいんですか？」
「ああ、初めてにしてはよくできているじゃないか」
イミアの方は元々手先が器用な種族というのを考慮して、俺がやっている薬作りやアクセサリー作りを教えることにした。

九話　盾の看板

領地経営……もといガキ共の子守りを始めて一週間経った。
家の補修も大体終わり、次の段階に移るまでに至った。
フィーロの言う通り、新しいフィロリアルは可愛いまま馬車を引いている。
やはりピーチクパーチクしゃべらないのはいいな。
奴隷共が寝ている朝、俺が気分良く、新入りのフィロリアル相手にフィーロにもやったことのある棒を投げて取らせる遊びをやっていたらフィーロが棒を横取りして邪魔をされた。
「ごしゅじんさま！　フィーロが一番！」
新入りとの親睦を深めてんだ。邪魔すんな！
「ラフー！」
「いけ！　ラフちゃん！」
俺が投擲する振りをし、ラフちゃんが幻覚魔法をフィーロに掛ける。

「あ、まってー！」
どこまでも飛んでいく棒の幻覚を追いかけ、フィーロは走り去っていった。
キャタピランドも大きくなり、馬車の準備中だ。
この魔物は草食性でバイオプラントの幹を餌にしている。
邪魔になったバイオプラントを餌として与えればいいので、色々な意味で助かるな。
一石二鳥だ。しかも魔物商が選んだだけあって大人しくて扱いやすい。
難点は速度か。そんなに速くないので、近隣の村や町を回るのが限度だ。
デューンは現在、それなりに大きくなって、この辺りの土壌の整備を任せている。
これも大人しい性質の魔物だ。野生のデューンって地面に潜っていて普通は戦わないらしい。
人の手が入ったデューンは命令すれば戦うそうだ。あんまり強くないらしいけどな。
さてと……では行商を始めるか。
「ど、どうだ？」
キールには二つの服を用意させた。
一つは本人が好む男っぽい皮の鎧。
もう一つは、意表を衝く用のフリルのついたワンピースだ。安物の中古だがな。
それを着たキールは若干照れながら俺に評価を求める。
「よし、照れながら不器用そうに行商をするんだぞ」
「兄ちゃん！　なんで俺がこんなことをしなきゃいけないんだよ！」
「そりゃあ金のためだ。金がないとお前等の仲間を集められない」
「そっかー……でも、は、恥ずかしいよ、兄ちゃん……」
キールの行商。最初の巡回はフィーロにやらせて、俺が裏で観察しよう。
一応、キールには作った薬をラフタリアと一緒に売ってもらう予定だ。
「じゃあリーシア、Lv上げは任せたぞ」
「わ、わかりました！」
奴隷共に行商を覚えてもらうのは鉄則だからな。

こうでもしないと金を稼ぐなんて不可能に等しい。
三日程度、盾の勇者の看板を吊るした馬車で国中を回れば噂が広まるだろう。
そのために日々、薬を作っていたわけだし、俺がいるなら相当な重病だろうと治せるはずだ。
「じゃあ出発ー！」
「ちょ——兄ちゃん！　俺まだ乗り物酔い——」
キールを無視して出発。
その日は近隣の町のいくつかを一時間単位で回った。フィーロの全速力なら可能だ。
久しぶりの行商だ。町の連中も懐かしそうに顔を出してくる。
「聖人様が盾の勇者様だったんですね」
「あ、ああ……身元が割れると商売にならないと思ってな」
「あの節は申し訳ございませんでした」
「気にしなくていい」
どうせ口先だけで謝っているに過ぎない。
ここで俺が大きな問題でも起こそうものなら、やはり盾の悪魔だった！　と、憤慨するに決まっている。
俺はお客様は神様だなんて思わない。
元々あれって演歌歌手か何かの言葉らしいし、本来の意図とは別だ。
「領地をもらってさ、国の復興と波に備えるためにこうして薬とか色々手広く行商することにしたんだ。よければ利用してくれ。目印に盾の看板を馬車に吊るしておくからさ」
そう……今、俺の馬車には盾を模した看板を吊るしてある。
「勇者様は国や民のためにお考えなんですね」
こうして印象付けていけば買ってくれる層も増えていくだろう。
フィーロの配下にもフィロリアル・クイーン姿で引かせるのがいいのかもしれない。
だがなぁ……ピーチクパーチク騒がれるのはイヤだ。
誰か管理してくれるような奴がいればいいんだけど、そこまで思い通りにはいかないだろ。
「なんと、では盾の勇者様のためにも買っていきましょう！」

「「おー！」」
こういう時、風聞は便利だな。良い噂でさえもあっという間に広がる。
どこで知ったのか、次の町に到着すると同時に出迎えられた。
「兄ちゃん……こんな感じでいいのか？」
販売を終えて、キールが凄く恥ずかしそうに俺に尋ねる。
「ああ、ラフタリアほどの営業スマイルじゃないが、お前のぎこちない様子に可愛いと微笑んでくれた奴がいた」
「誉めてるのそれ？」
やはりこう……初々しさに癒しを受けるのはどの世界でも共通なんだな。
ラフタリアのフォローも上手くいっていたし、この調子で儲けさせてもらうとしよう。
格安だけど粗悪な薬草でも、盾で作らせれば普通の品質にできる。
その普通を材料に上位の薬を手作りすれば普通以上にはなるからな。
売り上げはかなり期待できる。
三日間の行商でそれなりの収益を得た。そのついでに薬草を買い取り、盾で薬を製造する。
キールや他の奴隷達も行商を見て覚えたようだし、どうやら順調だな。そのうち、行商の馬車をもっと増やしていこう。

そんな矢先のこと。
「これはこれは盾の勇者様」
村に奴隷商の馬車が来た。
最近、よく来るな。まあこの村出身の奴隷を捜せと頼んでいるわけだからしょうがないか。なんか奴隷共と話をしていたし、売れるなら奴隷にも売る気か？　まあ、俺は多少小遣いは与えているけどさ。
「ここにいた奴隷でも連れてきたのか？」
「生憎とおりませんです。ハイ」
「何しに来た！　帰れ！」
塩を撒くか？　暇だから食事をたかりに来たとか言い出したら張り倒すぞ。

「意味もなく顔を出したらこの対応、ゾクゾクしますね」
「お前は俺をシェフにでもしようとしている節があるからな！」
「というのは冗談です。ハイ」
「喧嘩を売っているのか？」
「いえいえ、盾の勇者様をお誘いに来たのですよ」
「……誘い？」
奴隷商は高らかに腕を上げる。いちいち大げさな奴だ。
どうせ、ろくでもないことだろうよ。
「ええ、あまりにも国内で見つからないので親戚に問い合わせたところ……ゼルトブルの方で取引されていると耳にしてきた次第です。ハイ」
「ああ、なるほど……」
つまり奴隷達がどこに行ったのかを見つけたから、こうして報告に来たわけか。
面倒臭い奴だな。
「片道でどれくらい掛かるんだ？」
「そうですねー……本来は船の方が早く行けますが、勇者様のご自慢のフィロリアルの足で一週間半というところでしょうか」
フィーロの足で一週間半か……遠いな。
とはいえ霊亀の国よりは近いか。
というか、随分前に勇者共がゼルトブルの武器屋が優秀だとか言っていたな。
アイツ等は一度行ったってことだ。
ああ、だからあの時点で思いのほかＬｖが高くなかったのか。
武器は相当優秀だったけどな。
「船だと？」
「二週間でございます」
「ふむ……」

俺はチラリと村の連中を見る。
なんだかんだでみんな真面目に復興作業に従事している。
ラフタリアは行商時の注意事項を教えていて、フィーロは昼寝をしている。
戦闘意欲の高い奴隷はキールと同じように暇を見ては隣町にいるババアのところへ出かけて教わっている。
まあ、仮に俺が出かけてもポータルで夜に帰ってくればいい。報告を聞けば対処可能だ。
「じゃあ行くとするか」
「そう言うと思っておりました！」
「ラフタリア、フィーロ、あと他の奴らも一旦集合」
俺は全員を呼ぶ。するとぞろぞろと集まってきた。
「俺はこれからゼルトブルへ向けて出発し、昼間は村を空ける。メンバーはフィーロと……」
ぶっちゃけ俺とフィーロが行けば、他の奴は後から連れていけるしな。
「ラフタリア、昼間の村を任せたぞ」
「え？　私は置いてきぼりですか？」
「えへへーお姉ちゃんお留守番ー」
「ラフー」
いつの間にかフィーロとラフちゃんが同行することになってしまった。
まあ、フィーロはいないと移動できないがな。
「一週間ちょっと、昼間だけだから安心しろって」
「ですが……」
「なんだかんだで最近は別行動も増えただろ。頼りにしてるから任せられるんだよ」
それともラフタリアはそんなにも俺のことが心配なのだろうか？
「……わかりました。何かあったらすぐに戻ってきてくださいよ」
「どうしても気になるようなら時々一緒に来ればいい」
「そうですね。便利な移動スキルがあるのですから、利用しない手はないですよね」
夜には戻ってくるし、日によってラフタリアがいてもいなくてもいい。

「じゃあ行ってくる」
「行ってらっしゃい、ナオフミ様！」
こうして俺は奴隷商の誘いを受け、ゼルトブルへ向かうのだった。

十話　ゼルトブル

旅は順調に進み、俺達はゼルトブルの首都に着いた。
「結構賑わっているな」
メルロマルクの城下町よりも賑やかな町並みをガヤガヤと通り過ぎる。
もちろん、到着時にラフタリアとリーシアを連れてきた。
色々と不安だし、戦えるようにしておきたかったからな。
夜には村に帰れたから遠出をしている自覚はなかった。
さて、ゼルトブルだが……なんていうか石造りのコロシアムっぽい建物が目立つ国だな。
「そういやゼルトブルってどんな国なんだ？　よく知らないんだが」
「では私が説明いたしましょう。ハイ！」
奴隷商が楽しげに説明を始める。
「商売と傭兵の国ゼルトブル。この国の生業は、その通称の通り商業と傭兵業でございます」
「ああ、そうだとは思っている」
「傭兵の意味はご存知ですな。戦うことで金銭を稼ぐ職業です。冒険者業の統括を行っているギルドとも深いパイプを持ち、武器防具の流通から薬品などの消耗品まで一手に引き受ける商業都市の側面も持っております。他の国に類を見ないほどの規模で金銭が動く国でございます」
トコトコと走る馬車の中から外を見ると、確かに頷ける。
メルロマルクの城下町も活気があるが、それよりも雑多な印象を受ける。
活気のある商店街とスラム街が交互に続いているような、そんな感じ。

「ちなみにこの国に王は存在しません。大商人が議員となって運営しております」
「へー……」
共和国的な方針の国か。
まあ傭兵の国、なんて謳っているくらいだからな。能力主義社会なのかもしれん。
「戦争にはゼルトブルの影ありと言われるほど闇の深い国でもあるので勇者様はご注意を」
「なるほど」
「私の一族もここに本拠地を構えておりましてね。儲けさせていただいております」
「……そうだとは思っていた」
なんていうか、昨日悪夢を見た。
奴隷商そっくりの連中が何十人も現れて俺に奴隷や魔物を勧める悪夢を。
「そして有名なのが様々な場所で開催されるコロシアムでございます」
「コロシアム？」
って闘技場だよな。
傭兵同士を戦わせて、賭博行為を行っているのか。
「この国の名物ですので、ぜひ勇者様もご覧になると来た甲斐があるというものですよ」
「考えておく。で、どこへ行けばいいんだ？」
「大通りから外れ、あちらの裏路地へと行っていただけるとよろしいかと」
「わかった。フィーロ」
奴隷商の指示する裏路地へフィーロを誘導する。
すると……どこからともなく縄がフィーロ目掛けて飛んできた。
「へへへ、珍しい魔物を連れてるじゃねえか！」
なんか野蛮そうな男共が現れる。
こいつ等、フィーロを知らないのか。
それにしても、誰かに似ているな、コイツ等。
「やー！」



「ぐはああああああああああああああ!?」

フィーロの首に縄を掛けて無謀な盗みをしようとしたアホが、フィーロに蹴られて宙を舞う。

「な、なんだこいつ！　大人しくしろ！　ぐは!?」

「凶暴な魔物だ！　早く締めあげ――ぬぐぐうううううううううううう!?」

あ、フィーロが馬鹿一人に頭から噛みついた。

ジタバタ暴れているけど、しばらくしてぐったりと動かなくなった。

……落ちたな。

「ば、化け物だぁあああああ！」

「助けてくれー！」

ペッとフィーロは落ちた奴を吐き捨てて、首に巻きついた縄を引きちぎる。

「もうちょっとしょっぱい方がいいなー。あんまり健康じゃないみたい」

「……」

本格的に人食いになりそうで怖い。

変な方向に成長しているような気がする。

「フィーロ、人は食べ物じゃありませんよ」

「んー？」

所詮はフィロリアル。理解力の発達が遅れているのか？

面倒だ。使い道を考えれば、こいつにはあまり知能はない方が好ましい。

「フィーロ、人はな、子供の方が美味しいんだぞ。柔らかくて」

「ラフ、ラフラフ」

「ナオフミ様も何を言っているんですか！　ラフちゃんも便乗しないでください」

ゲームとか小説の化け物とかがそんな話をしていたような覚えがあるので、教えてみる。

しかしフィーロは首を振って拒否した。

「やー！」
「フィーロにはこう言った方が効くんだよ」
「ああもう……理解されているのか、されていないのか……」
「だからフィーロ、脅し以外で人を食べるような真似はしない方が身のためだ」
「うん、なんかこうした方が逃げていくと思ってやったの」
む……脅しを理解してやっていたのか。意外と学んでいる。
あまりに頭が良いと困るが、この程度ならまだいいか。
「しょっぱいというのは？」
「舐めた味」
……そこから人の味を覚えないことを祈るしかないな。
馬車を奴隷商の知り合いの店に停め、俺達は奴隷商についていく。
裏通りを抜け、見えてきたのは大きなコロシアム。
石造りのドーム球場みたいな建物で、入り口では屈強な男が見張りをしていた。
どうやら人気があるようで人がズラッと並んでいる。
「こちらですよ」
と、コロシアムの裏口へと歩き、そこを見張っている男に奴隷商は軽く挨拶をする。
男は道を開けて、俺達を通した。
「ここは表面上コロシアムなのですが、地下は奴隷の販売を行う裏の市場なのです。ハイ」
「ほう……」
「まあ、この国のコロシアムの大半はそうなのですけどね。組合ごとに扱っている商品が異なりますです。ハイ」
「お前のところは？」
「言うまでもなく、メインは奴隷でございます。とはいえ、全てを統括しているわけではありません」
しばらく歩くと地下へ続く階段がある。
その階段を下りていくと、歓声が上の方から聞こえてきた。
結構繁盛しているみたいだな。

「コロシアムで儲けているみたいだな。どんな大会があるんだ？」
「主に決闘がメインですが、大食い大会なども開催されることがありますです。ハイ」
「フィーロを参加させたいな」
「んー？　フィーロ出るの？」
この食欲魔人がどれだけ行けるか見ものだ。
「可能性だ」
食費が浮いて、金も手に入るし。まあ……負けたら相応のリスクがあるんだろうが。
「それは面白い結果になるでしょうね。ハイ」
屈強な男に変な指示を出す奴隷商。お前の台詞に乗っただけなんだが。
「で？　まだなのか？」
「そろそろです」
そう言われて階段を下りきると、石造りの廊下の先に無数の檻が見えてくる。
奴隷商のテントよりも多い檻の数だ。中には人間、亜人関係なく奴隷がひしめき合っている。
その牢屋の先に小部屋が見える。
そこには……もう一人の奴隷商が待っていた。
「おー……メルロマルクのー」
「おー叔父よー」
俺は我が目を疑う。その……奴隷商が再会を喜んで抱き合っている相手だ。
奴隷商は燕尾服を着たメチャクチャ肥満体の眼鏡をかけた変な紳士なのだが、もう一人の商人もまったく同じ体型で顔もほとんど同じ。唯一の違いは眼鏡と燕尾服の柄だけ。
「ナオフミ様、私、目がおかしいのでしょうか？」
「奇遇だな、俺もだ」
「ふぇええ……」
一族経営だといっても、どこまでそっくりなんだよ。
やばい、正夢になっちまった。

どこかのアニメで似たような一族経営の治療施設のお姉さんがいたけど、これは……。
同じ格好をされたら見分けがつかないぞ。
「ということで、勇者様を招待した私の叔父です。ハイ」
「これはこれは盾の勇者様、はじめまして。その噂、私、惚れてしまいそうです。ハイ」
「やめろ！」
やべぇ、本気で鳥肌が立った。今すぐここから逃げたい。
ここまで来たのが無駄足になるのはむかつくので、我慢して反転しようとする足を止める。
「奴隷の扱いが上手そうな声……ゾクゾクします。私の娘の婿になってくださいませんか？」
奴隷商を女にしたような奴を俺は想像する。
「勘弁してくれ……」
「そうです。ふざけたことを言うためだけにナオフミ様を呼んだのですか⁉」
ラフタリアが怒って刀に手を掛ける。
ああ、同じ村の仲間を捜しているんだしな。怒るのも頷ける。
もっと怒れ、そうすればうやむやにできる。
「はっはっは、冗談ですよ」
「叔父も人が悪い」
「はっはっは、お前ほどではない」
二人揃って笑っている。不気味だ……。
「話を戻せ」
「もうその話をするのですかな？　もう少し勇者様と親睦を深めたいのですが。ハイ」
「それは叔父次第です。ハイ」
ハイハイハイハイ……この問答、いつまで続くんだろう。
もう本気で面倒だ。帰っていいか？
つくづく、奴隷商の勘とかセンスがわからん。理由はわからないが、俺が何を言っても肯定する。
逆に何か裏があるんじゃないかといつも警戒しているが。

「フフフ……禍々しき気に魅了されそうです。ハイ」
「俺は邪悪の権化か何かか？」
「いえいえ、奴隷使いとしての資質でございますよ。我等の先見の明が訴えるのでございます」
「この方は奴隷を生かさず殺さず、喜んで死地へ行かせるカリスマを持っていると」
『兄ちゃんーごはんー』
『ごしゅじんさまーごはーん』
『盾の勇者様ーご飯ー』
なんでアイツ等の飯催促の声が脳内で再生されるんだ？
あれがカリスマ？　……気にしたら負けだ。
「それはもういい。奴隷商。俺が欲している奴隷に関する話をしろ」
「わかりましたです。ハイ。叔父よ、聞いていた奴隷はどうなっているのでしょうか？　ハイ」
奴隷商はもう一人の奴隷商に尋ねる。
するともう一人の奴隷商……面倒だな、ゼルトブルの奴隷商は汗を拭った。
「その件なのですが、少々面倒なことになっているのです。ハイ」
「どういうことだ？」
「メルロマルクのに頼まれて私も捜しはしたのですが、なんとセーアエット領のルロロナ村の奴隷ではありませんか」
「そうです」
俺がもらった領地は元々エクレールの領地だし……そういやラフタリアの村の名前ってルロロナっていうのか。知らなかった。
「何か問題があるのか？」
「大いにありますです。ハイ」
「な、何があるんですか？」
ラフタリアが青い顔をして尋ねる。
俺も嫌な予感というか、面倒臭い事件が起こっている気がしてきたぞ。

「実は現在、ゼルトブルでは、メルロマルク国のセーアエット領ルロロナ村出身の奴隷は非常に高額で取引されているのですよ」

「……どうしてだ？」

どこをどうしたら俺が買い占めたい奴隷が高騰するんだよ。

運命とかそういうくっだらないものが邪魔をしているんだったら、俺にこんな運命を押し付けた奴をぶち殺したくなるぞ。

いや……取引に運命なんて曖昧なものは存在しない。何か高騰する理由があるはずだ。

波の被害にあった奴隷達だから？

違うな。それならもっと前から高額で取引されているだろう。

「その高騰が始まったのはいつ頃だ？」

「大体一ヶ月前からでしょうか？　その頃から領土名やルロロナ村の名前が広まり始めたかと。ハイ」

一ヶ月前……俺達がまだ絆達の世界にいた頃だな。こちらの世界では時間の流れが違うわけだから、霊亀が倒された辺りということになる。

「……俺達が原因じゃないか？」

多くの国を滅ぼした霊亀を倒した連合軍の総大将である盾の勇者。

その一番奴隷であるラフタリアの出身地。

敵を追って消えた勇者とその奴隷に注目が集まるのは自然の流れだ。

で、ラフタリアは俺ほど注目されていなかったから、その出身地と亜人という部分だけが一人歩きし始めてこうなった……考えすぎな気もするが、筋は通る。

「さすが勇者様です。ハイ」

「正解なのかよ……」

「私共としましても推測の域を出ませんが、その可能性が高いと思っております」

ちっ……英雄的行動が裏目に出るとは……。

「とある商人が高額で懸賞金を掛けたことが始まりだと記憶しております。ですが段々と勇者様の噂とルロロナ村の奴隷が注目を浴び、本物か偽物かの区別をつけることなく、ルロロナ村出身の亜人奴隷という札に高値が付いて一人歩きをしてしまっている状態です。ハイ」

取引する奴隷が実際にラフタリアの故郷、ルロロナ村に住んでいたのかわからなくなりつつあるこの状況で高騰し始めていると。

アレだ。これは奴隷じゃなくても起こる株式相場でいう泡のようなものなんだ。

いつ暴落するかわからない……日本円に例えるとわかりやすいな。

日本円が謎の高騰をし始める。

みんな、日本円を購入する。すると日本円の価値がますます高騰する。

もちろん売る人もいるが日本円を買う人の方が多いために円が高値になっていく……。

この円が今、ラフタリアの故郷、ルロロナ村の奴隷達ということなんだ。

「とはいえ、亜人の奴隷なんてそれこそ星の数ほどいる。いくら注目されているといっても、偽物の方が多すぎて無理があるだろう」

「その通りです。ですので、メルロマルクの公用語、更にはセーアエット領独特の方言を使えることが条件となっているです。ハイ」

そんなの教えれば覚えられるだろ。

……とはいえ、生まれ育った環境の言葉は意外にも根強いんだよな。

昔、知り合いに方言で話している奴がいたが、そいつは普通に喋っているつもりだったらしい。

だから、わかる奴なら違和感を持つ。

値段が高騰しているのは、そういう部分もあるんだろう。

なんせ、メルロマルクのセーアエット領ルロロナ村限定だからな。

「そんな……」

くらっとラフタリアがめまいを起こして数歩下がった。

俺はラフタリアを支える。

「……それで？　俺が用意した金で買えるのか？」

「正直、厳しいところです。ハイ」

「もうすぐ、闇のオークションで奴隷販売が行われるのです。ハイ。勇者様はそこでどのようなことが行われてい

るかその目で見るべきだと思うのです。ハイ」
奴隷商共でも買い取りできないとかどんな状況だよ。
ここって結構な金持ちが経営しているように見えるのに。
「ふぇぇぇぇ……」
リーシアも困った声を出しているな。
「とりあえず確認をするとしよう」
「ではこちらに……ハイ」
奴隷商達に案内され、俺達はローブを羽織ってゼルトブルの夜の街に出た。
裏路地を抜け、いろんな店を横切りながら、一軒の酒場に案内される。
そのカウンターに奴隷商が話しかける。
「グッドナイト・バイナリーを一本」
マスターが眉を寄せてから俺達を一瞥する。
「組み合わせは？」
「ルーズ・ウィナー・マネーです。ハイ」
するとマスターがカウンターの道を開けて後ろの扉へ案内する。
俺達はそのまま扉の先……地下への階段を下りていった。
さっきのは合言葉か？
やがて……地下の大きな会場へと案内され、特等席っぽいところに座らされる。
「ここが今夜の会場です。ハイ」
「そ、そうか……」
非合法の決闘とか闇のドームか……見た感じだと、ここでオペラとかやりそう。
どっちかというとアイドルのコンサート会場か。
「まず勇者様にはオークションにおける購入時の手の形を学んでいただきましょう」
うわ、面倒臭い。
奴隷商が金額を提示する際の手の形をレクチャーしてくれる。

相手の提示した金額に銅貨一枚、銀貨一枚、金貨一枚の上乗せと始まり、倍額、五倍、一〇倍といろんな合図をオークション側に提示する方法を教わっているうちにオークションが始まった。
人間、亜人、獣人といろんな人種がステージに上っている。
子供、大人、老人、男、女といろんな種類、血縁等かなり細かく商品として扱われるようだ。
しかもどこ生まれとかLv、魔法資質、とかなり細かな説明がある。
「今回の奴隷はこれだ。コロシアムでの成績は一〇戦七勝――」
なんかかなりガタイの良い奴隷にスポットライトが当たっている。
「コロシアムでの成績……傭兵か？」
しかし微妙な戦績だな。若干高いんだろうか。
「ハイ。多額の借金を背負って、借金のカタに奴隷としてコロシアムに参加しているのです」
「へー……」
俺はラフタリアの方に目を向ける。
ステージにいる奴隷達を目で追っているようだな。
「それでは今回の目玉商品！　ルロロナ村の亜人奴隷だ！」
パッとスポットライトが当たる。
アレか？　見た感じだと子供の亜人奴隷で若干震え気味だな。
「……違います」
ラフタリアが首を横に振る。
「あのような子は私の村にはいませんでした。似た子はいますが別人です」
「偽物か……」
まあどうせ見分けはつかないし、とりあえず高騰中のルロロナ村出身という箔でもつけて高く売ってしまえば、あとはハズレであろうと知らないということか。
「では開始金額は金貨二〇枚から！」
金貨二〇枚!?　たっか！
「二五枚！」

「三〇枚！」

ドンドン値上がりしていく。

偽物でこれってどんだけ高騰してんだ！　本物を見つけても俺じゃあ買えないぞ！

「ふぇええぇ……」

「な、ナオフミ様……？　私より顔が青いですよ？」

「あ、ああ……」

しかもだ。今取引されているハズレの奴隷、かなり衰弱している。

流行が廃れて値崩れするのを待つにしても、これじゃ本物もその前に死にかねない。

いや、高騰しているから手厚い看護をされているかもしれないのに、この衰弱ぶりだ。

本物なのに杜撰に扱われて衰弱死してしまうのも、ありえない話じゃない。

しかもラフタリアやキール、他の奴隷の状況を考えるに、虐待されていた可能性が高い。

正直、かなり危険な状態で、今すぐにでも保護しなきゃいけないかもしれない。

やばいな……金で解決するのは実質不可能だ。

メルロマルクの女王も俺に金銭的な援助はできないと言っていたし、あれだけの災害の復旧で手が回らない。

「本物を見抜けるといっても……これは……」

諦めるかという考えが脳裏を過る。

だが、ラフタリアはラフちゃんと一緒に期待を込めた目で見てくる。

こんな目で見られたら俺には断ることができない。

「どうにかして早急に金を稼いで買い集めないとな……」

行商で集めた金で一人ずつ購入していくか？

ダメだ……時間が掛かりすぎる。何よりその程度の金では買えない。

毎晩、この闇のオークションに張り付いて本物を見つけないといけないわけだし、買い取った商人と交渉するにしても、最低でも買い取った金額以上の金を用意しなければならない。

盾の勇者としての経歴を上手く使えば……ダメだ。ただでさえ高騰してるのに欲しがっている有名人がいるなんて流布しようものなら、更に高騰する。

購入した商人のところに乗り込んで没収するか？

これもダメだ。奴隷紋の項目には死が絡むものもある。かなり危険な行為になりかねない。

ルロロナ村の連中の悪い噂を流してバブルを弾けさせるか？

どっちにしても時間が掛かる。

亜人の国シルトヴェルトやシルドフリーデンに泣きついて、購入させるという手もあるが、それは最後の手段だ。

できれば使いたくない。

下手をすると亜人共を人質に、俺がシルトヴェルトに行かねばならなくなる。

波に対して準備しているのにシルトヴェルトのごたごたに巻き込まれるリスクがあまりにも高い。最悪陰謀に巻き込まれて、ラフタリア達にも被害が及ぶ。

……途方もない金を短時間で稼がないといけない。

どうにかする手段はないのか？

闇のオークション。

ゼルトブル、傭兵と商人の国。

そういえば先ほど、奴隷商がそんな感じのことを呟いていたな。

「なあ、奴隷商」

「なんでしょうか？　ハイ」

「コロシアムってどれくらい儲かる？」

今の俺達は弱体化してはいるが、並みの冒険者や騎士、戦士よりも遥かに強い。

勇者としての経歴を隠して賭けコロシアムに参加して、自分達に賭ければ……競馬じゃないが万馬券になるんじゃないか？

「ピンからキリまで存在しますです。ハイ」

「そのピンの話だ。俺達が正体を隠して賭けコロシアムの……そうだな、一番危険な戦いを乗り越えたら高騰する奴隷共を購入できるか？」

「少々お待ちをです。ハイ」

奴隷商は叔父と一緒になにやらぼそぼそと話し合いを始める。
やがて……。
「できなくはないでしょう。ただし、命の保証はできかねませんし、危ない橋を渡る羽目になるでしょう」
「ふっ……それならいい」
なに、死の可能性なら今までいくらでも乗り越えてきた。
波と戦い、陰謀と戦い、宗教と戦い、霊亀と戦い、別の異世界でも戦った。
何度も死にかけたし、これからも続けることになる。
それなら——今回はコロシアムでラフタリアの故郷を救うために戦ってやる。
「……」
ラフタリアがどうするか困った表情で、祈るように俺を見ている。
それはラフちゃんも同じだ。
リーシアは俺の決定に慌てふためき、フィーロはよくわかっていないのか首を傾げている。
「安心しろ、ラフタリア。必ずお前の同郷の奴等を取り戻す」
「ナオフミ様……」
その言葉を聞いて、ラフタリアが救われたような顔をした。
まあ柄じゃないのは理解している。
とはいえ、俺はラフタリアにそうするだけの理由がある。
「だが今の俺達には高騰する奴隷共を買う金はない。あまりいいとはいえないがコロシアムで稼いだ金でラフタリアの仲間を買う。汚れた金ですまないが、俺達に残された手はこれだけだ」
ラフタリアが力強く頷く。
こうして俺達は奴隷商のコネを使って危険なコロシアムに挑戦することになったのだった。

十一話　奴隷狩り

まずは賭け金の調達から始めないといけないな。
賭けるなら多い方がいいに決まっている。
あと、盾の勇者だと知られたら稼げる額が減ってしまう。
とはいっても、一攫千金を狙えるほどの元手か……。
ポータルでメルロマルク特急とかをするのも考えた。
過去にやったネットゲームにそうして金を稼ぐ手段が存在するんだ。
片道二週間掛かるメルロマルクとゼルトブル間を一瞬で移動できたら飛びつく奴も出てくるだろう。
問題は金だな……客単価を上げても移動費はせいぜい金貨一枚から五枚くらいか？
客にもよるし口コミも重要。
問題点は密入国になりかねないことだが、メルロマルクの検問を担当している奴と協力すればどうにかなる。ただし、そんな真似して稼いでいたらその間に有名になりすぎる。
一時間に六人しか送れないのも問題だしな。
できればやらない方向で行きたい。
俺達は奴隷商の地下市場へと戻ってきた。
心配そうなリーシアに俺は静かに首を横に振る。
「どうしたものかな」
「ふぇええ……」
「安心しろ、リーシア。お前を参加させる気はない」
「んー……」
フィーロに関して言えば、空気が悪いのかちょっとテンションが低めだな。
「絆の世界で手に入れた物品を横流しするにしてもな……効率的に金にするには時間が掛かる」
魂癒水のように驚異的な性能であるのを証明するには面倒な手順を要する。
帰路の写本という道具もあるのだが、在庫が限られてるし、龍刻の砂時計へ転移できる道具という点を加味して増やすとしても元となる数が少ない。
ドロップ確認の道具もまだ解析をさせている段階だ。

量産させないといけないし、作成方法自体は判明しているが、この世界で再現できるか未確定だ。
「ではコロシアムに参加する手配をいたしますです。ハイ」
「ああ、危険でもなんでもいい。一番稼げるやつを頼むぞ」
「決断した盾の勇者様がどうなるのか、楽しみにしてますです。ハイ」
「今の俺は機嫌が悪いんだ。黙っているうちにさっさと行け」
「先ほどまでとは打って変わって悪魔のような眼差し……私ゾクゾクします」
「俺達は一旦、村に帰るか」
状況が変わった。対策を取るにしても一度あっちに戻る必要がある。
「そうです、ね。キールくん達にも状況を説明しておいた方がいいでしょうし」
「話しづらいがな」
村を復興させるんだ、と目を輝かせてがんばっている連中にお前等の同郷の連中が途方もない金額になっていて助けられるか怪しい、なんて話をするのは気がひける。
ま、キールを含めて村出身の奴等は四人しかいないけどさ。
「どっちにしても行くしかない。じゃあな奴隷商」
「では明日、また会えることを楽しみにしていますです。ハイ」
本当は会いたくないが、これも村のためだと思い、俺は適当に手を振りながらポータル位置を記憶して村に転移した。

が、そこで俺は言葉を失った。

「な、なんだ!?」
「なんですかコレ!?」
俺を含めてラフタリア、フィーロ、リーシア、ラフちゃんが各々絶句する。
俺の目に飛び込んできたのは、村の建物の一つから火が上がり、待機していたであろう数名の兵士達が武器を手に大声を上げて、慌てて村の外の方へと駆けていく光景だった。

「おい！　何があった！」
「あ！　盾の勇者様！　奴隷狩りです！　奴隷狩りがこの村を襲撃してきました」
兵士達が俺の顔を見て若干の安堵を見せる。
奴隷狩り!?　こんな時にさえ奴隷狩りがやってくるのか！
ふざけやがって！
奴隷商にも言ったが、今の俺は機嫌が悪いんだ。ぶっ飛ばしてやる。
「そんな――」
「ラフタリア！」
ラフタリアが刀を握りしめて喧騒の方へ駆け出した。
「フィーロ！　お前はラフタリアと一緒に奴隷狩りを殲滅しろ！　リーシア、お前は怪我人の手当てと戦えない奴の保護。兵士共は隣町のエクレール達に報告へ行け！」
「はーい！」
「ふぇええ！」
「既に手配しています！」
兵士達の返答に安堵する。思ったよりは状況に対応できている。
俺は走っていくラフタリアの後を追う。
すると村の周囲を奴隷狩りが取り囲んでいるのに気づいた。
村にいる奴隷達は一〇人。警護の兵士もそれなりに駐在しているが奴隷狩りの数は多いようで、この夜の闇の中では完全に把握しきれない。
それでも……やらねばならないだろう。
「大人しく捕まれ！」
「はあ！」
ラフタリアが襲いかかってきた奴隷狩りを一瞬で斬り伏せた。
「ガ――」
血を噴いて奴隷狩りはバタンと前のめりに倒れ込んだ。

……目算だが、クラスアップはしていない？

いや、クラスアップ済みでもラフタリアの刀の前には無意味だったと見ていいのか？

「俺達が村を守るんだ！　行くぞおおおおぉぉぉぉ！」

キールの声が聞こえてくる。

武装したキールが村の奴隷達と一緒に奴隷狩りを相手に善戦しているようだ。

少し不安なところだったが、俺の奴隷として育った影響か戦えている。

クラスアップ前のラフタリアと同程度にまで伸びているからな。

奴隷狩りや盗賊には能力の面で負けることはないと信じたい。

「抵抗しやがって！　もう手加減なんてしねぇえ！　うわ――」

奴隷狩りがキールに剣を向ける……が、突然足下に出現した穴に落ち、首だけ出ている状態になった。

なんだ？　と思ったら、イミアが地面から顔を出す。

「サンキュ！　イミアちゃん！」

イミアがキールの言葉に親指を立てて応じる。

ああ、地面を掘って落とし穴を作ったのか。

「グアアアアア！」

フィーロの配下一号が奴隷共を守るように奴隷狩りに強烈な蹴りを加える。

他にも魔物共が善戦しているようだ。

「今だ！」

と、隙を見せたキールとイミアに残った奴隷狩りが襲い掛かる。

「エアストシールド！」

そこに俺が盾を出現させて遮る。

「流星盾！」

そして結界を生成し、キールと奴隷狩りの間に割って入る。

「兄ちゃん！」

「上手く戦えているみたいじゃないか」

「おう！　今度こそ……俺達が村を守るんだ！」

キールの目には決意の色が浮かんでいる。

そうだ。もうお前等は守られているだけの哀れな奴隷じゃない。

奴隷狩りという理不尽な行為から、村のみんなを守るために戦える力があるんだからな。

「兄ちゃんのお陰で戦えるようになったんだぜ！」

「そうかそうか、イミアもよくがんばってるな」

「あ……はい……！」

イミアも誇らしげだな。

「はぁあああああ！」

そんな最中、ラフタリアが鬼人の如く、殺気を噴出させて襲い来る奴隷狩りを屠っていく。

奴隷狩りは死んではいないようだが、もはや戦闘不能だな。

「ラフゥウウ……」

ラフちゃんも全身の毛を逆立ててラフタリアと息を合わせて戦っている。

時に噛みつき、時に尻尾で殴打し、幻を見せて意表を衝く。

「よし！　お前等！　俺が来たからには安心しろ。村を襲撃した賊に目にものを見せてやれ！」

「「「おおー！」」」

俺の言葉に奴隷、魔物の区別なく声を上げる。

「く……まさか盾の勇者が帰ってくるとは。留守じゃなかったのか！」

奴隷狩り共の中で、ラフタリアと鍔迫り合いをしている奴が呟く。腕に覚えがあるのか、魔法と剣術で善戦している。

地味に強いな……コイツ。

「俺がいない隙を狙ったというところだろうが、残念だったな。勇者には転移能力があるんだ出かけている間は戻ってこないとか、甘い考えでも持っていたんだろうか？

「ラフタリア！」

「なんですか！」

「村全体を照らせるくらいの明かりを出せないか？　奴隷狩りの数を把握したい。それと隣町の連中への照明弾になる」
「わかりました」
ラフタリアが鍔迫り合いの相手を突き飛ばして、俺のところにバックステップで来てから刀を鞘に収めて魔法の詠唱に入る。
「フィーロ！」
「うん！　フィーロ、みんなを守る！」
その間にフィーロが奴隷狩りに向けて蹴りを放つ。
それに続いてキールを含めた戦闘班が奴隷狩りを仕留めていく。
ただ、腕に覚えのありそうな奴隷狩りはフィーロクラスじゃないと即座には仕留められず、若干圧され気味だ。
「流星盾！　エアストシールド！　セカンドシールド！　アタックサポート！」
俺は最前列に立ち、フィーロを含めた奴隷達を守るようにスキルを放ちながら、奴隷狩りの攻撃を受け止める。
そして奴隷狩りの腕を掴み、フィーロの方へと突き飛ばしてやった。
「グハ！」
当然の如く、奴隷狩りはフィーロに蹴り倒された。
「ラフー！」
ラフちゃんもラフタリアの詠唱を補助するように尻尾を膨らませている。
『力の根源たる私が命ずる。真理を今一度読み解き、辺りを照らせ！』
「ドライファ・ライト！」
ラフタリアが光の玉を生成して上空へと放つ。
魔法の明かりは照明弾となって村を照らし、援軍となる隣町の兵士達の目印となるだろう。
その光が上がっている間に俺は村にいる奴隷狩りを数える。
ひーふーみー……かなり多い。
闇の中にいる連中だけでも、かなりの数だ。
三〇人なんて規模じゃないな。

村の近くだけで五〇人はいると見ていい。
元々この村出身の奴はラフタリアを含めて五人しかいないのに、そこにどれだけの人数集めて狩りに来てるんだ。
人の業の深さに呆れてくるな。
まあ……捕まえてゼルトブルで売り払えば一人金貨三〇枚以上は堅いとなれば、一攫千金を考えて集まってくるか。
「はぁ！」
魔法を唱え終えたラフタリアが即座に飛び出して奴隷狩りに斬りつける。
鬼気迫るものがあるな。
やはり守るべき大切な場所だからか。
「瞬刀・霞十字！」
ラフタリアは二本の刀で容赦なく奴隷狩りを斬り伏せていく。
その姿はまるで戦場で舞っているかのように美しい、と思うのは俺の気の所為ではないだろう。
「ラフタリアちゃん……凄い……」
「踊ってるみたい」
村の連中が戦うラフタリアに見惚れている。
「よそ見しないで！」
ラフタリアの注意に我に返り、襲い来る奴隷狩りに反撃する。
「く……」
「なーにやってんだお前等！」
そこに奴隷狩りの大将らしい、若干煤けた鎧を着た奴が姿を現す。
「こいつは――！」
ラフタリアを含め、キール……この村出身の連中が絶句する。
なんだ？　知り合いか？
「いつまでも時間を掛けやがって、作戦は失敗だろうが！　それでお前等？　何匹捕まえられたんだ？」
「そ、それが……」

部下の奴隷狩りが言葉を濁すと奴隷狩りの大将は舌打ちをする。
他にもぞろぞろと動きのいい連中が村の外からやってくる。
「チッ！　まさか盾の勇者が村に帰ってきてるとは、読み違えちまったな！　だけど勇者とはいえ盾の勇者。隙を見て一人や二人攫ってこいってんだ！」
無茶な要望をぶっ放す上司ってところか？
そんなことよりもラフタリア達の反応の方が気になる。
「こいつは！　こいつは！」
キールが先ほどにも増して怒りに顔を歪ませている。
ラフタリアも冷静に、それでありながらも本気で怒っているのがわかった。
その証拠にこれまでにないくらい尻尾が膨れている。
「ラフタリア、キール。コイツを知っているのか」
俺は奴隷狩りの大将に向けて盾を構える。
「はい、私達の村に奴隷狩りに来て……村の大人達を殺したメルロマルクの兵士です！」
「ほー……まさかあの時逃げたラクーン種のガキが盾の勇者と一緒にいるとは思わなかったぜ」
思い出したかのように奴隷狩りの大将……メルロマルクの元兵士がゆらりと剣を構える。
それなりに剣の腕はあるのだろう。
今のキール達で対応できる相手ではなさそうだ。
そこにエクレールと国の兵士達が駆けつけてくる。
「イワタニ殿！　無事か⁉」
「お前等は⁉」
「ラフタリアの話だと国の兵士らしいな。エクレール、詳しく知っているか？」
「ああ、この領地が波で被害を受けた時に亜人狩りをした兵士共だ。イワタニ殿が自らの無実を証明したのを察し、国の手から逃げたと聞く」
「なるほど、つまり処罰される前に国から逃げた元兵士か」
俺の言葉に不快そうに睨みつけてくる奴隷狩りの元兵士共。

さて、どうしたものかな？
問題はキール達、クラスアップをしていない連中だ。
幸いにして誰も奴隷狩りに捕えられているわけではない。
だが、相手も相当数を集めて襲撃してきている。俺は無事でも他の連中が無事に乗り切れるかどうかはわからない。
俺が物理的に捕まえていられるのはせいぜい三人から四人までだ。
軽く目算で五〇人もいるこの状態でキール達を守るのは難しい。
まあ、相手もクラスアップ済みの心得のありそうな連中はごく一部で、そいつらが前に出てきているのだから対処は……できるか？
それに、ラフタリアやキールにとっても、これはいい機会だ。
自分達を不幸にした元凶がノコノコとやってきたんだからな。
奴隷狩り共も不利を悟って少しずつ逃げようとしているようだな。
だが、キールをはじめ、ラフタリア達は逃がす気は毛頭ないぞ。
「チッ！　盾の分際で調子に乗りやがって。お前が来たから俺達は追われる羽目になるしよ！」
「知るか。そもそも領主が死んだからといって領地の民を狩るお前等に大義なんてあったとは到底思えないな」
「あるんだよ！　知らねぇのか！」
お？　かなりムキになってるな。
……ああ、なるほど。
「三勇教という邪教の教義か？　残念だったな。その教義はもう通じないぞ」
「てめぇえええ！」
でかい声で怒鳴るが、攻撃まではしてこない。
俺に襲い掛かっても意味がないことを理解してるのか？
いや、目の動きでわかる。何か作戦があるな。
「喰らえ！」
奴隷狩り共がそれぞれ、火矢を村の建物に射かけた。

厄介な手を……。
「今すぐ火を消すんだ！」
くっそ、多勢に無勢とはこのことだな。
だが、俺達だって黙って見ているわけじゃない。
「ラフタリア……キール、あいつをやれるか？」
「はい……」
「みんなを守るんだ！」
ラフタリアは静かに頷き、キールは決意に満ちた声で応じる。
「よし……なら、あいつ等に報いを受けさせろ！」
俺は静かに詠唱してラフタリアとキールに援護魔法を掛ける。
「ツヴァイト・オーラ！」
全能力が上昇したラフタリアとキールが奴隷狩りの大将に突進する。
「フィーロは周りの連中を跳ね飛ばせ！　配下も一緒にな！」
「はーい！」
「グア！」
フィーロには配下のフィロリアル一号と共に村の周りにいる奴隷狩りに当たってもらおう。
「イワタニ殿！」
「エクレール、お前も元同僚だとしても遠慮は許さん。国賊を仕留めろ！」
「わかっている！」
コクリとエクレールと兵士達が頷いて構える。
「お前等……甘い目論見をしているようだが、残念だったな。ここの連中を蹂躙するつもりだったんだろうが……蹂躙されるのはお前等の方だ」
ラフタリアの援護に回るために俺も走り出す。
「チッ！　お前等！　撤退だ！」
剣を掲げて撤退を命ずる大将にラフタリアとキールは各々武器を振りかぶる。

大将は剣で守り、ラフタリアと鍔迫り合いになりながらキールを蹴り飛ばそうとした。
が、キールは蹴りを見抜いていたのか半歩ずれて避ける。
「てりゃあああああ！」
「く！」
大将はラフタリアの刀を剣で受け、突き飛ばそうとしたが突き飛ばせず、そこにキールの剣が鎧を掠める。
「くそ！　亜人ごときが調子に乗るなぁあああ！」
迫り合っていた鍔のところでパシッと爆発が起こる。
魔法か！　器用な真似をしやがるな。
見ると後方で魔法を唱えて援護している奴がいる。
「まだです！」
爆発をものともせずにラフタリアが一回転して刀で横薙ぎにする。
「おっと！」
目だけは相当良いみたいだな。
だが、お前は大事なことを忘れてるぞ。
「残念だが、お前は相手を間違えた。盾の勇者が庇護している村を襲撃するなんて愚かな真似をしなければ、長生きできたんだろうがな」
そう、俺がいることを忘れている。
俺は大将の胸倉を掴んで引き寄せた。
「く……放せ！」
「誰が放すか……避けるもクソもなく、喰らうがいい。これが盾の勇者の戦いだ！」
俺はラフタリアとキールに目で命じる。
「行きます」
刀を一度鞘に収めたラフタリアが決め技とばかりに抜刀する。
「瞬刀・霞一文字！」
「みんなの仇だ！」

キールの剣がラフタリアのスキルの後に命中する。
「ぐはぁあああああ！」
血飛沫が俺に当たるが、そんなことは知らん。
コイツには報いを受けさせるべきだろう。
鎧が切り裂かれてぐったりとしている大将を突き飛ばして、地面に転がす。
「ヒィ！」
さすがに相手が悪かったのを理解したのか他の奴隷狩り共が脅えた声を出した。
別にラースシールドってわけじゃないが、俺が化け物にでも見えているんだろうな。
「さあ、懺悔の時間だ……お前等、報いを受けろ」
それからは一方的だった。
奴隷狩りは大多数捕縛された。
ラフタリアとキールが倒した大将は辛うじて生きていた。
殺したかと思ったが、トドメまでは刺さなかったらしい。
「仕留めないのか？」
「はい……」
ラフタリア達は国に引き渡して罰を与えようとか思っているようだな。
「さてと……」
村の広場にずらーっと縛られて転がされている奴隷狩りの連中を見る。
こんなに集まってきやがって……揃いも揃ってクズばっかりだな。
「くそ！　コイツ等化け物か！」
「情報じゃあ多少Ｌｖがあっても俺達で倒せるはずだったんだろ！」
奴隷狩りの下っ端が上司達に怨嗟の言葉を投げかけている。
さすがはクズだな。自分が負けたら上の奴の所為か。
「残念だったな、お前等。勇者の庇護というのはこういうところでも機能してんだよ」
「く……」

「勝った……俺達は勝ったんだ！」
うおおおおおお！
と、キールを含めて村の奴隷共は勝利の声を上げている。
イミアや魔物好きっぽい子供も同じように喜びを分かち合ってるようだ。
村出身だとか、そうじゃないとか、関係はないみたいだ。
何かしら心に傷がある連中ばかりだからな。
卑劣な奴隷狩りに勝ったというのはいい経験になったんだろう。
「ええ、勝ちました……あの日の旗を……今度こそ、取り戻せたと思います」
刀を強く握りしめたラフタリアが遠い目をして呟いている。
「旗……か、そんなに欲しいのか？」
「いえ、そういう意味では……」
「ラフタリア、そのな……」
エクレールが何やら申し訳なさそうにラフタリアに声を掛ける。
「申し訳ない。私がいながらこんなことに……」
「気にするな。それよりもエクレール、この村には旗が立っていたのか？」
「ん？　確か村には我が父から贈られた旗が立っていた」
なるほど、その旗のことを言っているのか。
「エクレール、勝利の褒美としてその旗を村に立ててやってくれないか？」
「ナオフミ様？」
「ここに戻ってきてからの努力が実を結んだんだ。ラフタリア、お前等の村はこれからが始まりなんだろ？」
俺の言葉にラフタリアは思い出に浸るように静かに目を瞑り、目を開いてから頷く。
「わかりました。お願いします」
ま、キール達も旗には妙なこだわりがあるようだしな。
気まぐれにお子様ランチを作ってやった時は大興奮だったし。
旗を大事に握りしめていた。

あれにはそういう意味があったということだな。
「さてと」
俺はラフタリア達との会話を中断して転がっている奴隷狩り共を見る。
「コイツ等の処遇はどうしたものかな？」
「通例では城に連行し、相応の罰を与えることになっている」
「ふむ……しかし大人数で組織だった行動のようだがな」
「もちろん、罪は重いと私は思う。おそらくＬｖリセットの後、強制労働に従事することになるだろう」
「処刑じゃないのか？」
「本来、主犯格はそうなる。だが……」
エクレールが主犯格らしい元兵士の顔を見つめる。
「コイツ等はメルロマルク内でも家柄が良い方なのだ。処刑するにしても時間が掛かる可能性は高い」
「強行すれば貴族内の反発を生んで、女王の立場が危うくなるとかか？」
俺の質問にエクレールは頷く。
王権制の国なのに面倒なところがあるのな。
だからなのか、元兵士共は若干へらへらしているな。
コイツ……自分の立場ってものを自覚していないのか？
「血筋を重んじるところがあるのだ。最悪、女王の血を継ぐ貴族達にとって都合のいい者に預けられる。何分、霊亀の事件で国力が減退した今の状況ではありえない話ではない」
「遠縁の……ってやつか？」
アレだ。なにも女王の娘二人だけが王族ではないんだろう。
分家に本家と色々あるのか。そこで都合のいい奴を旗頭にでもして、革命でも起こして城を占拠すれば頭が切り替わると。
「貴族達の名目は『運悪く国の混乱で行方知れずだった兵士が、やっとのことで舞い戻り、謂れのない罪で捕えられた』だろうな」
「完全に真っ黒なのにな。面倒だから抵抗したことにして消すか」

こんな奴等生きているだけでも害悪だ。絶対に後々俺達に危害を加えてくる。
それならこの世界から退場してもらった方が遥かに有意義だ。
「イワタニ殿の勇者としての権限を使えば、それもいいかもしれん。が、国のルールには従ってもらいたいというのが私の思いだ」
「先延ばしにした末に処刑ではなく強制労働でもか？」
エクレールの父親の領地内での出来事だが、それじゃあ被害者が浮かばれない。
「わかっている……私も許せないとは思っているのだ。だが……」
「その辺りの処遇もその場所を任された貴族が決めてよさそうなのにな」
「本来は……だ。現にコイツ等の部下は私達でも処分を決めることはできる」
「問答無用で処刑だな」
女王に通すまでもない。
「そもそも、なぜこんなにも奴隷狩りがやってきたのだ？　それを吐かせるまで処刑も何も――」
「ああ、そのことなんだがな……丁度良い、ついでに村の連中にも聞いてもらうか。お前等集合！」
俺が手を上げて村の連中を呼び寄せる。
それから俺はゼルトブルでこの村がどんな扱いを受けているかを説明した。
「つまり高騰しているこの村の者達を狩ってゼルトブルで売りつけようとコイツ等は画策していた……ということか!?」
エクレールが先ほどよりも険しい剣幕で奴隷狩りを睨みつける。
「そんな……じゃあ村のみんなは戻ってこないのか？」
キールが不安そうに俺に縋ってくる。
「大丈夫だ。俺がどうにかして買い集めるつもりだ。問題は同じような輩がまた来る可能性だな」
この高騰現象にはこういった問題があるのか。
どうにかしてこの村の奴隷の値上がりに歯止めをかけないといけない。
色々と面倒事が増えてきた。
とりあえずコイツ等の強化を優先させないとな。

クラスアップをさせるにはまだ少し足りない。

「兄ちゃん！　コロシアムに出るんだったら俺達だって出る！」

勝利に調子づいたのか、キール達、戦闘意欲のある連中が一歩踏み出す。

「うーん……お前等を参加させてもいいが、リスクがな」

それも手ではあるのだが、ゼルトブルに行って一番怖いのはコイツ等がこの村の奴隷であることが露見してしまう場合だ。

あんな人混みで誘拐されたら見つけるのが難しい。

奴隷紋で追跡もできるがあっちも馬鹿じゃない、書き換えくらい平気でしてくるだろう。

一発大きく当てて、奴隷共を買い集めたい。

それくらい急務であり、地道にコロシアムに参加して金を集めるとかの次元じゃないのかもしれない。

この計画を実行に移すにはまとまった賭け金が必要だ。

元から賭ける金が大きくないといけない。

もちろん勇者とその配下だから全勝するのは前提だが、あまりに勝ちすぎると賭けても旨みがなくなる。

競馬とかほとんどやったことはないが、勝つ馬にはみんな賭けるから勝っても儲からない。

こういうのは有名になる前に大きく賭けて儲けることに意味がある。

何か金目のものを売る……それこそ大量の黄金でもあればいいんだが。

そう思いながら、奴隷狩りを見て、ふと良い案が閃いた。

「良い手を考えたぞ」

俺はニヤッと笑みを浮かべる。

ラフタリアは俺の笑みを見て何やら察したのか呆れ顔だ。

「ナオフミ様、何か変なことをしようとしてますね」

「ああ、ちょっと人を連れてくる。一時間ほど待っていろ」

俺だけポータルでゼルトブルへ飛ぶ。

そして……。

「おや？　盾の勇者様、村に戻ったのではありませんでしたか？　ハイ」

「ああ、ちょっとな。ついてこい」

で、ポータルのクールタイムが終了する一時間後に奴隷商とその配下を連れて村へ戻る。

「ナオフミ様？　あの……どちらに……？」

ラフタリアは奴隷商を見て首を傾げる。

村の連中は何をするんだろうと興味ありげに見ていて、エクレールと兵士達は奴隷商を見て眉を寄せている。

「エクレール、コイツ等はまだ国に預けている状態じゃないんだろ？」

「確かにそうだが……イワタニ殿、何をする気だ？」

「いいから黙っていろ。良い処分の方法が閃いたんだよ」

「エクレールさん、気を付けてください。こういう時のナオフミ様は大体、とんでもないことを言いますから」

ラフタリアの俺への信頼はどこへ行ったんだ？

まあ、こういう時に碌なことをしない自覚はあるんだがな。

球穂水を売った時の話をしたら呆れてたし。

絆達が自慢するから表面上は普通に聞いていたけどな。

「俺達に手を出したらどうなるかわかってんのか？」

奴隷狩りの大将が凄んできた。

コイツ、殺される危険はないとか甘いことを考えてそうだな。

女王の立場が危うくなるようなことを俺達がするはずがないとか、都合のいいことを考えてるんだろう。

「安心しろ。お前等の望み通り、全員生かしてやる」

それを聞いてホッとしている下っ端共。しかし大将の方は首を傾げている。

なかなか頭が回るじゃないか。

「奴隷商、コイツ等を奴隷にできないか？」

「できますです。ハイ」

「まさか奴隷にして開拓に従事させたり他の奴隷狩りから守らせるとかか？」

エクレールはなに甘っちょろいこと言っているんだ。

まあその手も悪くはないがな。奴隷紋で、逆らったら死ぬようなきつい罰則を掛けておくとかな。

だが、それには致命的な欠点がある。
「隙を見て仲間に解除されたらどうするんだよ。そんな甘いわけないだろ」
奴隷狩りの連中もその辺りを想像していたのか、ニヤッと笑っていたのが首を傾げている。
「奴隷にするのは強引にパーティー内に引き入れるのと、次の動きをしやすくするためだよ」
「な、何をするんですかぁ？」
びくびくとリーシアが聞いてきた。
いたのか。どうもさっきから地味だな、お前。
「コイツ等をゼルトブルに送り届ける。それから売り払うんだよ。奴隷として、な」
「な――」
エクレールが絶句し、ラフタリアが呆れたように溜息をつく。
そう、今の俺達に必要なのはコロシアムで一発大きく当てるための金なんだ。
そこで必要な金を調達しなくてはいけないわけだが、少しでも金を上乗せしたい。
もちろん奴隷狩りが奴隷として売られれば買い戻してでも助けたいメルロマルクの貴族が出てくるだろうな。下手をすればそのまま逃げられる危険性だってゼロじゃない。
俺の意図を理解したのか奴隷狩りには余裕が見える。
どうせ自分達の値段はそこまで高くならないとか思っているのだろう。
だが、俺はそんな甘い罰で許す気はない。
「で、奴隷商。お前、シルトヴェルトの方に親戚はいないか？」
「もちろんいますです。ハイ」
「そうか。ならそっちの親戚にコイツ等を売るぞ。名目は……盾の勇者御用達、元セーアエット領の亜人を狩った奴隷狩り達だ」
俺の言葉に奴隷狩りはサーッと青ざめる。
逆に奴隷商の奴、これまでにないくらい満面の笑みで俺を見た。
まずは盾の勇者御用達という、盾の勇者を信仰している国にとっては価値がありそうな要素。次にメルロマルク内とシルトヴェルトの友好の懸け橋となっていたはずの、セーアエット領の亜人を大量に殺し、奴隷にさせた悪名高き犯罪者共だ。
シルトヴェルトの亜人の目には、どう映る？
非常に腹立たしい悪の権化だろう。
これが奴隷として売り出され、販売されたとしたら……どうなる？
ストレス解消とばかりに、ラフタリアや村の奴等がこの国の貴族共にやられたように虐待され打ちのめされるに決まっているだろう。
まさに命をもって報いを受けるということだ。
「ふ、ふざけんな！　シルトヴェルトに俺達を売るだと！　それが勇者のすることか！」
奴隷狩りの大将が怒鳴り散らす。
「国の兵士が国民を殺して売り払うよりはまだマシだと思うがな。奴隷達がどんな地獄を経験したか、お前等は知らないわけではないんだろ？」
「それとこれとは別だ！　俺達がそんな目に遭う謂れなんかない！」
「なんだ？　自分がされたら嫌なことをコイツ等にやったのか？」
呆れてものも言えんな。
兵士だって戦闘で殺されるかもしれないというのに……奴隷として拷問され苦しみながら死ぬのが怖いとか、どれだけ愚かなんだよ。
「お前等に俺の世界で割と気に入っていた台詞を贈ってやろう。『撃っていいのは撃たれる覚悟のある奴だけだ』」
本来はハードボイルドな探偵が使う言葉なんだけどな。
自分が苦しむ覚悟がない奴が人を苦しめていいはずなんてない。
「ふざけんな！　お前等亜人は苦しんで死ぬことに意味があるんだよ！　高等な人間様である俺達がそんな下劣な亜人と一緒の――むぐ」
うるさいから布を口に巻いて黙らせる。
まあ、コイツ等の恐怖に歪む顔は結構、壮観だな。
クズやビッチに土下座させた時には劣るが、このくらいの報いは受けて当然だ。
お前等の所為でここにいる連中は奴隷になったんだ。

今度はお前等が奴隷になる番だ。
「エクレール、お前は真面目だから許せないと思うかもしれないが、コイツ等には相応の報いを受けさせる必要がある。そしてコイツ等を売った金を元手にして俺はこの村の連中を取り戻す」
「く……」
悔しげにエクレールが呻くがそれ以上の行動に出るつもりはないようだ。
ま、このまま国に渡しても軽い罰で済んでしまう可能性があるからな。
「あとな……エクレール。これは見せしめでもあるんだ。村にまた奴隷狩りが来るようならどうなるかってな」
たいして罰がなければ次々と襲ってくる。
捕まって処刑されるリスクくらい覚悟の上でここに来る連中もいるだろう。
だが、捕えられ、奴隷にされて虐待されるとなったらどうなる?
世の中には死ぬよりも恐ろしい罰があることを見せつけてやれば、村に来ようとする奴隷狩りも思いとどまるはずだ。その上、守っているのは盾の勇者なんだからな。
「ナオフミ様……」
「呆れたとしても俺は引かないぞ。ラフタリア、俺はどんな手を使ってもお前の仲間を救い出す」
汚れた金で作られた場所なんて嫌かもしれない。
できることならどこぞの主人公みたいに真っ当な金で救いたい。
だけど俺達には手段を選んでいる余裕なんてないんだ。
ここで手を拱いている間にもこの村の連中の命が消え掛けているかもしれない。
俺を信じてくれたラフタリアのためにも……俺は立ち止まるわけにはいかないんだ。
たとえ、ラフタリアがそれを望んでいないとしても。
「兄ちゃん……」
キールが恐る恐る声を掛けてくる。
「軽蔑したか? だが、これがお前等の大将だ。コロシアムに出たいと立候補したその想いは評価してやる。だが、今は耐えて自分を強化していろ。汚いことは全部俺に任せればいい」
村の奴隷共に背を向けて俺は一歩踏み出した。

そう、汚れは全部俺が引き受けてやる。
「お前等が危険を冒す時じゃない。村を、守るんだろ?」
「うん……」
とりあえず、これだけの奴隷狩りを売り払えば相応の金を稼げるだろう。
突然の厄介事だったが、結果的に前進したな。
俺は視界に浮かぶポータルのクールタイムを、静かに見つめるのだった。

十二話　デパート

奴隷化した奴隷狩り共を一時間おきにポータルでゼルトブルの奴隷商のところに送り付けていたら、翌日の昼になってしまった。
仮眠は取っていたのだが、眠りが浅くて寝た気がしない。
「ではゼルトブルの親戚に連絡を取りますです。ハイ!」
最初の奴隷狩りを送り付ける際に一緒にポータルで飛んでいった奴隷商は、迅速にゼルトブルの知り合いにコンタクトを取った。
「どうやら好意的に受け取っているとの話です。ハイ。先方の地方貴族達からも勇者様が提供した奴隷への予約が殺到し、既に前倒しでオークションが行われているそうです」
「ほう……」
「とのことなので、私共の方から勇者様に奴隷売買前に代金をお渡しすることが可能になりましたです。ハイ」
所謂為替というやつだな。
まあ今回の場合、通信技術があるから少し違うのかもしれないが。
「自分でも上手くいったと褒めたくなるな」
「今夜にも勇者様の提供した奴隷はシルトヴェルトに搬送されることになりますです。ハイ」
涎を垂らした飢えた野犬の群れに肉を投げ入れるような感じだな。

メルロマルクも碌な奴がいないが、同じようにシルトヴェルトという国も闇が深い。
その闇を利用している俺もどうかとは思うが。
なんて奴隷商と話をしているとラフタリアは若干呆れたような溜息を漏らしている。
だが、奴隷狩り共にとってはそれ相応の報いだし、女王の方にも確認を取って裏で了承を得た。
というか女王は裏では賛同しているとか、メルティが朝方やってきて呆れていたな。
なんでも国賊をシルトヴェルトに送りつけたことで、シルトヴェルト側も満足しているとかで、交渉の道具にしているらしい。
奴隷商の地下奴隷市場に戻った俺達は改めて確認を取った。
「とりあえず、これでコロシアムで賭博するための支度金は調ったと見ていいな」
さて、昨日と同じく、俺とラフタリア、フィーロ、リーシア、ラフちゃんを連れてこれからの方針でも考えるか。
「経緯はどうあれ……そうですね」
「……一発大きく稼ぐなら少しくらいの危険は覚悟の上だ。参加するコロシアムのルールとか細かいことも理解しなきゃダメだろ？」
生か死かのような危険度最大のコロシアムに参加するとなると後味が悪すぎるからな。
それに俺が一人で出ても勝てるはずもない。
なにせ守ることしかできない盾の勇者なんだから。
そういや変幻無双流のババアも参加させようかと思って相談に行ったら、コロシアムとかだと有名で過去に出場禁止にされているとか言いやがった。
あのババアの経歴も相当謎だよな。
「基本はトーナメント方式。勇者様が出場するとなるとチーム戦がお勧めだと思いますです。ハイ」
「そうなるな……」
「その場合、参加人数が三人、五人となりますです」
三人……まあ、俺とラフタリアとフィーロになるのか？
元々リーシアを出す気はなかったし、それしかないか。
状況次第じゃラフちゃんにフィーロの代わりをしてもらうのも手だな。

五人だとラフちゃんも入れて五人にできるが……キールとかを連れてくる手があるか？
とはいえ……できれば五人は避けたいな。
ラフちゃんはそこまで強くないし、キール達は多少力はついてきているが、まだ未熟だ。下手に痕が残る怪我でもされたら、ラフタリアに顔向けできん。
「勇者様の配下が一対一のコロシアムに参加することもお勧めです。ハイ」
「問題はそこだな。一対一のコロシアムだと倍率はどうなる？」
異界の眷属器、刀を持つラフタリアならば、コロシアムに参加しても余裕で勝てるはずだ。
……なんだろう？　トーナメントでコロシアムに参加するとか、過去の有名なバトル漫画みたいな展開になってる気がするぞ？
「どちらかといえば賞金や賭け金の総額はチーム戦の方が多いです。ハイ」
「じゃあチーム戦だな。ちびちび賭けるのは面倒だ」
俺が出られればラフタリアとフィーロで安定性が増す。
変則的なルールの試合でもない限り……と条件が付くがな。
「では……近々開催される裏のコロシアムに出場登録を致しますです。ハイ」
「参加するのに必要な資格とかは大丈夫なのか？」
「そこは私共で強引に行かせてもらいますです。ハイ」
頼りになることで……後で不正だけはしないように注意しておくか。
「ルールはどんなものなんだ？　複雑だったり、親が丸儲けだったりするのは辞退するぞ」
「三対三、Ｌｖ階級なし、種族制限なし、になりますです。ハイ」
「意外とシンプルだな」
わかりやすい方式だと助かる。
あと、奴隷商は絶対にワザと言わなかったのだろうが、勝敗に関することだ。
奴隷商は俺にコロシアムのルールブックらしきチラシを見せる。
各国の文字で書かれていて、メルロマルクの公用語もある。
勝敗の決定は、対戦相手の死亡もしくは気絶、降参と書かれているな。

そして……。
「最後の部分が肝となりますです。ハイ」
「武器は各自持ち込みか？」
「ハイ！　次のコロシアムのスポンサーはゼルトブルの武器商人ギルドとなっているのです。ハイ」
武器商人ギルドが背景の闇コロシアムか……どんな強力な武器が出てくるかだな。
まあ伝説の盾や異世界の眷属器を使えるんだから、何が出てきても文句は言わんが。
「なんなら現在開催中の闇のコロシアムを観賞してみてはどうでしょうか？　多少参考になるかと思いますです。ハイ。開催時間が奴隷オークションと重なりますです。どうしますか？」
ま、そうなるよな……どんなものかを見ておけば対策も立てやすい。
「となると……ラフタリア、今夜のオークションで村出身の奴がいないか見ておいてくれないか？」
キール達を使うという手もあるが、奴等に見せるのはトラウマとかもあってよくないだろう。
……ラフタリアにも同じことが言えるんだけどさ。
「はい、わかりました」
「とはいえ……全体的にどんな奴がいたのかリスト作りしておくのも必要だな。ラフタリア、頼めるか？」
俺はラフタリアに書くものとペンを手渡す。
ラフタリアの目だけじゃなくて、奴隷商のコネクションもフル動員して捜した方が効率的だ。
「は、はい！」
俺の指示をラフタリアは紙に記していく。
オークションに出てくるだけじゃなく、抱え込んでいる連中だっているはずなんだ。
そういう奴を先に特定しておけば直接乗り込んで交渉ができる。
「ふぇぇぇ……」
「さて、とりあえず危険なコロシアムに挑むとして、ラフタリアの攻撃力を考えた方がいいな」
「は、はい」
今のラフタリアの刀は魔物由来のものと、絆の方の世界でコピーした、こちらの世界でも使えるもので構成されている。
そのため、かなり穴がある状態であり、強化も不十分だ。
幸いにして魔竜の素材で出た武器は使えるんだが、四神の方は能力不足で振るうには厳しい。
なので魔竜の刀でどうにか凌いでいる。
グラス達も愛用していた万能装備だ。これ一本でどうにかできるとも言えるんだが、基礎能力の向上や新しいスキルの発掘をおろそかにしてはならない。
そもそも……まだ強化が足りていないらしいしな。
「奴隷商、ゼルトブルで有名な武器屋とか知らないか？」
「案内いたしましょうか？　ハイ」
「うーん……そうだな、頼む」
結構賑やかな都市だから迷子になりそうだ。
「では誰かに案内させましょう」
屈強な男が手を挙げて立候補する。
「よし、じゃあ行くか」

奴隷商の使いに案内されたのは、一番大きいという商店だった。
デパートみたいな大きな建物だ。
「おや？　そこにいるのは盾の勇者様ではありませんか？」
一階の店で何やら見知った顔の奴が店番をしているのに気づいた。
「知らん」
そう、ずいぶんと前に遭ったアクセサリー商が手招きしている。
知らないフリをしたい。
「ここは私が経営している店でしてね。見ていってくださるとうれしい限りです」
『アナタが引き継ぐ店ですよ』って言われている気がする。
ここで無視していると認めたことになりそうだ。
溜息をつきながら視線を合わせる。

「でかい店を経営しているみたいだな」
「ええ、勇者様は何に興味がおありで？」
「武器と防具を見に来た」
「では二階ですよ。ところで一階のアクセサリーに興味はありませんかな？」
俺は店内を見渡す。
これでもかとキラキラ輝くアクセサリーが店内に展示されている。正直、眩しい。
「興味はないな。自分で作る」
「やはりそうですか。ところで勇者様は私の教えた技術を使っておられますかな？　腕が鈍っているといざという時、素晴らしいものが作れませんぞ」
「たまに作っている。それで何度も命を繋いだ」
現に最近も盾のキャップとかラフタリアの鞘とかを作ったしな。
ただ、問題は絆の世界ほどに高性能なアクセサリーが作れていないところか。
ラフタリアの鞘抜刀時に起こるハイクイックも劣化し、フィーロがよく使う程度の素早さに落ちている。
鞘に使われていた素材はどうやらこの世界にない物みたいでな。
この際、別規格の鞘を作るべきか試行中だ。
他に奴隷共のために魔物の素材でアクセサリーの作成をしている。
最近じゃ魔物の骨で作るのがマイブームだな。
硬いし、効果が思いのほか高い。付与をしても劣化が少ないのが強みだ。
難点は付与効果が低いことだけど。
「ほら、武骨なものだがな」
適当に作っていたアクセサリーを見せる。
「ほう！　ボーンアクセサリーとな⁉」
「……ないのか？」
「ないわけではございませんが……ふむふむ、安価ではありますが、実利を望む冒険者にはよさそうな効果が付与されています」

「安物だが、デザインの練習にはいいだろ？」
「ところで勇者様が領地を得たという話を聞きましたぞ」
「……出店したいのなら来ればいいんじゃないか？」
「言質は取りましたからね！」
邪悪に目を光らせてアクセサリー商が叫ぶ。
そう言われると渋りたくなるのが俺って人間だ。
「発展の邪魔をするなよ。あと、料金を要求するからな」
「わかっておりますよ。フフフ……」
どうも俺の知る商人は邪悪な連中が多い。本当に領地に来たら、監視すべきだろう。
「そっちのアクセサリーの売れ行きはどうなんだよ？」
「好評ですよ。とんだ大災害が起きましたからねぇ……民間人も自分の身を守るのは自分だと理解したのでしょう」
なんだかんだで金の入りがいい奴だ。
「あと、勇者様が広めたカルミラ島原産のミラカアクセサリーにも一枚噛んでいますよ」
ああ……あの詐欺商に囁いたアレな。
時々目にするようになって驚いたが。
「じゃ、俺は武器を見に行く」
「次に会う時を楽しみにしております」
「はいはい」
「……闇のコロシアムではお手柔らかに。まあ勇者様が勝つことを見越してこちらは辞退させてもらいますがね」
「――！」
背筋が凍りついたぞ。
こんなに短い間にもう知ってるとか、どんな情報網だ！
「応援してますよ」
「……はぁ」

邪悪な商人を相手にすると疲れるな。
「ふぇぇぇ……あの商人さん、かなりの有名人ですよ」
「やっぱりそうか」
「睨まれたら商売できないとか聞きますぅ……」
「安心しろ、嫌われちゃいないから」
むしろ店を継がされそうで怖いんだがな。
などと雑談しながら二階に上がる。
「わー……すごーい。ピカピカー」
色々な武器がショールームのように展示されている。
フィーロが光りモノに目を奪われている。姿は人間でも鳥型の魔物だからな。
……えーっと、隕鉄の剣とか槍とか色々と並んでいる。あ、目玉商品で触るだけってやつだ。
これだな、錬や元康達がコピーしてきたのは。
お？　霊亀の武具も並んでる。復興のために素材が売り出されているからな。
行商中に聞いた話だが、加工が難しいらしい。
だけどメルロマルクで売っているものとあんまり変わらないのに、値段が滅茶苦茶高い。
こんな大きな店でもあまり加工された感じがしない武器しか並んでいないとは。
ま、原産国とじゃ違いがあるか。
んー……盾とかを見てみるが、親父の店とほとんど変わらないな……。
一応、見たことのない盾もあるから触れておくか。
「あ、ちょっとこの盾、持ってみてもいいか？」
「どうぞ、どうぞ」
店員に承諾を得てから親父の店にない盾を持って、ウェポンコピーを作動させる。
スパイクシールド、フリスビーシールド、ジュエルシールド、プラチナシールド……。
そんな感じで適当に盾をコピーさせた。
「ラフタリア、刀はあるか？」
「あ、はい。こっちに並んでいるみたいです」
おお、さすがは商売の国だな。
なんでも東の国からの輸入品らしい。
ラフタリアは店売りの刀を握っていく。
まあ『コピーしますよ』なんて言ったら店の連中になんて言われるかわかったもんじゃないから黙っているんだけどさ。万引きみたいな気持ちになるな。
「ん？」
店の中で一つ、非売品と書かれて展示されている武器が目に入る。
一振りの片刃の剣なのだが……霊亀の素材で作られた剣なのは一目でわかる。
目利きを作動させて鑑定するか。

霊亀剣　品質……

ダメだ。俺の目利きじゃ完全に鑑定しきれない。
これって白虎ノ太刀クラスの名品だろ。
「そういやラフタリア」
「なんですか？」
「剣はできないのか？」
「あ、はい。剣は残念ながらできないです……」
やっぱり剣はコピーの対象から外れるのか。
この場合は、剣の勇者である錬が該当する。
……そういえば錬は刀とかを扱うことができるんだろうか？
考えてみれば、刃物という扱いで、ラフタリアは錬と似た戦闘能力を持ったようなもんなんだよな。
いずれ錬と出会って、保護した時にでも色々と話をしてやろう。
とりあえずこの霊亀剣、一目で名剣だってわかる。しかも触るのもNG扱いでの展示だ。

近々オークションで取引されるのか。凄いな。やはり名工というのはいるもんなんだな。
ま、武器屋の親父への土産話にでもするとしよう。
「ごしゅじんさまー」
フィーロがツメのコーナーで俺を呼ぶ。
「どうした？」
「いろんなツメがあるねー」
「そうだな」
とはいえ、フィーロが使うツメとなると人型時とフィロリアル形態時とでサイズが分かれる。
最近じゃ人型時に使うことを想定した大きさでも問題はないんだが……。
「買い換える程どのツメは、なさそうだな」
イヌルトクロウは落として行方知れずだ。
なのでカルマードッグクロウの予備をフィーロに与えている。
そしてフィーロ寝巻きはメルティに渡してしまったから今はない。
まあ、防御力よりも俺と一緒にいる時に発動するドーピング効果に意味があったわけで、今のフィーロには必要ないモノだがな。
で、ツメのコーナーにはカルマードッグクロウと同等のツメはないようだ。
地味に攻撃力の高そうな魔法銀のツメなどがあるけど、この程度なら買い換えるほどではない。
リーシアに関していえばペックルレイピアでお釣りが来るぞ。
やはり武器はオーダーメイドじゃないと、もうダメみたいだな。
防具とかは……ラフタリアの防具を買い換えるのも手ではある。
だが……。
「どうしました？」
「何か高価な防具を買うか？」
「むしろそれはナオフミ様の方ではありませんか？」
「まあな……」

今、俺が装備しているのは女王から譲ってもらった中古の魔法銀の鎧だ。
城の鍛冶師が気を利かせ、親父が作ってくれて俺が愛用している蛮族の鎧に似せた細工をしてくれたらしい。
あくまで予備なのだが、どうしてもこのデザインを着せたいらしいな。
どちらにしても汎用品の中では性能の高い鎧だ。買い換えるにしても性能に差はない。
リーシアは……必要ないだろ。コロシアムに参加するわけでもないし。
残り一着の着ぐるみを着せるか悩むが、本人は自信がついたのか中古の胸当てをつけている。
「ラフー？」
ラフちゃんは……鍋とか茶釜、フードとか着せたいが、そういった品はここでは売ってないみたいだ。
武器防具を見に来たのだが、若干無駄足気味になってしまったな。
「買うほどのものはなさそうだから帰るぞ」
「もう帰るのー？」
俺は店の窓からゼルトブルの町並みを見る。
ゼルトブル中の店を回れば掘り出し物を見つけられるかもしれないけどな。
こういう人が多いところではそういった品が出回るかもしれん。
何かに似てると思ったらネットゲームの市場を思い出すんだな、この町の雰囲気は。
かといってぶらぶらと意味もなく歩き回るのもどうかと思うしな……。
どこかで情報を仕入れないといけないか。
「とりあえず奴隷商のところへ戻るぞ」
「そうですね。帰りましょう」
「は、はい」
「楽しかったー」
「ラフー」
そんなこんなで俺達は武器防具屋を覗いて奴隷商の地下奴隷市場に戻ったのだった。

十三話　闇のコロシアム

そして夜になり、俺は闇のコロシアムが開催されている会場に奴隷商の案内で連れていかれた。
俺一人だ。ラフタリアとラフちゃんには奴隷オークションを見てもらっている。
リーシアは別のところで調査。フィーロにはリーシアの警護を頼んだ。
昼の間に奴隷商の管理するコロシアムの方も軽く覗いたけど、そっちは野球場みたいな感じだったな。
こっちは飲んで楽しむ側面を強調しているように感じる。
観客席は……地下なのにビアガーデンのように座席が置かれた区画があり、コロシアムの方は古き良きRPGとかで見るような塀の高い闘技場という感じだ。
他にスロットとかポーカー台とか置いてあるので、闇のコロシアムというよりも地下カジノという雰囲気もあった。
まあ、それでも目玉はコロシアムのようで、闘技場のイメージが強いんだけどさ。
何の試合かよくわからないが、勝負が繰り広げられている。
えーっと……オッズが書かれているな。
投票券の購入は既に終わっていて、観客は試合を見るだけのようだ。
今回の試合は……お？　おお!?
「パンダだ……」
コロシアムで戦っているのはパンダの獣人だった。
対戦相手は……ゾウ獣人みたいだ。凄い対決だな。
「へ！　相変わらず図体ばかりでかいじゃないの！」
「ふん。そっちはコロコロと転がって逃げてばかりだろ」
若干ゾウ獣人が押しているか？
遠くからでもドスンドスンと結構な地響きを感じるぞ。
魔法か何かだろうか？　なんとなく魔力の流れを感じる。
パンダ獣人の方も魔法を使っているのか周りが竹林と化しているな。

鈍重そうなのに生えた竹を足場にしてしなりを利用して跳躍し、竹林内を動きまわっている。
ゾウ獣人も煩わしそうに竹を薙ぎ払っていく。
……熱心に応援している連中を見る。
「いけー！　そこだ！」
「やれ！　ラーサズサの姐御！」
「そこだ！　エルメロ！　ああ、ちげぇ！」
見た感じだと武装した冒険者……傭兵？　そんな連中がけっこういるな。
もちろん、貴族っぽい連中や商人みたいな奴の方が多いがな。俺の近くにはそういう奴が集まっていた。
酒場の方も盛況みたいだし……こんなところで俺達は戦うのか。
完全に見世物だな。まあ、表のコロシアムもそうだったけどさ。
なんて思いながらいると酒場のマスターっぽい奴に睨まれる。
飲んでおかなきゃ目をつけられそうだな。
「一杯くれ」
飲んでもどうってことはない。酔ったことないしな。
出された酒のジョッキを持って試合を観賞する。
そのうち、後方で何やらどんちゃん騒ぎが聞こえてきた。
「んっく……んっく！　ぷはー！　ほらほら、早く飲みなさいよー」
と調子の良さそうな声。
「う……く、まだまだー！」
おおー！　と、周りの歓声が聞こえる。
試合と同じくらい盛り上がってるんじゃないか？
振り返って見てみると一気飲みコールと共に輪の中で何やら拍手が起こっている。
「ど、どうだ！　う……」
やがて、バタン！　という音が響いた。
それと同時に拍手が起こった。

「やー！　相変わらず弱いわねー！　誰かお姉さんに勝てる人はいないのかしらー？」
と、妙に挑戦的な声が聞こえてきた。
「ナディアに勝てる奴がいるわけねえだろ！」
「そうだそうだー！」
「いやー、良いものを見せてもらったぜー！」
「というわけで、お金はもらっていくわねー。ついでに酒代も」
なんて会話をしながら人垣は敗北者を連行して散っていった。
くっだらない勝負をしてるな。飲み比べなんてして何が楽しいのやら。
そう思いながら試合を見ていると、先ほどの飲み比べをしていたらしき女の声がした。
「あらー？　見ない顔ね。今日初めて？　あんまり楽しそうじゃないわねー」
視線だけ、向ける。
そこには黒の長い髪、そしてラフタリアに負けず劣らずの肌の張りと整った顔立ちの和風美人がいた。
年齢は二十代半ばくらいか？
髪とか肌の様子からグラスを連想するが、コイツはグラスとはまた違う。
グラスの場合は顔立ちや表情から真面目さや雅な感じが漂うが、目の前の女はそんなものを感じさせず、どちらかというと気の良い姐御肌のような……そんな面持ちだった。
人間……じゃないな。腕と足が黒い。
ゴムを貼りつけたような黒さだ。
服装も半裸に近い……胸にはサラシ、チョッキを着ていて、腰にはフォールドというのか？　見方によってはふんどしに見えなくもない装備をつけている。
背中には銛を背負っているな。
俺は無言で視線を戻した。こんな奴を相手にする必要はないだろう。
「あら？　試合を見ていたのかしら？」
勝手に隣の席に座って話しかけてくる。
話しかけるな、という空気を察したのか、それ以上しつこく絡んでくる気配はない。

ただ、何やら不敵な笑みを浮かべて頬杖を突きながら、悠々と言う。
「……今日はササちゃんの勝ちね。エルちゃんは気付いてないみたいだし」
「は？」
対戦相手の名前はラーサズサVSエルメロ。
おそらく、ササというのは愛称か何かだろうか？
「ああ、わからなかったかしら？　ラーサズサちゃんが今日は勝つわね」
見た限りだと、エルメロという名前らしいゾウ獣人が力の限り暴れ回っていてパンダ獣人の方が押され気味だ。
正直、力とか総合的な面で見てもゾウ獣人が勝つようにしか見えない。
現にオッズもゾウ獣人に傾いている。
だが……。
「はぁああああああ！　バンブークロー！」
魔法を唱えると同時に、パンダ獣人が地面にツメを突き刺すと……地響きと共に巨大な竹が生え、ゾウ獣人を貫いて地下コロシアムの天井にぶつかる。
「ぐは！」
やがてゾウ獣人を貫いた竹は砕けて散った。
ドスンという轟音とともに、会場が揺れる。

床に倒れたゾウ獣人はピクリとも動かず、周囲に血だまりが広がっていく。
死んだのか？
そう思ったところで担架が運ばれてきて治療師が治療を施しながら運んでいく。
で、審判が現れてパンダ獣人の手を上げた。
「勝者！　ラーサズサー！」
おおー！　っと観客の大きな歓声が響く。
まあ、オッズを見ればパンダ獣人に賭けた方にとっては嬉しい結果だろう。倍率はいいみたいだな。
「よくわかったな」
すぐに会場の整地が始まって、選手は控え室に戻っていく。
「まあねー」
魔法の詠唱をしている気配はあったが、ゾウ獣人も十分に警戒していただろう。
現にゾウ獣人も大技を何度か放っていた。
「賭けてはいなかったのね」
「ああ、闇のコロシアムがどんなものかと偵察にな」
どうもこの女……コロシアムに詳しいようだ。話くらいはしておいた方がよさそうだ。
「あら？　コロシアムに参加する方に興味があるのね？」
「一応な。賭けは二の次だ」
賭けるのはあくまで俺達のオッズが大穴になるようにしてからだ。
「ならもう少し早い時間に来たらよかったのに……今夜の目玉の試合はとっくに終わってるわよ」
「そうなのか？」
「ええ、あそこに今調理中の魔物がいるでしょ？」
俺は女が指差す方角を見る。
するとそこでは恐竜っぽい魔物が捌かれて調理されている最中だった。
出された料理を貴族連中が上品に食ってる。
アレも見世物なのか？



「今夜の目玉試合で負けて死んだ魔物があそこで調理されてるのよ」
「あんなのまで出てくるのか」
「そ、命の保証はできない危険な試合がここの名物なのよ」
まあそういう刺激的なモノを求めるからコロシアムなんて娯楽があるんだしな。
などと考えながら魔物に目を向ける。
見た感じだと……何だろうか？　あの魔物の死因は？
……刃物とかで殺されたようには見えない。
捌かれた後だからよくわからないのかもしれないが、頭の部分を見る限り、目玉の白目具合や肌の様子から見て、魔法によるものだろうな。
強力な火の魔法、か？　何か違うような気がしなくもない。
「で？　貴方は何のコロシアムに出たいの？　お姉さんが詳しく教えちゃうわよー」
陽気な様子で女は話を続ける。
若干ウザい。
「あ、お酒をじゃんじゃん追加してねー」
この女勝手に酒を注文していくぞ！
俺の座っている席にドンドン酒が並んでいく。
「お前が払えよ」
「どうかしらー？　で、何が知りたいのかしら？」
「そうだな、ここでの注意事項とか。特に知りたいのは次の大きな大会だ」
「なるほどね。じゃあお姉さんが教えちゃうわよ。次の大会はチーム戦ね。ルールは基本的に三対三。Ｌｖ制限なし、武器持ち込み可よ」
「そこまでは知ってる。知りたいのはもっと掘り下げた注意事項とか気を付けなきゃいけないことなんだよ。ま、お前の話を信用するわけじゃないがな」
こんなところで見も知らぬ奴に聞くんだ、あくまで参考程度だ。
この女、勝手に俺のグラスに酒を注ぎやがる。

飲まない限り教える気はないとでも言いたいらしいな。なので一気に飲み干す。
「あらー……そうね。気を付けなきゃいけないのは使役されていない野生の凶悪な魔物を投入する参加者かしらね」
「……」
それに意味があるのか？
野生の魔物をコロシアムに投入って……魔物紋で縛らずに投入？
何か裏がある気がするぞ。何があるのか気付け。
俺は調理中の魔物に目を向ける。おそらく、アレのことを言っているんだろう。
参加者にとって脅威となるのはなんだ？
この世界の連中の一般的な上限はＬｖ１００だと聞いた。
コロシアムに参加するような連中は揃って高Ｌｖだろ？
まあ、表の……奴隷商が管理しているコロシアムはＬｖ別という階級があるが、ここは無差別級で制限なしだ。
そんな……上限に達したような連中が脅威と思う要素、野生の魔物……。
俺は過去にフィトリアがタイラントドラゴンレックスを倒した光景を思い出す。
アレって正直に言ってどれくらいの強さを持った化け物だったのだろうか？
戦えなくはなかったが、それでも苦戦どころじゃ済まないと俺は分析した。
一般の冒険者にアレを倒せる奴がいたら、避難誘導なんてさせる必要もない。
「……なるほど、野生の魔物にはＬｖ制限がなく、１００を超える魔物も存在するから投入されるのか」
ゲームとかでイメージするとわかりやすいかもしれない。
Ｌｖ１００が三人で参加して、出てきた魔物がＬｖ２００とかだったらどうなる？
苦戦なんてレベルじゃない。下手すれば全滅だ。
モンスターをハンティングするゲームにだって狭いコロシアムで戦うものがあるが、難易度が高い。
まあ……さすがに霊亀クラスの化け物がいるとは思えないがな。
アレって必要Ｌｖはどんなものなんだろうか？
勇者だと75前後の俺が耐えきれたわけだけど、それって実質勇者補正で四倍だった俺だからこそ耐えきれたわけ

で。しかもラフタリアやフィーロは成長補正とクラスアップでの能力補正が相当付いていたから善戦できていた。

俺なしだと、さすがに勝てないだろう。レベルとしたら攻城戦やレイドクラスのボスと見ていい。オストの協力もあったわけだしな。

軽く見積もっても、一般冒険者が霊亀に正面から挑んで外側を倒すのに必要なのは……。

一般冒険者の能力ってどんなものかは詳しく知らないけれどＬｖ２５０は必要じゃないのか？

もちろん、一人で挑んだ場合だから複数人で挑んだ場合はもう少し下がるだろう。

それでも高い。２００は必要と見るべきだ。

ましてや覚醒なしのリーシアに毛が生えたような連中だったらどれだけ集まっても勝てない。

仮にＬｖ１２０程度の魔物だとしても、冒険者一人……いや三人で勝てるかというと怪しい。

なんだかんだでＬｖ差や基礎能力というのは馬鹿にできないってことだな。

魔物のＬｖ１００と人間のＬｖ１００じゃ同じようで違うのは、ラフタリアとフィーロを見れば一目瞭然だ。

これで相手も三匹で挑まれたら……どうなる？

ルール無用の闇コロシアムならではの危険ってことなんだろう。

「よくわかったわねー。どこかの国の貴族が娯楽のために捕えた野生の魔物を投入して、勝つか負けるか見て楽しむのよー」

陽気な調子で女は酒を飲み続ける。

さっき飲み比べをしていたとは思えないほどの飲みっぷりだ。

「今夜は一匹だったけど、次の大会はチーム戦なのよー。これが三匹になるわけ」

それを聞いて俺はルールの恐ろしさを実感した。

なるほど、相手も人間、もしくは亜人だけと思わない方がよさそうだ。

これはラフタリアやフィーロにも話しておこう。

……また酒を注がれた。まだ話すことがあるんだろう。

「あとはそうね、状況次第で相手に有利な地形を用意されることがあるわね」

「というと？」

「飛べる相手を投入した時に一方的な試合にならないよう、鉄の檻が用意されることがあるわね」

運営側にとって面白くない試合運びになりそうな時には片方に有利なようにされるわけか。

「された方はたまったもんじゃないな」

「観客の援助要素？　賭けた相手にお金で援助できるの」

つまり大穴を当てるために多額の援助をして試合運びを有利にさせるようなことも行われる……どんだけ厄介なんだよ。

不正なんてもんじゃない。正々堂々の試合なんて行われないんだ。

その対価として、倍率が高いということなのか……。

「次の大会は武器商人ギルドがスポンサーだから、高価な武器が選手に投げ渡されることもあるでしょうね。持ち込んだ武器よりも優秀な武器に持ち替えられる危険性と、危険な野生の魔物の投入……。

「まあ、観客から闘士への直接攻撃は厳禁だからそこは安心していいわよ」

「……間接的な援護魔法は？」

「お金の投入がされた場合はあるかもしれないわね」

試合中は目の前の敵にだけ集中していればいい、なんて甘い考えは捨てた方がいいだろうな。

なんて思いながら俺は女が注いだ酒を飲み干す。

というか何杯飲ませる気だ。腹がガボガボになってきたぞ。

「それも参加する試合のルールブックに載ってるからちゃんと目を通せば大丈夫よ」

俺はルールが書かれているところに目を向ける。

今回の試合で許可される援助は——

とか書かれていた。

「強いわねー。お姉さん楽しくなってきちゃった」

何度も酒を飲み干す俺を見て、女は楽しげにしてる。

「はいはい」

「ま、注意しなきゃいけないところは大体こんな感じね」

「そうか」
もうここに用はなさそうだな。俺は帰ろうと立ち上がる。
「あら？　もう帰っちゃうのー？　もっと飲みましょうよ」
「飲まん。とはいえ一応参考になった。礼としてここまでの酒代は出してやる」
どう見ても素人である俺に説明する代わりとして酒代を奢らせるつもりだったんだろう。
とはいえ、俺はケチだ。普段なら奢りなど絶対にしない。
だが、参考になったのも事実だ。後々のことも考えて、金を使っておくのも投資の一部だ。
「それが目的じゃなかったんだけどねー」
「どうだかな……最後に質問だ」
「なにかしら？」
次の試合が始まったが、この女が言う通りの援助が行われているようだ。
「なんでさっきの試合で勝つ方がわかった？」
ルールを詳しく知らないから俺にはわからなかったのかと思ったが、そうだとしても謎が多い。見た感じ、先ほどの試合で援助による選手への助太刀があったようには見えなかった。
「それは勘かしらねー」
「勘かよ……」
まあ勘がバカにできないのは理解しているが。
野性の勘とか、フィーロを見ていれば嫌でも実感するしな。
「気になることがあったらまたお姉さんのところに来なさい。毎晩ここにいるから何かあったら教えてあげるわよ」
何やら陽気な感じに返された。
特に何か俺にやらかそうとしたわけじゃないのか？
「ま、闇のコロシアムに参加するのはあんまりお勧めしないけどねー」
最後の言葉が、妙に俺の不安を掻きたてた……。

十四話　リングネーム

まあ、飲んだくれ女の話は参考程度に俺達は闇のコロシアムへの参加登録を済ませていた。
開催は数日後。
今は奴隷商のところでフィーロと一緒にラフタリアが帰ってくるのを待っている。
リーシアはまた調査したり資料を調べたりしてくれている最中だ。
奴隷商が強引にねじ込んでくれたお陰で俺達はまだ無名の傭兵扱いで済んでいる。
つーか……俺達が問題なく登録できたのにはアクセサリー商も絡んでるだろ。
何でもありのゼルトブルの闇の部分だろうから、この程度は当たり前のように行われていると思った方がよさそうだな。
で、飲んだくれ女と話をしていた時に見ていた試合とは若干異なり、大会は夜だけじゃなく朝も昼も夜も連日試合が行われる……そうだ。
目玉の大会で、参加者自体が多いのが原因らしいな。
俺達が参加するのは一日に一回らしい……けどな。
そんなもん予選とかで弱い奴を振るい落とせばいいだろとは思うのだが、長期的な大会だから商人共が一戦ごとに金を動かしたいからだとか奴隷商に説明された。
一応、後半になると一日に戦う回数は増える予定だとか。
日本人の思考じゃ理解できないルールだな。
まあ、最初の段階で素性がばれるのも面倒だから、大会参加時は俺はもちろんラフタリアとフィーロにも仮面なり素顔や種族がわからないような装備を着用させる予定だ。
「ちなみに上位入賞すれば選手には賞金や様々な品が進呈されますです。ハイ」
「とはいってもな……」
確かに優勝賞金は多い。金貨一五〇枚とは、かなり奮発しているんじゃないか？
だが、それよりも多大な金がこの試合で動いている。

俺達自身に賭けるのは、事前賭博投票券販売が終わる少し前と奴隷商には命じてある。万馬券にしないといけないからな。

あくまで俺達はダークホースとして参加し、優勝しなくてはならない。

他に選手は試合ごとに勝てばファイトマネーがもらえるそうだ。

まあ、俺達からすれば雀の涙なんだがな。

「わかりました。では大会全体の賭けに一点賭けを致しますです。ハイ」

「試合ごとの賭けもあるみたいだな？」

「そちらで儲ける方もいますです。ハイ」

そっちの方がむしろベターな賭博方法だよな。

最初に一回決めるだけの賭けなんて面白味も少ないだろ。

俺が賭けているのはあくまで前評判を元にした賭博なんだな。

「後は更なる元手の調達か」

奴隷狩りを売っぱらった金を元手にするが、まだ足りないかもしれない。

そもそも俺達のオッズに注意しておかないといけないしな。

「表のコロシアム……ゼルトブルの大会には大食い大会があるとか言っていたな。フィーロを出させるか？」

「んー？　フィーロ何かするのー？」

食いしんぼうフィーロをフードファイターとして出せば賞金を稼げるかもしれん。

「賞金は出ますが、優勝賞金はせいぜい銀貨二〇枚程度です。ハイ」

「少なくはないが多くもないな……フィーロもコロシアムに参加させる予定だから顔を覚えられるのは問題あるだろうし……」

「ならばフィロリアルレースに参加させるという手がありますです。ハイ」

「フィロリアルレース……完全に競馬だな」

こっちは現実的な気がするぞ。

競馬とかってかなり儲かるイメージがあるから、悪くはないかもしれない。

闇のコロシアムと一緒で万馬券も狙えるか？

「難点としては、重賞レースに参加するまでに何度か地方レースに出走する必要があるのと、シーズン的に重賞レースに出られるのは一ヶ月くらい先になることです。ハイ」

「むう……フィーロで一発大きく賭けるとかできるなら一考の余地があるんだが……」

「大本の賭博事情があるので、少々難しいかと思いますです。ハイ」

地方の小さなレースでフィーロを無名で出して、一点賭けをしたとする。

一発で大きく当てようと金を払い込むと入れた分だけオッズが傾くからな……他にも有力な奴がいたり、元から賭ける連中が多かったりしないとこの計画の意味がなくなる。

奴隷商の話だと、大抵の大会もそうだが、賭けた者達の金を集めてから、賭けに勝った者へ分配する方式なのとか。

いくら俺達が賭けても、全体の賭け金が膨大でなければ儲けも少なくなる。

しかも顔を知られたらやばいから表の方で参加して稼ぐわけにもいかない。

「はぁ……しょうがない。とりあえずは奴隷のオークションで当たりが出るのを観察する以外は、村にでも戻って行商なり修練なりをしていた方がよさそうだな」

「そうなりますです。ハイ。ところで勇者様？」

「なんだ？」

奴隷商が参加するための資料を作成していて、聞いてくる。

「リングネームはどう致しましょう？」

「ふむ……」

盾の勇者一行とかまんまなものを入れたら隠している意味がない。

俺自身の名前とかを登録しても同様だろうな。

……元々アクセサリー商にバレている段階でかなり無謀なことをしているような気もしなくもない。ここはアレだな。適当に俺だとわかりづらい名前にしておけばいいだろう。

「ロックバレー一行でいいだろう」

「それはどんな由来ですか？　ハイ」

「俺の名字の英語読み……異世界での別称だ」

考えてみればスキル名とかカタカナ英語のものが多いんだから……とは思ったが、盾が翻訳しているんだったな。

ラフタリアやフィーロが魔法を唱える時とか、実際はメルロマルクの言葉で唱えているんだし。

どうも忘れがちだけどな。

ま、ここから俺の名字、岩谷だと連想するのは少し難しいんじゃないか？

錬や樹、元康みたいに異世界人でもないとわからないはずだ。

それにしても……この世界において言葉の意味がどんなものかわからないのが怖いな。

奴隷商が首を傾げているのだから発音として間違っているのかもしれない。

ロクバアレーみたいな発音に聞こえたら別の意味に翻訳するみたいな？

そこに、ラフタリアとラフちゃんが闇のオークションから溜息交じりに帰ってきた。

「どうだった？」

「……いました」

「……そうか」

当たりがいたか。

「どれくらいまで値段が高騰していた？」

俺の問いにラフタリアは俯きながら。

「金貨……九五枚で落札されていました」

……どんだけ跳ね上がるのかわからんな。

こんなバブルなんて破裂してもらいたいものだが、今はこの状況でやっていくしかない。

「とりあえず、村に戻ってコロシアムまで修練するしかないだろ」

「はい……絶対に、勝ちましょうね！」

ラフタリアは強い決意が籠った目を俺に向けていた。

そうだ。ラフタリアの故郷を取り戻すには戦うしか選択肢が残されていないんだ。

「ラフタリア、試合中は偽名で呼び合う方がいいと思うのだがどうだ？」

「わ、わかりました。じゃあどうしましょうか？」

「ふむ……俺の偽名はロックでいいな」

これで盾の勇者だとわからないだろう。

ラフタリアとフィーロはどうするかな。

「ラフー？」

何か捻りがほしいな。ラフちゃん二号とか呼んだら怒りそうだ。

「なんか失礼なことを考えてますね」

「んー……じゃあラフタリアはシガラキ、フィーロはヤキトリにしよう」

「やー！」

フィーロが異を唱えやがった。いいじゃないか。覚えやすくて。

「ナオフミ様、さすがに酷いのでは？　ほら、フィーロも嫌がってるじゃないですか」

む、ラフタリアが言うのならしょうがない。

「じゃあラフタリアは――」

「待ってください。私の名前も失礼なんですか？」

フィーロのことだけだったのか。

「どうだかな。フィーロの名前は……ハミングでいいだろ」

絆の世界ではハミングフェーリーという魔物だったわけだしな。

この世界にその由来を知る者はいない。

「ナオフミ様？　聞いているんですか？」

「試合中、フィーロはいつも通り、俺をごしゅじんさまと呼べ。ラフタリアのことはお姉ちゃんとだけ呼べ」

「はーい」

ごしゅじんさまというのは不特定多数で名前がわからないからな。

「ナオフミ様！」

今の俺達はラフタリアの同郷の連中を少しでも早く買い集めないといけないのだから、何があろうとも、俺は引くわけにはいかない。

村に戻り、それぞれ万全の準備を整えたのがコロシアムの開催される前日のことだった。

フィーロも村の連中と遊んでいた結果、ここを守りたいモノだと認識したのか、戦いに前向きだし、ラフタリアも魔竜の素材で出た刀を十分に鍛えたみたいだ。
現在、俺達はゼルトブルの闇のコロシアム会場の控え室で待機している。
これからは連日戦うことになる。優勝するまでな。
元々秘密主義のゼルトブルのコロシアムだ。選手の経歴なんてかなり詐称されたもので埋め尽くされている。だから有名選手にオッズが傾いているそうだ。
大穴狙いの新参者なんて貴族達も目を向けちゃいないということだな。
ま、負けたって泡銭とか考える豪勢な連中はどんな世界にもいるだろう。
「初戦だ。あんまり注目を浴びないようにしないとな」
奴隷商の話だと開会式は今日の昼に行われ対戦表も発表された。
シード枠という羨ましい権利を持った連中は後半からの出場だとか。
俺達は一回戦からの参戦なので、ここでも理不尽さを感じなくもない。
ま、召喚されて数日で陰謀に嵌められて無一文にされ、汚名まで着せられた状況よりは生ぬるいがな。
試合時間が近づいてきている。
今は夕方か……大会開始が昼だったらしいから、ある程度経過しているな。
今回の対戦相手は……トバークファミリーとかいう、なんだかマフィアっぽいチームだ。
オッズは既に確定しているが……ここで派手に本当は盾の勇者だぜ！　なんてやろうものなら敵対チームへの援助が爆発しそうだ。
名武器とか防具の提供、挙句援護魔法を大々的に掛けられ続けたらたまったもんじゃない。
最悪運営側から変なハンデを負わされたりする可能性もある。
できる限り目立たず、それでいて凄い一行と思わせたい。
となると、援助とか全くさせる暇なく、一撃で仕留めるか？
もしくは苦戦しているように見せて辛くも勝利したようにするかだな。
……どっちにしても相手の実力を見るのが先か。
「とりあえずフィーロ、お前が先行だ。ラフタリアは後方援護……観客に幻覚を見せられるならそうしてくれ」

「フィーロがんばるのー？」
「ああ」
「観客を騙してどうするんですか？」
「目立たないようにするためだ。そうだな……観客に俺達が苦戦しているように見せられるならそれがいいだろ」
「できなくはないと思いますが……やめた方がよくないですか？」
むう……ルール違反ではないが、確かに運営に停められたら困る。しょうがない。
「それでもラフタリア。俺が相手を攻撃しているように見せかけるくらいはしてくれ。盾の勇者だとばれないようにしたい」
「じゃあスキルとかはどうするんですか？」
「……俺はできる限り封印していくしかないな。ラフタリアの方は創作技と思ってもらえるだろ」
今まではバカスカ使いまくっていたからな、少し不安だ。
それでも余計な邪魔が入らずに勝ち上がるためには気付かれない方がいい。
「そろそろみたいだな。ほら、ラフタリアもフィーロも最低限顔を隠せよ。偽名を使うことも忘れるな」
フィーロには目元を隠す仮面と頭にバンダナを巻かせた。
ラフタリアは種族とかがわからないように顔、耳を隠すために兜を被せている。尻尾はもちろん隠し済みだ。
俺も顔はわからないように鉄仮面をつけている。
ゴーンと銅鑼のような音が鳴り響き、俺達は控え室から闘技場へと足を向けた。
歓声が響く。俺が見学に来ていた時よりも遥かに多い観客が今、会場でひしめき合っている。
闇のコロシアムだというのに客が多いことで……。
あ、客層のほとんどはお忍びで来た貴族なのか揃って仮面をつけている。
かなり不気味な光景だな。コイツ等全員皆殺しにしたら、いろんな国が困りそうだな。
などと考えていると、反対側の入り口から腕に覚えがありそうな筋骨隆々の傭兵が三人出てきた。
「ではこれから、ロックバレー一行対トバークファミリーの決闘を開始するぅぅぅぅぅぅ！」
司会が絶叫に近い叫びで観客を盛り上げる。

「は、女とガキ連れかよ。完全に見世物だな」
「待て待て、この男の前でこの女とガキに残虐なことをしてやったら観客も喜ぶんじゃねえか？」
「そうだな。じゃあ、まずは男を袋にしてからやってやるか」
なんとも下品な連中だな。舌舐めずりなんて雑魚のすることだぞ？
……なんていうか、行商中に遭遇する盗賊共といい勝負だな。
「……行けるか？」
「うん！」
俺達への観客の援護はない方向で考えた方がいいだろう。
ま、初戦も初戦で、注目試合じゃないから気にする必要は……ないか。
観客も声を出してはいるが、その視線はコイツ等が言ったような惨状にならないかという期待に満ちたもののようだし。逆に明らかに弱そうな女子供連れが勝ったら、それはそれで盛り上がるかもしれない。
ある程度人気を獲得すれば、こちらも援護をもらえるかもしれないしな。
「それではぁあああああああ！　はじめぇえええええええ！」
また大きな銅鑼のような音が響き渡り試合が始まる。
——と同時に、トパークファミリーの至近距離に何やらモーニングスター等の鈍器が投げ込まれた。見た限り、かなりの名品だな。
おそらく、それで俺を嬲るのを期待して誰かが投資したのだろう。
「ツヴァイト……オーラ」
俺は小声でフィーロに援護魔法を掛ける。
それからフィーロを後ろから抱えて肩に乗せる。
フィーロも俺が何をさせようと思っているのか察したのか、肩に乗っかってツメを前に掲げる。
フィーロを肩に乗せるのには意味がある。
俺には背負い時能力上昇（中）という便利な技能があるのだ。
これは俺の背に乗っている限り、乗った相手の能力がしばらくの間、総合的に上昇する。
今のフィーロは人型だからそこまで重くもないし、俺達の動きが鈍ることもない。

「ごしゅじんさま、どうしたらいいのー？」
「そうだな。あんまり手の内を見せるのもどうかと思うしな」
強すぎたら目立ちすぎる。
ここでの試合はあれが一番だろう。
奴隷商から聞いた話だと、そんなに有名な連中じゃないらしいから演出する必要もない。
うん、決め台詞も思いついだ。
「よし。思い切り、素早くやれ！」
「わかったー」
フィーロはハイクイックの準備とばかりに意識を集中する。
「なんだぁ？　そのポーズは！　お遊戯でも始める気か？」
「楽勝だな。はははははは！」
「今夜の酒は美味そうだぜ！　挙句、女とも遊べるんだからよ！」
トパークファミリーは揃って武器を持って俺達の方へと駆け出してきた。
名のある武器っぽいモーニングスターが振りかざされ、俺は盾で受け止める。
ドスンと一撃、その直後にボッとモーニングスターの先が燃え上がり、業火となる。
そんな効果まであるのか……確かに良い武器だな。
俺はマントで炎を弾くが、俺の足元に火柱が上がった。
ま、俺自身の防御力が高いからか炎は散り気味だけどな。
「あつ！」
フィーロが熱がっているな。
俺が耐えた場所から少し手と足がはみ出ていたようだ。
火柱自体は存在しているが、俺自体は焼けちゃいない。
マントをはためかせる。すると残った火柱は一瞬散ったが、再度出現する。
残留効果まであるのか……地味に優秀な武器だな。
「ははははは！　こりゃあすげーぜ！」

火柱となっている俺から僅かに距離を取った傭兵が、追撃とばかりにモーニングスターをブンブンと振り回して、横薙ぎに振り抜く。

俺はモーニングスターの軌道に合わせて左手を出し、ガスッと受け止めて鎖を掴んだ。

「なに!?」

「あ、兄貴！　てめぇ！　喰らえ！」

「はあああああああ！」

トパークファミリーは抵抗する俺に群がってそれぞれ支給された武器を振りかざす。

おお！　いい感じに集まってくれたじゃないか。

「ハミング、もういいか？」

「うん、準備完了ー」

「よし！」

俺は鎖をたぐって傭兵を引き寄せてからフィーロを……思い切り投擲した。

「ごー！」

フィーロは俺の投擲に合わせてハイクイックの後に、スパイラルストライクを放って群がってきたトパークファミリーに突進した。

「「「うわああああああああああああああああああ!?」」」

ズサッと、フィーロは華麗に着地する。

なんか必殺技を放ったみたいで、カッコいいな。背中の羽も優雅に見える。

観客も息を飲んでいるみたいだぞ。

僅かに遅れて、激しく切り裂かれたトパークファミリー共が地面に打ちつけられる。

援護魔法のツヴァイト・オーラを受け、俺の背に乗ったフィーロのハイクイック&スパイラルストライクだ。

幾ら能力が三割まで低下していたとしても、こんな一撃を受けて耐えきれるものかな？

「ん？　この程度で終わりか？　お前等、Ｌｖが低いんじゃないか？　コロシアムを舐めるんじゃないぞ？」

俺は残忍な笑みを浮かべて倒れ伏す敵の顔面を踏みつけながら、大きな声でそう言った。

その動作が気に入ったのか絶句していた観客から喝采が上がった。

火柱を起こす面白モーニングスターは俺の手にある。

そう、あくまで一瞬でカタが付いたのは対戦相手が修練不足だったのだとアピールするんだ。

高Ｌｖなのは前提だが、高Ｌｖとはどの程度を指すかは大会による。

無差別級ならその規定も曖昧だ。

「そ、そんな馬鹿な」

敵の一人が呻くような声を上げた。

「……黙らせておけ」

「はーい！　てい！」

「うぐ――!?」

フィーロの踏みつけを受けてトパークファミリーの連中はそれぞれ昏倒した。

試合運び自体は思ったよりも簡単だな。

「しょ、勝者！　ロックバレー一行おおおおおぉぉぉぉぉぉ！」

司会も相手の戦闘不能を理解したのか俺達の勝利を宣言する。

わかっていたが、相手を殺すか失神させなきゃいけないのは面倒だな……。

場外とかあるならそうするのが一番だが、この大会にそんなルールはない。

「ふう……」

ラフタリアが後方で魔法を唱えるのを終え小声で囁く。

「言われた通り、ナオフミ様がトドメを刺したように見せましたよ」

「ご苦労。助かったぞ」

これで盾の勇者疑惑もある程度、誤魔化せる。

俺はそのまま勝利を宣言するように手を振って、なに食わぬ顔でトパークファミリーが取り落とした武器を拾って控え室に戻ってきた。

「あの……ナオフミ様？　その武器をどうするつもりで？」

「ん？　もらえるのかと思って」

何にも言われないみたいだし、殺し合いが前提のコロシアムだ。

相手の武器を奪っちゃいけないなんてルールもない。
相手の援助をしていた商人っぽい奴は悔しがってはいたみたいだが、余裕はあったぞ?
「武器を上手く使ってくれよー」
とか、悔しがりながらも俺に叫んでいた。
俺達がこの武器を使って勝ったことにすれば、自分のところの店なり商会が儲かるとか思っているのかもしれない。
だが、俺は盾以外使えないし、ラフタリアも刀以外は使用不可だ。
となるとフィーロだが、フィーロはツメが好きだしな。
とりあえずフィーロに聞いてみるか。
「フィーロ。お前、この武器使ってみるか?」
「んー?」
ダメっぽい。つーか、フィーロが乱暴に振りかぶっても上手く扱える保証はない。
「よし、じゃあフィーロ。試合が始まったら今度はこの武器を相手に投げつけるんだ」
「わかったー!」
フィーロの怪力で投げつければ多少は威力があるだろ。
その後は知らん。
後は村で使うなり、売り払うなりすればいい。
奪った相手の武器を一度は使うようにすれば、奪われた商会の連中にとっても宣伝になるし、援護をしてくれるかもしれないからな。
おお。我ながら名案だ。
さて、いつまでも会場にいる意味はあまりない。
次の試合に出る連中も控えているみたいだし、観戦するかさっさと帰って休むかだな。
ファイトマネーは初戦だけあってかなり安い。
フィーロは俺が与えたモーニングスターを新しいおもちゃと勘違いしたのか、ブンブンと振って遊んでいる。
「じゃらじゃらー」

これだけを見たら微笑ましいが、持っている武器が武器だからな。
「危ないんだから注意しろよ。特に先端を何かにぶつけないようにな」
「はーい」
結局、フィーロはモーニングスターを村に持ち帰って村の連中と一緒におもちゃにして遊んでいた。
ぶつかった場所に火柱が出現する面白武器だもんな。
ガキ共はこの武器でキャンプファイアーをしたがる。
火事にならないように注意するのに困った。

翌日、二戦目だ。
「次の対戦相手は……」
対戦相手のチーム名とか確認する必要もないか。全勝して優勝を狙うのが目的なんだしな。
そう思いながら銅鑼の音と共に闘技場に入る。
……対戦相手を見て俺達は身構えた。
檻に入ったグリフィンが三匹。
「ケェエエエエエ!」
凄いやる気を見せている。アレが危険な野生の魔物か。
グリフィンと戦ったことはないが……。
グリフィン・エリート。
俺の視界にグリフィンの魔物名が浮かぶ。どうやらグリフィンの上位個体みたいだ。
一般冒険者が倒すのに必要なLvがどのくらいかは知らないが、地味に興味深い対戦カードらしく、観戦者が昨日よりも多い。
……厄介な相手と当たっちまったな。
あの酔いどれ女が注意していた勝負になったぞ。
「うー……」
フィーロが威嚇し始めた。

そういやフィロリアルってグリフィンとも仲が悪いらしい。
確かグリフィンって馬を敵視しているとかファンタジーの本で読んだ覚えがある。
なるほど、乗り物としてのプライドがぶつかるとかだろう。
フィロリアルってドラゴンとも仲が悪いし、嫌いな相手が多いな。
まあ、やる気になってくれたのはいいが。
「ハミング、手加減できるか？」
「うー……」
ダメだな。おそらく本気でやる気だ。
「じゃあハミング、始まったら俺が与えたモーニングスターを投げつけろ。間違ってもフィロリアル化するな」
神鳥と言われるフィーロを見れば盾の勇者一行だと気付く観戦者、貴族も出てくる。ましてや、人化する魔物なんて見たら関心を惹きすぎるだろう。
そうなる前にできる限り目立たないように敵を倒したいのだが。
しょうがない、地味に強くていつの間にか登りつめたダークホースという設定は諦めよう。
だが、勇者であることは、まだ隠せるのなら隠したい。
勇者と無名の強者とでは掛かる負担が違いすぎる。
「わかったー」
後はどうするか？
「ラー――シガラキ、あいつ等を倒せるか？」
「やってみます」
「それでは、勝負、開始ぃいいいいいいい！」
銅鑼の音と共にグリフィン共を閉じ込めていた檻の入り口が開けられる。
「ケェエエエエエ！」
勢いよく檻から出たグリフィン共は、俺達を睨みながら凄い速度で近づいてくる。
すぐにでも飛びかかってきそうな勢いだ。
観客席では仮面をつけた貴族共がボソボソと囁き合いながら好奇の目を俺達に向けている。

大方、前回の試合とかでコイツ等が残虐に対戦相手を殺したとかしたんだろうな。
グリフィン共のツメに血の跡がまだ付いているし。
「一瞬で決めます」
「そうだな。下手な援護をされたら面倒だ」
ラフタリアが刀の柄に手を掛ける。
「……ツヴァイト・オーラ」
今回も小声で援護魔法をラフタリアに施した。
ラフタリアが駆けだした。
呪いの影響を受けているといっても、Lv補正で素早く動けないこともない。
集中すれば集中するほど、周りがゆっくりに感じる。
それは相手のグリフィン・エリート共も同じだろうがな。
「てぇえええええええい！」
フィーロがグリフィン・エリートに向けてモーニングスターを思いっきり力を込めて投擲する。
「ケェエエエ!?」
意表を衝かれたのか、グリフィン・エリートは羽ばたいて避けようとしている。
一匹はモーニングスターが羽に命中、火柱が上がって燃え上がった。
「はぁあああ！」
更に抜刀したラフタリアの加速は止まらない。
「瞬刀・霞一文字！　突刀技・心殺一式、二式！」
先頭に出ていたリーダー格のグリフィン・エリートを一撃、後方にいる若干小柄な奴等に素早く斬りつけた。
絆の血花線じゃないが、かなり素早く斬りつけたと思う。
くるくると刀を回して付着した血を飛ばし、鞘に収める。
「すいません。残念ですが、速度が足りませんよ」
リーダー格のグリフィン・エリートは胸を中心にズルッと切り裂かれ、後方の二匹は血飛沫を飛ばして倒れ伏す。
目立ちすぎたか？

ま、ラフタリアのスキルは俺のように露骨におかしな攻撃をしているように見えないのが長所だ。もちろん、スキルのように見えるモノもあるんだが、一見すると素早く斬ったようにしか見えない。

俺みたいに空中に盾を出現させるとかしたら一発で勇者とばれるだろうけどな。

それとも魔法とか思われるのか？　うーん、基準がまだ掴めないな。

観客共も司会も、共に絶句している。

「しょ、勝者！　ロックバレェエエエエエ一行ぅぅぅぅぅぅぅぅ！」

絶叫する司会。観客の方はワンテンポ遅れて喝采する。

あまりにもあっさり決着がついたので、対応しきれていない感じだ。

「やっぱり本調子じゃないですね。あの程度の相手をスキルを使ってやっと一撃です」

「そうか」

「じゃらじゃらー！」

フィーロがお気に入りのモーニングスターを拾ってから戻ってくる。

適当に手を振りながら控え室に戻った。

「目立たないようにと思っていたが、難しそうだな」

「そうですね。すいません」

「俺が命じたことなんだから気にするな」

しょうがないと思うしかない。杜撰かもしれないが怪我はさせたくない。

「フィーロは村に戻るか？」

「うん！　そういえばリーシアお姉ちゃんは？」

「コロシアムの調査を任せてる」

リーシアはラフちゃんと共に強豪チームとかを調べてくれている。

どれだけ分析できるだろうか。

なんだかんだで博識だから何かの役に立つかもしれない。

「ばいばーい！　フィーロ良い子にしてるからねー」

最近お気に入りのおもちゃになりつつあるモーニングスターをじゃらじゃらと振りまわしておいて、良い子はどうなんだ？　良い子は火柱は上げないだろ。火遊びレベルで危険だ。

「はいはい、あんまりそれで遊ぶなよ」

「はーい」

ポータルでフィーロだけ村へと帰す。

フッと俺の目の前からフィーロが消えた。

「じゃあラフタリア、今夜も頼んだぞ」

「はい……憂鬱な時間になりますね」

「そうだな」

金がなくて村の生き残りを購入できない。買われていくのを見ているだけなのは辛いが、かといってどこの誰に買われたのかを調べておかないと金ができた時に購入できないときたもんだ。

「ま、意味のないことじゃないんだ。がんばってくれ」

「わかっていますよ。じゃあナオフミ様もがんばってくださいね」

「あいよ」

俺の方もリーシアと同じくコロシアムでの試合観賞が残っている。

ラフちゃんが応援してくれたら少し嬉しい気がする。

十五話　襲撃と陰謀

毎度おなじみというわけじゃないが、酔いどれ女と出会った酒場の方へと行く。

割と賑わっている。まだ試合は続いているようだから、客の意識はどっちかというとコロシアムの方に向いているみたいだけどな。

で、試合待ちの傭兵とかが集まって情報交換中って雰囲気だな。

「あらー？」

適当に席に座って酒を注文すると、この前の酔いどれ女が俺の元へといそいそとやってきやがった。

ちっ！　目をつけられたか！
「いい感じに勝ち進んでいるみたいね。お姉さんも試合を見たわよー？」
「よくわかるな」
誰かわからないように敢えて鉄仮面とか面倒なものをつけているのに、よくわかったもんだ。
「そりゃあ体つきとか歩調でわかるものよ」
そういや仮面とかの類ってアニメや漫画だと家族でもわからないものだが、実際は一発でわかりそうだよな。わからない時点で相当繋がりが薄いとも言える。
俺の工作は無意味だったか？
「そういえば自己紹介をしてなかったわねー。私の名前はナディアよー」
「……」
本名を教えたら身元がばれそうだな。
どうする？　まあ、リングネームで名乗っておこう。
「ロックだ」
「そう、ロックちゃんね。ところでロックちゃんは大会には慣れたかしら？」
「思ったよりは戦えているな」
強いのを隠して戦うというのは思いのほか難しい。結局は半分バレたようなもんだ。
樹はそういうプレイが好きらしいが、理解できんな。
強いのを知られると本当の意味で面倒だから隠しているだけだし、隠さなくてもいいなら今すぐにでもフィーロを大暴れさせたい。
「みんな注目してるわよ。あのグリフィンを瞬殺しちゃったからねー」
「やっぱり注目カードだったのか……」
そうねーと、ナディアは前回と同じく大量の酒を注文して飲みながら話をする。
どんだけ酒好きなんだこの女は。
「プハァ！」
で、この酔いどれ女ことナディアは近寄ってくる傭兵共を手で軽く追い払っている。

戦いで注目されているとか言っていたから、俺に質問でもしようと思っていた連中かもしれない。
「そんなロックちゃんにお姉さんから大会での注意事項その二を説明しようかしら？」
「なんだ？」
まだ何かあるのか？
「まあ、毎回よくある問題というよりも、大会参加者は常に気を付けなきゃいけない常識のお話」
「ああ」
「正式なところがやっているコロシアムだとあまりにも多いと問題があるし、場合によっては失格になるお話なんだけどねー」
「だから何を言いたいんだよ」
というところでナディアはジョッキに酒を注いでから俺に差し出す。
飲めってか？　はぁ……しょうがねえな。
俺は渡されたジョッキに入っている酒を一気に飲む。
果実酒だな。しかも中に果物がまだ入っている。
酒と混ざり合ってかなりフルーティな味わいだ。どこかで飲んだことがある気がする。
「ふう……で？　何なんだ？」
俺は飲み終わったジョッキをテーブルに置く。
「んー……そうねー」
なんてもったいぶっている割にいつまで経っても話す気配がない。
「ロックちゃん、お酒強いわねー」
「水と変わらんな。酔ったことがない」
ナディアという女は、大きく目を見開いた。驚いているようだ。
どういう反応だ？
「そうねー……じゃあお話ししようかしら？　論より証拠、ここから出てちょっと夜風の散歩をしましょうよ」
「試合はどうするんだよ」
「しばらくは勝ち残れない子達ばかりよ。昨日確認したから大丈夫」

む……この前、ナディアは勘で勝つ相手を当てていたからな。
もしかしたら間違いはないのかもしれないが……。
さっきから妙にぎらついた目で見てくる傭兵共が煩わしいのも確かだ。
ここは目立たないリーシアに調査してもらって俺は早めに戻るのも手かもしれない。
正体は隠しているつもりなんだがな。
立ち上がったナディアの後を追って俺はコロシアムを後にした。

夜のゼルトブルの町は眠らない町と表現するのがピッタリなくらいの賑わいを見せている。
淫乱な店とかも結構並んでいるみたいだな。
看板を見ても人間、亜人といろんな種類の店が……あるっぽい。
酒場も豊富だし、そこら中から騒がしい声が聞こえてくる。
とはいえ、ナディアは夜風に当たりたいと言って裏路地の用水路沿いを歩いていく。
ゼルトブルって水路伝いに海へと続いている。船でも来られるところだ。
その影響か夜風がなんとなく磯臭い気がする。
裏路地の入り組んだ用水路はヴェネチアみたいな雰囲気があるな。
ゆっくり散歩するにはいいかもしれない。
「それでロックちゃん、さっきのお話なんだけどね」
「ああ」
「注目されると割と多くなるというよりも、一回戦辺りから起こっている出来事に気付かなかったかしら？」
「ん？」
俺はリーシアが調べた一回戦の勝敗表を思い出す。
俺達の勝利にしか興味がなかったから気にしてなかったが、何か問題があったか？
んー……そういえば、俺達の試合が前倒しになったんだよな。
前の試合がそんなに早く終わったのかと思ったくらいだ。
で、さっきも時間調整とかやっていた。

今日の勝敗表を照らし合わせた。
「妙に不戦勝が多いな」
参加表明だけして、当日に来ないとかあるんじゃないか？
それとも時間にあまりにもルーズだからか？
やられた方はたまったもんじゃないな。どんだけ杜撰な時間管理だよ。
と、平和的な理由を思い浮かべるが、既に脳裏には答えが出ている。
「そうよー。この理由、わかる？」
「……」
この思わせぶりな言葉に、俺の背中に嫌な汗が流れる。
その時、チャキッという音と共にガラの悪そうな男共が路地裏から現れて俺達を取り囲んだ。
く……罠に掛けられたか？
状況としてこちらは俺一人。攻撃を耐えて人が多いところへ逃げれば切り抜けられるか？
いや、反撃効果のある盾にすれば追い返すことくらいはできるだろう。
この女！　俺を罠に掛けるとは身のほど知らずも大概に——
「あら、この程度でお姉さんを止められると思っているのかしら？」
「うるせえ！　カモがネギと一緒にノコノコと歩いているんだ！　やらねえ手はないだろうが！」
ガラの悪そうな連中のリーダー格らしき奴……酒場にいたな。
傭兵か何かだろうか？　ある程度腕に覚えはあるように見える。
「ナディア！　それにロックバレー！　俺達のために、死ね！」
男の掛け声と共に周りの連中が襲い掛かってくる。
俺は盾を前に出して受け止めるのだが……。
「あらあら、せっかちな子は嫌いじゃないけど、おいたが過ぎるわね」
と、ナディアは呟き、背中に背負っていた銛を構えて、魔法を詠唱する。
『力の根源たる私が命ずる。真理を今一度読み解き。雷よ我が前の者達を撃ち貫け！』
「アル・ドライフア・チェインライトニング！」

ナディアの鉱の先から目が眩むほどの高電圧の雷が幾重にも解き放たれて、ガラの悪い男達を撃ち貫く！
「ギャアアアアアアアアアアアアアアア！」
「アガガガガ――」
速い！　かなり戦い慣れした動きだ。
バチバチと光り輝く雷がまるで意思があるかのように、その場にいた全ての連中を薙ぎ払っていった。
「この程度の連中しか来なかったの？　面白くないわねー」
男達は長い間、仰け反って痺れていた。
やがて白目を剥いて倒れ込む。この症状、見覚えがあるぞ！
ナディアと初めて会った時のコロシアムで振る舞われていた魔物と同じだ！
「まだ……だ！」
「あら？」
その中でも傷が浅い奴が起き上がって素早くナディアに襲い掛かる。
俺は完全に無視か？
ま、助ける義理もないし、ナディアの動きを見る限り、助ける必要もなさそうだ。
ナディアは素早く鉱を回転させて襲い掛かってきた男の懐に強く突き刺し、重く一歩を踏み出す。
「グハ――」
ドスンという衝撃と共に男は路地裏の闇の中へと飛んでいった。
やがて壁にぶつかった音が響き……静かになったな。
「こんなところかしらねー」
余裕の勝利とばかりにくるくると鉱を振りまわして、ナディアは鉱を背負い直す。
「これでわかったんじゃないかしら？」
「……まあな」
不戦勝の理由は相手選手への襲撃か。
その結果、相手は戦闘不能……再起不能や死んでいる奴とかもいそうだな。
返り討ちとかもあるのだろうが、こんな感じに襲ってくる連中も多いってことか。

大金が絡んだ大会で、しかも闇の大会だからな。
ああ、事前に誰が勝ちあがるかを賭けるのは試合すら起こらずに敗退する奴が出てくるからか。
なるほどな、選手が棄権してもいいように事前に賭ける制度を取り入れているんだな。
大会賭博の信用はどうなっているんだろうな？　よくこんな大会で賭けられるもんだ。
「ロックちゃんの戦い方もいいけど、勝てないと相手を諦めさせるほどの強さを見せつけるのも手よ？」
「じゃないとこういう面倒な輩に狙われるってか？」
「お金に関わるから、みーんなが諦めるわけじゃないけどねー」
しかし……妙に強いな、この女。ただの飲んだくれじゃなかったのか。
「手段を選ばず、あの手この手で来るから気を付けなきゃだめよ。あんなところでボケッとしていたら狙ってくださいと言ってるようなモノなんだから。たとえお姉さんが相手でもね」
ナディアはなぜか俺の手を握る。
「その理屈だと、お前も勝つために手段を選ばないみたいだな」
「ええ、ロックちゃんに一回やったわよ？」
何？　コイツが何をしたんだ？
魔法で俺をついでに感電させようとしたとかか？
残念だが、流れ弾に当たっても痛くも痒くもない。
それとも酒に毒物でも仕込んだとかか？
毒物鑑定の技能を持っているから、気付かないはずがない。
実際、盾の技能のおかげで俺を暗殺するなんて不可能に等しい。
そんな状況でコイツは俺に何をしたっていうんだ。
と考えていると、ナディアはなぜか俺の手を胸に当てる。
胸はかなりある方なんじゃないか？　見た感じ、ラフタリアよりもあるだろうな。
考えてみれば女の胸に触るのは初めてかもしれない。
「お姉さんのおっぱいー」
……馬鹿なんじゃないかこの女。少し意識しそうになったのに冷めたぞ。

俺は掴(つか)まれた手を思い切り振りはらう。
「あら？」
「で？　俺に何をしたっていうんだよ」
「そうねー。今回はその罪滅ぼしにと、お姉さんからの愛の告白！」
「悪ふざけをやめないと帰るぞ」
「ロックちゃんは真面目ねー」
酔いどれ女はケタケタと陽気に笑いながら言う。
いい加減にしてほしいのだが……。
「さっきのロックちゃんのお酒にはルコルの実を混ぜていたのよ」
「ああ……なんだ。その程度か」
「暗殺でも使われるのよー？　特に酒場じゃ」
まあ、水で薄めて飲むものらしいからな。
なんだかんだで行商の時に行く先々の村で身分証明の如く差(さ)し出される果物だ。
なるほど、俺にとって毒にならないものは盾も反応しない。
つーかルコルの実ってそんな使い方があるのかよ。
もはやヒ素どころじゃないくらい暗殺に使える果物じゃないか。
俺には体質的に効かないみたいだけどな。
ナディアは俺に素早く抱きついて耳元に軽く接吻(せっぷん)する。
「何すんだ！」
性的なアピールでもしているつもりか？　いい加減にしろ！
ナディアはてくてくと歩いて数歩離れてから振り向きざまに、陽気なのか、それとも俺を心配しているのか、楽しみなのかよくわからない瞳に笑みを浮かべながら言った。
「できればコロシアムで出会わないことを祈ってるわ」
そう言って、ナディアはゼルトブルの路地裏へとカツカツと靴の音を立てて消えていく。
「できればどこかで諦めて……」

という言葉を残して……。
何なんだ？
俺に毒を盛ったかと思えば闇のコロシアムでの危険を実戦交じりに教え、心配してるのか誘惑しているのかわからない態度で去っていったぞ。
挙句、諦めろとか。
残念だが諦めるわけにはいかないんだよ。
俺は路地裏から出てラフタリア達と合流するために奴隷市場に戻った。

「同郷の奴はいたか？」
ラフタリアが、俺を出迎えてくれた。
「今日はいませんでした」
「そうか、よかったな」
リーシアが護衛代わりに付き添っている奴隷商の配下と共に帰ってくる。
「ふぇええ……怖かったですぅ」
「ラフー！」
「関係者だと思われたら危ないらしいぞ。勝つためにはどんな手も使う連中らしいからな」
「ふぇええ！」
その後、安全性を考慮して村にポータルで帰還した。
匂いかなんなのかは知らないが、フィーロがすぐにやってくる。
「ごしゅじんさま、おかえりー」
「ああ、もう夜だがガキ共は寝たか？」
「うん、フィーロが子守唄を歌ったら、もう食べられないって」
ベタな夢を見てやがるな。
「それで、ラフタリアの方は大丈夫だったか？　コロシアム参加者は狙われるそうだぞ」
「え？　ああ、アレってそういう意味だったんですか？　身を守るために斬り捨てましたけど……」

……既に対処済みだったか。
返り討ちにしたということは明日は不戦勝だな。
それにしても斬り捨てたとか……ラフタリアはどこへ向かっているんだ？
「殺ったか？」
「なんでそんな物騒な……二、三日は動けない程度に痛めつけただけですよ」
それもどうなんだろうな？
なんだかんだでラフタリアも逞しく育ったもんだ。
「ナオフミ様達の方はどうだったんですか？」
「俺の方は、うーん……酒場で知り合った奴に、勝ち進むためには襲撃に気を付けろと注意された。それ以外の収穫は特にないな。リーシア、お前の方はどうだ？」
「は、はい！　闇のコロシアムの試合の資料をどうにか閲覧することができましたぁ！」
「ほう……」
大会に常勝しているような注目選手とか、気を付けなきゃいけない相手とかをチェックできるだろう。
「いろんな選手がいるみたいなんですけど、今回の大会では特に気を付けなきゃいけない選手がいました。もしも当たったら苦戦は必至だと思います」
「勝てないとは言わないのな」
「は、はい……」
今までの戦いをリーシアはその目で見てきたわけだからな。
闇のコロシアムの大会だって、人の業こそ見えるが霊亀のような恐ろしさと比べれば可愛い方だろう。
しかも強さだって絆やグラス達を見ていたら弱く感じる。
そんな連中と一緒に戦っていた俺達なんだ。怖くなんてない。
「で？　誰なんだ？」
「はい。注意しなきゃいけないのはチーム戦なのに一人で参加していて、必ずといっていいほど、優勝、もしくは上位に入る人です。他に一人、似たような人がいるようですけど今回は不参加でした」
チーム戦に一人で挑むってどんな勇者だよ。

七星勇者がお忍びで闇のコロシアムにでも参加してんのか？
ありえなくないな。ぶっちゃけ行方知れずの三勇者だっていそうなのにな。
「で？　誰なんだ？」
「はい。リングネームはナディアと名乗っている方らしいです」
……はい？　つまりあの酔いどれ女のことか？
どんだけだよ。
とは思うが……魔法の腕前や、一撃しか見ていないがあの動きを見ればわからなくもない。
偶然とはいえ、そんな奴と顔見知りになったのか。
「どうしたんですか？」
「いや、何でもない」
……どっちにしても戦うのなら気を付ける必要があるな。

十六話　ナディア

そんなこんなで俺達は、試合数が相対的に減ったお陰で一日に二回戦うように変更されたコロシアムで連日勝っていった。
案の定、襲撃を受けた翌日は不戦勝だったしな。
案外襲撃待ちをするのもありかもしれない、などと考えたくらいだ。
対戦者やそのバックの連中は本来あの手この手で妨害をしてくるらしいのだが、俺の背後にはゼルトブルの闇に深く関わっている奴隷商一族とアクセサリー商がいる。
アクセサリー商は絆の世界で手に入れた機材の話をチラつかせたら飛びついてきたぞ。
金の匂いには敏感な奴だ。上手く利用してドロップ機能を再現した道具と波の召喚を再現した道具の量産を図りたい。
で、奴隷商とアクセサリー商……この二つの組織のお陰で、陰湿な、遠回しの妨害の方は未然に防げている。

他に奴隷商が仕入れた話によると俺達はナディアの関係者ということで、みんな身を引いたとかいう怪しい噂が流れているとかなんとか。
この頃になると俺達の評価もかなり上昇していて、注目プレイヤーとなってしまっていた。
基本的に試合が始まると同時に決着がつくからな。
フィーロが最近おもちゃにしているモーニングスターを援助した奴は、毎回俺達を応援するようになった。
この前、別の武器を投げ入れられた。こちらもフィーロが投げて使っている。
なんて感じに勝ち進んでいた俺達だった。
もう大体の対戦者が脱落し、残りの対戦カードも大分減って、準決勝だ。
「明日の対戦相手は誰なんだ？」
「これが明日の注目カードです。ハイ」
と、奴隷商は汗を拭きながら俺達の明日の対戦相手が書かれた紙を手渡してきた。
そこには……ナディアの名前が書かれていた。見た感じシード枠だったようだな。
とうとうあの女との戦闘か。
「リーシアさんが言っていた方ですね」
「そうだな」
「んー？　明日戦う人ー？」
フィーロが興味深そうに俺の持つ紙を凝視している。
「雷の魔法を使ってくるが魔法使いじゃない。近接もできるものすごく強い奴だ。チーム戦を一人で戦っているしいからな」
「どれだけ強いんでしょうね」
まあ……今までの俺達の戦闘状況も似たようなもんだけどさ。
基本的に、戦闘開始！　と同時に敵を倒している。
こんな戦い方をしてきた俺達も有名になるのは道理だな。
「ここを乗り越えれば後は決勝なんだ。村の連中を購入する金の目処がもう少しで立つぞ！」
「はい！　ただ……雷ですか……」

「ふぇぇぇ……」
「ま、リーシアもよくがんばってくれたな。ラフちゃんと共に応援しててくれよ」
「ラフー」
ラフちゃんがリーシアの肩に乗っかって鳴く。
そうだな。俺達は結局、勝ち進んでいくしかない。

翌日、歓声湧き起こる闇のコロシアムの控え室で俺達は戦いの準備をしていた。
次の対戦相手はチーム戦を一人で勝ちあがってきてるとかいう化け物と名高い奴だ。
ま、さすがに霊亀やキョウよりも強い、なんてことはないだろうが。
それでも僅かな油断が命取りになりかねないのも確かだ。
今日勝てば、目玉試合として明日、決勝となる。事前の宣伝があるとかなんとか。
日程が滅茶苦茶だな。
「ごしゅじんさまー。まだいかないのー？」
「そうだな。じゃ、そろそろ行くか」
「はい、そして明日勝てば村の子達を取り戻せます」
今日の対戦相手は注意しなきゃいけない。
何か裏があるのかもしれない。いろんな可能性が考えられる。
もしもだ。最初から勝つ奴が決まっているとかそんな暗黙のルールがあるとしたらどうだ？
妨害に関しちゃ俺のバックにいる連中もそれなりに大きな権力だからほとんどなかった。
だけど、試合中にどんな妨害があるかはわからない。
そう……例えば、儀式魔法クラスの援護魔法があのナディアに施されていたらどうだ？
ありえない話ではない。
「念には念をで行くぞ！　素早く……仕留めろ！」
「はい！」
「フィーローがんばるー」

俺達は刺激を求めた貴族達が来場している闘技場へと飛び出した。
ワァアアアア！
と、歓声が巻き起こる。
ナディアは既に闘技場内で待ちかまえていた。
「あらあら、お姉さんの忠告を聞かずにやってきちゃったのね」
「残念だが俺にもここで勝ちあがらなければいけない目的があるんでな」
勝負の前にナディアは俺に近づいてきて握手とばかりに手を差し出す。
「まあいいわ。お姉さんも全力で行くから掛かってきなさい」
「たとえお前であろうとも、俺は負ける気はしないがな」
すると、握手を交わすと同時に軽くハグをしてナディアは俺の耳元で囁く。
「……それはルロロナ村の奴隷を購入すること……かしら？」
っ!?　この女、完全に俺の目的をわかってやがる。
どこから漏洩したかはわからない。
だけどこの女は俺達の目的を掴んでいるということだ。
「一攫千金を狙うにはいい手よね。だけどお姉さんは負けないわよ」
俺が奴隷を買って、その転売で金儲けをしようとしていると思いこんでいるみたいだな。
訂正する必要もない。
結局、俺達がラフタリアの同郷の連中を取り戻すためには金が必要なんだからな。
「それはこっちの台詞だ」
俺が答えるとナディアはコクリと頷いてから距離を取る。
「それではロォオオオックバァアアアレエエエエエ一行、対！　ナぁああああああディィイイイイイイイアアアアア

の勝負を開始する！」
司会がすっごいシャウトしてんな。
毎回思うが声帯とかおかしくなりそうな叫びだ。
「では尋常にぃいいいい！　準決勝戦……開始ぃいいいいい！」

ゴォオオオン！　輪を掛けて大きな銅鑼の音が響き渡った。
「じゃあお姉さん行くわよ！」
ナディアは魔法を唱えようと銛を持った手を前にかざす。
「させないよー！」
「はい！」
そこにラフタリアとフィーロが打ち合わせ通りに先制攻撃を仕掛ける。
二人同時に高速で距離を詰め、ラフタリアは大上段から斬り下ろし、フィーロは懐に入り込むように両手のツメで横に薙ぐ。
「おっとー」
ナディアは見切っていたとばかりに数歩後ろに下がり、ラフタリアとフィーロの攻撃を紙一重で……これを避けるのか!?
「まだまだ！」
「とー！」
返す刀で上に斬り上げながらラフタリアは突き、フィーロは腰を深くして滑り込むように斬りつける。
「太刀筋がまっすぐね。だけどお姉さんには当たらないわよ」
銛でラフタリアの刀を受け流し、フィーロの攻撃は銛を軸に体を浮かせてかわし、ナディア本人も一回転してフィーロの背を跨ぐ。
「な……」
「おおー！」
ラフタリアが言葉をなくし、フィーロが感心したような声を出す。
これだけのやり取りで、相当熟練した傭兵なのがわかる。
有名なのにはちゃんとした理由があるということか！
完全に見切られている。そうとしか思えない動きをしてきやがった。
「すごいすごい！　ごしゅじんさま！　ハミング、アレで行くー」
「わかった！」

フィーロが素早く俺の肩に乗ってハイクイックの準備をする。
その間にラフタリアがナディアへと攻撃を繰り返す。
「はあああああ！」
が、ナディアの奴、ラフタリアの刀の動きを見切っているとばかりに、ギリギリのところで避ける。
「刀は使いなれてないようね。太刀筋がまっすぐすぎるし、剣と同じ使い方よ？　それじゃあせっかくの刀がかわいそうね」
どんだけ強いんだよ。
くそ、正面から突破するにはステータスが足りないということか……？
しょうがない。俺はフィーロを肩に乗せたまま、小声で援護魔法であるツヴァイト・オーラの詠唱に入る。
『力の根源たる盾の勇者が命ずる。伝承を今一度読み解き、彼の者の全てを支えよ！』
「ツヴァイト・オーラ！」
援護魔法でラフタリアの能力を上げて、その隙にフィーロにも掛けてから一気に決める。
そう……考えていた。俺が詠唱を完成させてラフタリアに届いた瞬間……ナディアが俺を見たかと思うと、魔法を……唱えた。
『力の根源たる私が命ずる。伝承を今一度読み解き、彼の者を支える力を散らせ！』
「アンチ、ツヴァイト・オーラ！」
「なに!?」
ラフタリアに掛かるはずだったツヴァイト・オーラがかき消されたことを俺は理解した。
そう、俺自身が構築し、放ったはずの魔法がラフタリアに届いたにもかかわらずバラバラに砕かれた。
ちょっと待てよ！
ドライファクラスなら妨害ができると聞くが、ツヴァイトクラスをあの短い詠唱で阻止するとか、コイツはどんだけ技術を持ってんだ！
ナディアは俺が唱えたツヴァイト・オーラを無効化させた。
その事実を俺が理解するのに数秒のタイムラグが生じてしまった。
ラフタリアも俺の援護を前提に攻撃しようとしていたので、大きく空振りをする。

「な――」
「隙あり！」
ナディアは銛を持って腰を深く落とし、ラフタリアを突く。襲撃してきた傭兵共と同じくドスンと力を込めて。
「く！　う……――ウグ……」
衝撃と共にラフタリアが吹き飛ばされて闘技場の壁にぶつかる。
闘技場の壁が砕ける音が響いた。
「ラ――シガラキ！」
危ない。援護魔法を無効化させるだけの技術を持っている奴に本名を知られたら、どんな攻撃をしてくるかわかったもんじゃない。
「だ、大丈夫です」
ラフタリアはよろっと立ち上がって、銛で突かれた肩に手を添えている。
「く……」
ナディアはこの隙にとばかりに魔法の詠唱に入りやがった。
「じゃらじゃら投げる？」
「やめておけ。今、その武器を再利用されたらシャレにならん」
銛一つでここまで追い込まれてんだ。
下手にあのモーニングスターを奪われたら自分達を追いこみかねない。
今すべきことはラフタリアの戦闘継続だ。
俺は懐から回復用の傷薬を取り出してラフタリアに駆け寄り、回復魔法と共に傷の手当てをする。
さすがに回復魔法を至近距離で唱えると阻止はできないのか。
「ありがとうございます。ナオ――ロック様」
「ああ……それにしても化け物かあの女！」
能力が低下しているといっても一般冒険者よりは遥かに強いはずなのに、ラフタリアとフィーロの攻撃を軽く往なすとかどんだけ強いんだよ。
ラフタリアとフィーロの一撃で終わるはずだったのに。

ステータスを確認すると、所々ぼやけている。
なんとなく気配でわかるが、闘技場内に何か魔法が掛けられているな。
ナディアが掛けたのか、それとも観客が金を積んだか、運営が暗躍しているのか。
……俺が前に出て押さえつけるしかないか。
「ハミング行くー？」
ハイクイックとスパイラルストライクの準備を終えたフィーロが俺に尋ねる。
「そうだな。どうやら手加減をしている余裕はなさそうだ」
できれば隠し通したまま切り抜けたかったが、それを許してくれるほど甘い相手ではない。
「シガラキ、俺が盾を出して相手を拘束する。その後、ハミングと一緒に攻撃しろ。いいな」
「わ、わかりました」
回復魔法のお陰でラフタリアも戦闘を継続できるようになった。
ここを切り抜けないと何も始まらないんだ。やるしかないだろ。
俺はゆっくりとナディアの方へと足を向ける。
「あら？　フォーメーションを変えるのね。ロックちゃんがやっとお出ましかしら？」
「そうだな。真打ちは最後に出てくるというが、特別に俺が直々にお前の相手をしてやる」
今までは俺が出る前にフィーロかラフタリアが仕留めていたわけだが、その戦法が通用しないとなると俺が出るしかない。
「じゃあ、そろそろお姉さんの魔法も完成したし……受けてもらいましょうかしらね？」
「……行くぞ！」
俺はフィーロを背負ったまま走り出す。
呪いで能力が下がってはいるが、それでも多少は素早くなっている。
世界の時間の流れがゆっくりしたように感じられ、その中で俺はナディアに向けて駆けた。
ナディアも相当素早く、銛を俺に向けて魔法を唱える。
この女がどんな強力な魔法を使えるか知らないが、全てを受け止めてみせる！
「一直線に当たっちゃダメよ？　死んじゃうから！」

『力の根源たる私が命ずる。真理を今一度読み解き。天雷よ我が前の者を討ち滅ぼせ！』
「ドライファ・サンダーバースト！」
走る俺目掛けてナディアの唱えた……極太の雷が降り注ぐ。
その轟音と光に耳と目がおかしくなるんじゃないかと思うほどの、高圧縮された魔法の一撃だった。
儀式魔法に『裁き』という雷を落とす魔法が存在する。
三勇教の教皇が俺に不意打ちでぶちかましたやつだ。
それに勝るとも劣らない魔法をナディアは一人で俺に向けて放った。
なんだこの化け物は。
どうして霊亀とかに挑んでいる時に助けに出てこないんだと説教したくなるくらい強いじゃないか！
とにかく、俺はフィーロを守るように抱えて盾とマントで庇いながら走り続ける。
バチバチと俺にナディアの唱えた魔法がぶつかった。
雷はやはり速度が命だからな。見えたと思ったら目の前に来ていた。
俺以外の奴だったら黒こげどころじゃ済まない威力だな。
「喰らえ！　俺達の本当の連携をな！」
帯電するのを感じつつ、俺は雷の帯を……盾で弾き飛ばしてフィーロを思い切り投げ飛ばした。
「な、なんとぉおおおお！　ナディアの決め技を正面から受け止めて反撃したぞぉおおおおおお！」
司会が絶叫に近い声を出し、歓声が沸き上がる。
知るか！　今は、目の前の敵を倒すことが優先だ！
「たあああああ！」
フィーロが溜めに溜めた魔力をこめてハイクイックとスパイラルストライクをナディアに向けて放つ。
「あら！　凄いわね。お姉さんの決め技なのに！」
ナディアは自ら放った雷よりも高速で接近してくるフィーロを見て、焦っているのか、それとも喜んでいるのかわからないテンションで叫ぶ。
まさかフィーロの攻撃さえも見切るのか？
「試合中に見たその子の高速移動の維持時間は三秒。その間に強力な一撃を決めるのよね」

「とー！」
「というわけで――」
俺のカウンターに等しいフィーロの投擲を予知……じゃないな、魔法を唱えた隙を衝いてくるのを読んでいたんだ。
ナディアは銛を抱えて、もう一つの魔法を唱えていた。
そう……攻撃に使った時に出現した雷雲を再利用するのだと言わんばかりに。
詠唱があまりにも早い。こんな応用があるのかよ！
『力の根源たる私が命ずる。真理を今一度読み解き。雷よ、私を守り支える力と成せ！』
「ドライファ・ライトニングスピード！」
魔法って奥が深いな。
轟音と共にナディア自身に雷が落ちたが、その雷は援護魔法のようにナディアの体に帯電し続ける。
フィーロの突進をナディアは真っ向から受けることなく、大きく、かつ素早く回避運動に入る。
やばいな。俺の推測だとフィーロの攻撃は一直線。
多少軌道修正はできるが、それでもナディア自身に当たる前にハイクイックは解けてしまう。スパイラルストライク単体では決定打になりきれそうにない。
「きゃううううう！」
ナディアに突撃するフィーロが悲鳴に近い声を出した。
帯電するナディアからバチッと静電気のようにフィーロに雷がぶつかっている。
ありゃあ、回転していて必殺技みたいになっちゃいるがフィーロ自身、感電してかなり痛いだろう。
「いくよー」
だが、フィーロだってまだ諦めていない。
なら俺がすることは一つ。
「エアストシールド！　セカンドシールド！　ドリットシールド！」
ナディアが回避できないように背中、足元、横に盾を出現させて逃げ道を塞ぐ。
帯電による攻撃からフィーロを守ると同時に、ナディアの動きを封じて攻撃を当てる。

「あら、面白いことができるのね。お姉さん驚いたわ」
「隠し玉だからな」
最後に残った箇所は横か上だけ。フィーロの攻撃を当てるには、できれば横に動くのを妨害したい。
という俺の願望が叶ったのか、ナディアは横っ跳びしようと僅かに屈む。
「させるか！　シールドプリズン！」
最後の締めとばかりに盾の檻を横に配置して逃げ道を塞ぐ！
どうだ！　ラルクでさえも追い詰めた盾の妨害コンビネーション！
守りと併用してこんな芸当ができるんだよ！
後はフィーロがスパイラルストライクを当てて、ラフタリアが攻撃すればいいだけだ。
「あらあら、凄いわね。だけど――」
ナディアはガツッと銛を地面に突き刺して、素早く背中に展開させていた盾の後ろへと、銛を軸にして宙返りする。
「わ――!?」
フィーロの突撃が俺の盾に命中し、ガリガリと音を立てて速度と威力が殺される。
く……だがチェインシールドがまだ残っている！
「チェ――」
唱え終わる前に、突然辺りの空気のような何かが俺達に纏わりつく。
空気抵抗……腕一つ動かすのにも重量を感じる。
何が起こっているんだ？
そう思って辺りを見渡すと、闘技場内の床からまるで海底にいるかのような泡がポコポコと出ている。
呼吸はできるみたいだが、なんだこれは！
「あらー。どうやらお姉さん達の攻撃があまりにも速いから、速度を落とすためにフィールド変化の魔法が掛かったみたいね」
なんだと!?　こんな時に厄介な！
このコロシアムは観客のお布施で援護ができる。これもそれの一環か。

「しかもー、お姉さんが得意な疑似的に水中にする合唱魔法の『大海原』かー。じゃあますます負けていられないわね」

「そんな――」

追い討ちをかけようと、俺を追い抜いて刀で切りかかろうとしたラフタリアが驚きの声を上げた。

「くそ！　チェイン――」

「残念、一歩遅かったわね」

俺の出した盾を盾にって何かの冗談かと思う状態でナディアはフィーロを銛で突き飛ばし、流れるようにラフタリアの刀を受け止めて鍔迫り合いになる。

どんだけ戦い慣れてんだ！

隠し玉であるスキルさえも展開して逃げ道を塞いだのに、コイツは素早く対応してきやがった。

ステータスや何かで観衆の邪魔があるのかもしれないが、今まで戦った相手の中で技術面では一番じゃないだろうか。

「うー……いったーい……でも！」

フィーロが俺の盾にぶつかって、更にナディアが纏う雷に感電しながらも持ち直して襲い掛かる。

かなりボロボロな状態だ。

「まだだ！　チェインシールド！」

俺も黙って後方で見ているわけじゃない。

というか、疑似水中という扱いの所為かナディアの放った雷が広範囲に拡散していやがる。

無効化できるならいいのだが、どうやらその効果はなく、ナディアの攻撃は俺達全体に襲い掛かっているのだ。

高威力の雷が！

俺自身は無事だが、ラフタリアとフィーロはそうじゃない。

それでも、俺がこの女を組み伏せればラフタリア達が一方的に攻撃できる！

「捕まえたぞ！」

鎖でつながった盾で縛り上げ、俺はナディアの体に掴みかかり動きを止める。

「あら！　ロックちゃんたら大胆ね！」

「抜かせ！」

ナディアは押さえつけられているにもかかわらず、フィーロに手を向けて魔法を素早く詠唱する。

「ツヴァイト・サンダーボルト！」

「それもさせない！　Eフロートシールド！　チェンジシールド！」

拡散して厄介極まりないが、やれないことはないんだ。

俺はEフロートシールドを出して、意識だけでフィーロを守れる位置に移動させる。

チェンジシールドで、電気系統を集めそうな金属製の盾であるアイアンシールドに変えた。

「あらあら」

ナディアの放った雷は盾にぶつかって、盾自体が帯電するに留まる。

「私を忘れないでください！」

チェインシールドで縛るために後退したラフタリアが大きく振りかぶる。

「元気ね。だけどいろんなところが隙だらけ」

「え？　あ!?」

俺の押さえつけをものともせずにナディアは自由に動く腕で銛を動かし、ラフタリアの足を引っかける。姿勢を直そうとしたラフタリアの力を利用して軽く突き飛ばすと、俺の目の前でラフタリアは尻もちをついた。

くそ、水中みたいなステージが俺達にとって悪い方向にしか作用しない。

「さて、次はロックちゃんね――」

しかもチェインシールドの効果時間が切れた。俺だけで押さえている状況だ。

「できるモノならな！」

呪われたといっても俺自身の防御力自体に変化はない。

大抵の魔法はほぼ無傷で済む。

「ドライファ・サンダーガード！」

ナディアは、バチバチと自身に雷を降り注がせる。

術者自身を守る反撃魔法らしい。こういう時に役立つんだろう。

だがこの程度、俺はビクともしない。

「あら？　お姉さんの対処法を用意してきたのかしら？」
「さあな」
別に対策はしちゃいない。俺自身の防御力で耐えきれると判断したまでだ。
「ところでロックちゃんはお姉さんに手をあげないのかしら？」
ナディアも俺が素手で組みついていることを疑問に思っているようだ。
残念だが、したくてもできない。
しかしナディアへの援護なのか、闘技場から魔力の流れを感じる。
疑似水中で、更に雷雲が上空に出現した。
水中なのに雲があるような不思議な光景、異世界独自の感覚だな。
どんだけナディアへの援護が多いんだよ！
「うう……パチパチで弾かれるー」
しかもナディアが唱えたサンダーガードの出力が高すぎてラフタリア達が攻撃できないじゃないか。フロートシールドをチェンジシールドで変えて電気を逃がそうと思っても、周りの雷が多すぎで逃がしきれん！
「うう……さすがにお姉さんも厳しい……わねぇ」
ナディアを見ると、ニコニコしながらも焦りを見せている。
自分の雷でダメージを受けているのか、それともラフタリア達の攻撃の方でかはわからん。
「やりづらいわねー」
ガスガスと銛で俺の背中をかなり強い力で突いてくるが一向に刺さる気配もなく、音だけが響く。
変幻無双流のババアみたいな防御比例攻撃を習得していないのが唯一の救いだな。
あれをやられていたら俺もただじゃ済まなかった。
「行きます！」
「ハミングもー」
ラフタリアとフィーロは雷の壁を前に無駄に佇んでいたわけではなく、技の準備をしていた。
若干距離があるからな。遠距離攻撃の魔法かスキルが望ましい。
「風刀・真空！」

居合い斬りの構えを取ってからラフタリアは風の刃をナディアに向けて放つ。
「ドライファ・ウィンドショット！」
フィーロの方は高圧縮した風の玉を発射したようだ。
高密度の雷の壁があるからな。二人も工夫したのだろう。
バシンとラフタリアのスキルが壁を破壊してフィーロの魔法が後に続く。
「よし！　よくやった！　アタックサポート！」
右手に棘を出現させてナディアに刺す。
俺自身の攻撃はなんの効果も及ぼさないが、アタックサポートの効果は次の攻撃を二倍化させるものだ。
耐えきれるかな？
「あら？」
ナディアはスキルを叩き落とさんと銛を振りかざしている。
さすがに二つの魔法を同時に唱えることはできないようだな。
だが、ラフタリアやフィーロの攻撃は生半可なものじゃないぞ。
「しょうがないわね」
ナディアは銛を……折った!?
すると銛が内包していた力……魔力のようなものが溢れ出てきた。
銛を中心に魔力の爆発が起こるのを感じる。
ゲームとかで見たことがあるぞ。一度だけ、武器を犠牲にして放つ、決め技のような攻撃を。
代償は持っている武器が破壊され二度と使えなくなること。
そんな類の武器がこの世界に存在したのか！
「当たりどころが悪いと危ないわよー」
折れた銛をナディアはラフタリア達が放ったスキルに向かって投擲する。
ラフタリア達の攻撃が銛にぶつかる。
その瞬間、銛が激しく光り輝き爆発した。
「きゃ！」

「わー！」
ラフタリアとフィーロが爆発に吹き飛ばされる。
ナディアの方は援護魔法らしき防御膜が出現して、風が吹き抜けるだけで済んだ。一緒にいた俺も同様だ。
周りからの援護が厄介だな！　おい！
さっきからナディアの方にばかり援護が掛かるじゃねえか！
「どこまでもしぶとい！」
「あらあら」
「まだです！」
「うん！　とー！」
ラフタリアとフィーロが砂煙から飛び出して振りかざす。
「あら！　その根性は好きよ！」
ナディアは折った半分の鍔……雷の魔法で壊れた部分でラフタリアの刀を受け止める。
「くう……」
ラフタリアは感電しながらも受け止め、その隙をフィーロが衝く。
体を捩って避けようとしたナディアの皮膚にフィーロのツメが食い込んだ。
「あら……凄いわね」
が、雷の形状を保持した鍔が、一瞬だけ形状を変えてフィーロを薙いで突き飛ばす。
「きゃん！　うー……あと少しだったのにー！」
「というわけでもう一個ね」
ナディアは鍔迫り合いしているラフタリアに、折れた残り半分の鍔を……サッと胸元に差しこむ。
冗談か何かみたいなさりげなさでとんでもないことをしてやがる。
「え？　あ……⁉　きゃあああああああ！」
俺の目の前でラフタリアは、バスンと手榴弾を受けたかのように小さく爆発して吹き飛ばされる。
だが、ラフタリアは上手く受け身を取って刀を前に向けた。
「さすがにこれで勝てるほど甘くはないかー。大きい方は先に爆発しちゃったもんね。さすがにお姉さんも至近距離じゃ危なかったかな？」
しかも事もあろうにナディアは俺のマントを盾にして爆発の衝撃を受け止めやがる。
「くう……なんて強いんですか……」
まったくだ。一人でこれだけ強いって化け物なんじゃないのか？
ここに至って、やっとラフタリア達に援護とばかりにロープが投入された。
「これは……？　なるほど！　フィ――ハミング！　これを纏いますよ！　これで雷を無効化できます！」
「わーすごーい！」
ラフタリアとフィーロは放り込まれたロープを纏う。
「ロックちゃん。いつまでもべったりなのはお姉さんどうかと思うわ。もっと駆け引きをしましょうよ」
「うるさい！　そんなことをしている余裕はない！」
幸い、お前はもう武器がないみたいだからな。
この隙を逃すつもりはない。
「あら残念。じゃあお姉さんからやるわね」
ナディアはまたもラフタリア達がロープを纏う隙に魔法を詠唱する。
くそ！　俺自身ができる妨害はないのか？
コイツ、俺に対してまともに攻撃してこないし、俺の反撃はタカがしれてるからな。
魔竜の盾の反撃効果であるC魔弾という攻撃も、ナディアにはあまり効果がないようだしな。
攻撃が反撃にカテゴライズされているのかサンダーガードで作動しやしない。
反撃に反撃なんてできたら苦労しないもんな。
ここに来てやっとナディアは動きを妨害する俺に狙いを定めたか。
どうせ魔法による範囲攻撃だろう。
なら周りに盾を出現させてカウンターで一斉射撃してやるか？
ナディアは大きく魔法を詠唱し始めた。
「エアストシールド！　セカンドシールド！　ドリットシールド！　シールドプリズン！　チェンジシールド！」
『力の根源たる私が命ずる。真理を今一度読み解き。雷よ、我が前の者達を痺れさせせよ！』

「ドライファ・パラライズサンダー！」
な!?　攻撃性の低い状態異常系の魔法!?
完全に読み違えた！
反撃を期待して変化させたのに盾共はうんともスンとも反応しない。
「ぐ……」
高威力の麻痺魔法に、押さえる手が若干ゆるむ。
「あら凄いわね。普通の相手だったら痺れて全く動けなくなっちゃうくらいなのに」
そう言いながらナディアは俺が僅かに見せた隙を衝いて拘束から抜け出し距離を取る。
「タフじゃないと生きていけなかったんでな」
状態異常耐性を習得しておいて助かったな。
闇のコロシアム故に何があっても不思議じゃないと思っていたが……これは厳しいな。
能力差関係なくナディアという女の戦闘力も相当高い。
呪いなしだったら勝てないことはないが、ゴリ押しでは勝てないだろう。
同等や低い能力で勝てる相手じゃない。
だが、ここまで苦戦するのはおかしい。それだけじゃないはずだ。
何か……俺達には能力低下の魔法が掛かっていて、ナディアには能力上昇の援護でも掛かっているんじゃないか？
ステータスを見て、微妙に怪しい感覚がある。
……ラースシールドで焼き尽くすか？
そんな考えがふと脳裏を過る。
だが、能力低下以外の理由からも、あの盾に頼るのはできる限り避けたい。
幸いにしてラフタリア達は戦闘続行可能だ。
しかも援護とばかりに雷を無効化させるロープが投げ込まれたわけだしな。
また俺が組みついて押さえ込めば今度こそどうにかできるだろう。
というところで二本目の鉈がナディア目掛けて投げ込まれる。

くそ……絶妙のタイミングで援護が入るな！
「お姉さんをここまで追い込んだ相手は久しぶりね。じゃあ、お姉さん……本気で相手しちゃおうかしら」
ナディアが中腰で構えると、周りの観客が歓声を上げる。
何か面白いことが起こることを期待しているようだ。
「ナディア選手！　とうとう本気になって獣人化するようです！　皆様！　ナディア選手の本気の戦いをお楽しみにぃいいいいいいい！」
獣人化!?
確か亜人の中で獣の度合いが強いのが獣人だったはず。
そして亜人の中で獣人へ任意に変身できる種類が存在すると、この前奴隷商が俺に教えてくれた。
で、獣人化の能力を持った奴は変身後の能力が跳ね上がる。
つまり今までナディアは本気で戦っていなかったということだ。
やばいな……。
ナディアの周りに魔力が集まり、霧のようなものが立ち込めて姿があやふやになる。
黒いシルエットとでも表現すればいいのか？　ボコボコと音を立てて、ナディアの全身が膨れ上がっている。変身を阻止しようかと思ったがその動きが速い。
接近する頃には変身を終えてしまっているだろう。
やがてナディアは全身を変化させた。
その姿は、黒と白のコントラストの鮮やかな模様。
流線形の顔つきと水中を移動するのに必要な、魚にしては力強い二股の尾。
光沢のある、一見するとゴムのような肌。
背中にはサメに似た背びれがあるが、外見からはサメのような恐怖は感じない。
まあ、海外のホラー映画には題材として使われたこともあるが、サメに比べれば極めて少ない。
むしろ少年とかと友情を育むことの方が多い生物だ。
「え？」
ラフタリアが呆気に取られた声を出しているがそれどころじゃないな。よく観察して対処しないと。

日本の水族館では人気のある目玉動物の一種。
獣人故に、元となる動物とは異なり二本の足に二本の腕だがな。
そう……俺の知るもっとも近い動物で表すならクジラ目ハクジラ亜目マイルカ科シャチ属……要するにシャチだな。
獣人というのはこの世界に来て色々と見たことはあるが、変身するシャチは初めて見る。
かなり重量級の姿をしていて、鈍重そうに見えるが……おそらく違うんだろうな。
大きさはフィロリアル形態のフィーロと同等だ。
ぶっちゃけかなりデカイ。
「じゃあ……行くわよ！」
これだけ強くて雷を放つもんだから雷獣の獣人とかヌエの獣人とか幻獣の獣人を想像していた。
もしくはドラゴンか？　虎とかもイメージが近いな。
それが水生系の獣人だったわけだ。
だが、そんなことよりも今まで手加減されていた、という方が重要だ。
全体的に能力が上がっていると見ていい。
その証拠に確かに尻尾を揺らす、それだけで疑似水中を縦横無尽に動き回っている。
やはり見た目に騙されたら痛い目を見るな。
加速でもつけて俺達に一撃を加えるつもりだろう。
魔法主体に見えた戦略は獣人形態時に力で押し切るためか？
滅多に変身しないようだし、相手が魔法に対応する防具を持ってきた時に、変身して攻撃する戦略なのだろう。
「え……えっと……」
動き回るナディアをラフタリアは茫然と見つめていた。
「何ボサッとしてんだ！　死にたいのか！」
一気に仕留めるのは難しい相手なんだからよ！
「ラ――シガラキ！　行くぞ！」
俺が檄を飛ばすのだが、ラフタリアは放心状態で、なぜか構えを完全に解いている。

「お姉ちゃん！」
フィーロも注意するが上の空だ。
「じゃあ行くわよ！」
ナディアが銛を構え、加速をつけて一直線に突撃してくる。
俺はラフタリアを守るために前に出て盾を多重展開、更に流星盾を唱えようと――
「――サディナ姉さん？」

十七話　茶番

は？

ラフタリアが……ナディアに向かってそう言った。

するとナディアの方も、凄い速度で接近してきたというのに、俺達の目前でピタリと止まった。

「……あら？」

観客もナディアが動きを止めたのを見てざわざわと騒ぎ始める。

おい、確かサディナと呼ばれる人物は村の漁師をしていた奴だったよな。

すごく強くて、漁師で……獣人……。

水生系の獣人といっていたが、確かに符合する箇所は多い！

まさかナディアがそれだっていうのか⁉

おいおい、そんな偶然が――

「やっぱり、サディナ姉さんですよね？　なんでこんなところにいるんですか！」

ラフタリアは装備を緩めて隠していた耳と尻尾を見せる。

「えっと――……大きくなっちゃってお姉さんビックリだけど、もしかしてラフタリアちゃんかしら？」

「はい、そうです。サディナ姉さん」

そんな偶然が……あったらしい。

が、これはもしかしたら幸運なんじゃないか？

つまりラフタリアの同郷の者が目の前にいるということなんだからな。

ナディア改めサディナは俺をじっと凝視した後、何か考えているかのように首を傾げる。

それから何やら朗らかに微笑んだかと思うと。

「お姉さんもびっくりね。じゃあ少し話をするために、戦っている振りをしてちょうだい」

「わかった」

「で、どうしてこんな試合に出ているのかしら？」

サディナは俺と鍔迫り合いをするふりをしながら狙いを変えて銛で圧してくる。



更にラフタリアとフィーロが接近戦のように斬り掛かりながら、弾かれた演出をする。
「村の子達を購入するために早期にお金が必要だったからです。今、私達は村があった場所を領地にしているんですよ」
と、ラフタリアは小声でサディナに説明する。
俺は周りの視線が非常に気になるぞ。
先ほどまで派手なドンパチをしていたのに、地味な突き合いしかしてないんだからさ。
「その経緯を説明すると長くなりそうね。ラフタリアちゃんも立派になって……」
ほろりと感動しているみたいだが……周りの目を気にしろよ。
「とりあえずさっきの雷やらなんやらを出せ。ラフタリア、フィーロ、お前等も必殺技っぽい派手な奴を撃て。俺も派手なスキルで攻める」
「わかりました」
「わかったー」
サディナは見た目重視の雷撃を広範囲に発射した。
スタジアムの壁にまで影響を及ぼし、轟音が生じる。
俺はその威力の低い見た目だけの攻撃を必死な形相で盾を展開して防ぎ、ラフタリア達の攻撃を待つ。
ラフタリアとフィーロも同じく、派手な技を連発した。
実際は幻影魔法で演出しているに過ぎない。
その間に会話を進める。
「つーかなんで最初から獣人形態で戦わなかったんだよ」
最初からその姿でいればラフタリアも一目でわかっただろうに……ラフタリアもサディナが亜人の姿になることを知らなかったようだし、知っていればこんな面倒な状況になることもなかった。
「あら？　ロックちゃんは自分の姿を見て同じことを言えるのかしら？　私にとって、亜人の姿は潜伏も兼ねているのよ？」
……わからなくもない。今の俺達は兜とかで顔を隠している。
サディナにとって亜人の姿は普段の姿じゃないということか。

どういう感覚なんだと突っ込みたくなるがな。
後で詳しく問い詰めよう。
「じゃあどうしようかしらね」
考えを戻す。
サディナが敵じゃないのなら、話し合いでこの戦いを終わらせることができるはずだ。
「俺達は多額の金を賭けている。お前がどこかでワザと負けろ」
「そうも言ってられないのよねー。お姉さんもお金が必要で結構使いこんじゃったし」
「酒か？」
「違う違う。村の子を買い集めていたのよー。商人に取り入ってね」
サディナの話を手短に聞く……というか、ルロロナ村の奴隷が高騰したのにはサディナも関わっていたようだ。
サディナは村の連中を何人か購入してゼルトブルのどこかで保護しているらしい。
最初にルロロナ村出身の奴隷を手早く見つけるための懸賞金を掛けたのは、サディナに依頼された闇の商人だったらしい。
だが、その懸賞金が仇となって、ルロロナ村の奴隷が高くなってしまった。
で、サディナ本人は高騰させてしまった奴隷達を購入する資金を捻出するため、別の闇の武器商人に頼んで、闇のコロシアムに参加して色々とやらかしていた、と。
最初にメルロマルクで奴隷を捜して買えよ。
とは思ったが、俺が三勇教を潰すまで亜人は立場が低かったのだから、それも難しいか。
それなら稼ぎやすいゼルトブルから注文した方が早かったんだろう。
で、仕事として受けたのがこの大会で、サディナは決勝で敗退し、決勝の対戦相手である大穴の奴が万馬券になることが決定しているそうだ。
奴隷購入のための借金もあるとか……。
実質コイツが保護している村の連中は人質みたいなもんじゃないか！
「……どうしたらいいかしらね。下手をするとお姉さんには賞金が掛けられた挙句、みんな売られちゃうわ」
「借金はどんなもんなんだ？」

サディナは俺に借金の合計金額を提示する。
く……糞高い。だが、俺達の優勝金額ととんとんだ。
それまで待ってもらうなりすれば……どうにかできるかもしれん。
俺の考えを察したのか、サディナは大きく距離を取ってから頷いた。
よし、ならここからは茶番だ。
「チェインシールド！」
鎖が伸び、チェインシールドが散らばっていた盾をグルグルと回転させた。
盾はすぐにサディナを拘束して、隙ができたように見える。
もしもサディナが本気だったら、破壊するなり回避するなりされていただろう。
「シガラキ！　ハミング！　必殺技を使うぞ！」
俺は可能な限り大きな声でそう言った。
ラフタリアとフィーロも理解しているのか、頷いて魔力などの力を込める。
サディナの方は拘束を解こうとしているが、解けない演技を始めた。
ガシャンガシャンと大きな音が響く。
「ははは……その鎖は特別製でな。俺の許可がないと外れないようになっているんだ」
などとわざとらしい解説を入れつつ、ラフタリタ達の溜め時間を稼ぐ。
観客席はかなり白熱気味だ。
この調子で客の満足度を最高まで上げるぞ。
サディナはにやにやしている。
笑うな。バレたらどうするんだ。
「こんな拘束、お姉さんに効くと思ったら大間違いよ！」
「くく、抵抗してみるがいい！」
そうした問答を適度に混ぜ込み、ついにラフタリア達の魔法が完成した。
同時にサディナが拘束していた鎖を力技で引き千切る。
俺はそれに合わせて叫んでみせる。

「なにぃ!?」
もしも本当に同じ状況になったら、俺はきっと舌打ちをするだろう。
自分でもかなり白々しいとは思う。
だが、客からすれば相当盛り上がるらしく、大歓声が上がった。
「だがもう遅い。行くぞ！」
「はい！」
「うん！」
発動したのは大きな竜巻。
フィーロの頭で演技が理解できているのか？
と、心配だったが、これまでのツヴァイト・トルネイドとは比較にならないほど大きなつむじ風を発生させた。
一見、それまで撃っていた魔法の超強い版にしか見えない。
そしてその魔法に合わせて、ラフタリアはウソの技を放つ。
「幻影刀！」
直後、大量の刀が現れ、竜巻に合わせて回転を始めた。
それは全てサディナの方へ向かっている。
刀が吸い込まれるようにサディナへ命中した。
「くぅうううううっ……！」
あっちの演技も凄いな。
鎖の拘束こそ解いたが、命中してしまった、みたいな演技をしている。
しかも痛そうな声だ。
本当に痛いんじゃないかとも思えるが、ラフタリアが同郷の者を傷付けるとは思えない。
そうして数十秒間、竜巻と刀は攻撃を繰り返し……止まった。
「……」
サディナが呆然とした表情の演技で立っている。
やがて、ドーンと大きな音を立てて後ろに倒れこんだ。

その光景は観客の想像するモノとは違っていたらしく、沈黙がこの場を支配する。
「……こりゃあ勝てそうにないわね。降参よ」
心技共に使い尽くし、体力も限界を迎えたように装ったサディナは降参した。

十八話　エキシビジョンマッチ

一拍おいてから歓声が巻き起こる。
「勝ったな」
かなり茶番じみた結果にはなってしまったが、俺達にはこの後に残されたことが色々とある。
まずはサディナの雇用主である商人のところへ交渉しに行かねばならんな。
じゃなきゃ俺達が賞金を手に入れる前に、借金のカタにラフタリアの同郷の連中が売り出されかねない。
どちらにしても……次なんて消化試合だろ。
さすがに、ここまで強い奴が出てくるとは思いたくない。
「いやー……お姉さんも驚いたわー」
なんてサディナは嘘臭く俺達にエールを送っている。
ま、元々八百長をする試合運びだったのだから、これくらいの番狂わせをしてもいいだろう。
そう思っていたのだが、どうやら大会の運営とやらはお気に召さなかったらしい。
司会のところに伝令が来て何か渡し、それを読み上げる。
「えー……会場の皆さまの興奮、運営は深く受け止めております。ここで更なる娯楽を提供するために皆さまにアンケートを取りたいと思います」
司会も怪訝な目で読んでいるな。
なんとなく意図は察しているが反対する理由もないんだろう。
観客共がざわざわと騒ぎ始める。
反則負けとか言わないのは元からルール無用なところがある闇のコロシアムだからだろう。

だから、追加で娯楽を提供するという形で何かしらのアクションを起こそうとしている……か。
おそらく俺達への妨害は奴隷商とアクセサリー商の息が掛かっているために不可能。
ならば、この場で処分しようと考えたんだろう。
「今回の大会を主催した責任者がお尋ねするそうです」
そう言うと、コロシアムの上……貴賓席となっている場所に数人の小太りの商人共が現れ、その代表臭い奴が喝采を待つかのように両腕を上げる。
「観客の皆様。ここで、私共、今大会の主催者は更なる娯楽の提供をしようと思い、こうして出てまいりました」
観客共に聞こえるようにゆっくりと大きな声で宣言する。
試合が終わったというのに何なんだ？
だが、この空気に覚えがある。
俺達にとって非常に悪いことが起こるのを感じ取ることができる。
そもそも、最初から優勝者が決まっているとかそういう部分が気にくわない。
で、ありながら俺達へ何かふざけたことをしようとする……三勇教などの嫌がらせを彷彿とさせる。
貴賓席の後方に何やら横断幕のようなものが垂らされる。
「これから今回の勝負をした闘士達に更なる勝負をさせるエキシビジョンマッチを行わせるか！　です！」
「はぁあああああ!?」
俺が異を唱えるように声を出す。
それはラフタリアやフィーロ、サディナも同じようで、驚きで言葉を失っている。
「あら－……」
くそ！　番狂わせに対してはこういう娯楽に見せた妨害をしてくるのか。
俺達の不服な表情とは裏腹に観客達は前向きに拍手をしてやがる。
まずいぞ。ここで俺達が拒もうものなら不戦敗とか言い出す気だ。
「対戦相手はぁあああああ！」
商人が指を鳴らすと闘技場の選手入場口から三人の選手が姿を現す……？
ん？　なんだ？　自然に歩いているつもりなの……か？

仮面をつけた等身大の人形……マネキンに服を着せているとしか見えない奴を二体連れた、道化師みたいな格好の奴が出てきた。

仮面のせいで何者か全然わからない。

「……ロックちゃん。ちょーっと危ないわよ？」

「なんだ？」

「あの子、最近この辺りの大会を荒らし回っている人気プレイヤーよ。ものすごく強いわね。今回の大会には出なかったと思ったんだけど……」

不参加だった奴をここに連れてきた？　買収か？　リーシアが警戒しろと言っていた気がする。

どっちにしろ、こんだけ強いサディナがいたら勝てるんじゃないか？

「そう！　マーダーァアアアピエロだぁあああああ！」

狂った道化師？　すげー嫌なリングネームだな。

もちろん、俺が知る言語に翻訳されているんだろうがな。

観客から割れんばかりの拍手が起こる。

「今回のエキシビジョンマッチはロックバレー一行＆ナディアVSマーダーピエロだ！　アンケートの集計は三分！　試合開始後一〇分間がベットタイムとなります！　どうでしょうか？」

観客達はざわざわと話し合っていたが、俺達を見て……まるで血に飢えたかのような好奇の目を向けてくる。

……なるほど、アンケートの結果に関しちゃ反対に傾くことは諦めた方がよさそうだな。

「更に！　ロックバレー一行VSナディアとの戦いでの賭け金の払い戻しに即座に応じます！　皆様、儲けた金銭で一発、大きく当てるのはどうでしょうか？　では賛成か反対か、賛成の方は手を！」

商人がそう言うと、会場にいた観客共の半数以上が手を挙げる。

く……完全に先導されてやがるな。

「つーか、こんな番狂わせを許していいのかよ！」

「ロックちゃん、よーく商人の後ろの文字を確認……」

「なんだ？　何が書かれてんだ？」

複数の文字で書かれているのだが、俺の知る文字であるメルロマルクの文字を見つけるのに時間が掛かった。

「特例でマーダーピエロが勝った場合は開催前のオッズでナディアに賭けた金額を継続します。って書いてあるわね。私に賭けていた人からしたら、まだ損をしていないから賛成するでしょ。ロックちゃんの方は開催前に賭けた人いるのかしら？」

う……そりゃあ一発大きく儲けるために、無名になるように立ち回っていたわけだし。

俺達や奴隷商、アクセサリー商以外、いないかもしれない。

「ちょっと待てよ！　それってどうなんだ？　いくら闇のコロシアムだからってこんな変則的なルールを認めていいっていうのか？」

「それをアンケートして、賛成に傾いちゃったんじゃない」

運営も運営だが、客も客だな！

何でもアドリブで無理を通しやがって！

まあ、商人の感性からするとわからなくもない。

運営が放った刺客であるはずのサディナが思わぬところで敗退したのだ。

どうにかその穴を塞ぎたい。

だが、対戦相手を権力で妨害するのは難しい。

そんな中でやるのだったら観客の賛成をもぎ取った強引な試合運びしかないのだろう。

だが、それ以上の妨害は無理だな。

司会がよそ見していて俺達にこれ以上不利な指示は出せない。

あんまりふざけたことをやりすぎると観客も怪しむし。

現にアンケートの所為で首を傾げている奴だっている。

やり方が強引すぎるんだ。

これ以上強引なことをすると馬脚を露してしまう。

つまり勝てば俺達の優勝は決まったも同然！

「よし！　回復魔法を今のうちに施すぞ」

試合が始まる前にできる限り体力の回復と傷の手当てをするべきだろう。

俺はラフタリアとフィーロに回復魔法を掛けようとした。

「ツヴァイト・ヒール」
が……。
なんだ？　サディナに魔法を妨害された時と同じく回復魔法が不発に終わるのを感じる。
「ロックちゃん。大事なお話なんだけど聞いて？」
「なんだ」
「闘技場内で、私達の魔法は運営が完全に妨害しているわ」
「じゃあ、俺が掛けようとした援護魔法を妨害したのは、お前じゃないのか？」
「ううん、あの時は私がやったことよ。だけど、今は別。何十人もの魔法使いで完全に邪魔しようとしてるのよ。闘技場内の各所から妨害魔法を展開し続けてるわ」
どこまで厄介な妨害工作を……しょうがない、魔法が使えないなら用意しておいた傷薬を塗るまでだ。
試合開始まであと二分はある。
それまでにできるだけやるしかない。
そもそもサディナがこれだけ強いんだ。俺達と手を組めば余裕で勝てるだろ。
「あとね、ロックちゃん」
「なんだ？」
「お姉さんと戦っている最中になんとなくわかっていたと思うけど、運営はロックちゃん達に気付かれないように弱体化の魔法をそれとなく唱え続けてたわ。で、お姉さんには強化の魔法が掛かっていたの」
「なんだと!?」
「つまり、運営に敵と見なされたお姉さんに、さっきまでの強さを期待しないでね？」
くそ！　どこまで厄介なことが立て続けに起こるんだよ！
俺達は傷の治療すら妨害されていて、手当ては最低限。
しかもサディナに掛けられていた強化は弱体化に変わっている。
ここで大声で抗議すればどうにかなるのか？
……十中八九、言い訳と取られて聞き入れられないだろうな。
なにせ闇のコロシアムだ。

本来、こんなところで一攫千金なんて狙うもんじゃないのか？
倍率に目が眩んで参加したことを後悔してきた。
で、相手にはまた強化が掛かる。
……この三分間のインターバルは間違いなく強化魔法を掛けるための時間と見ていいな。
俺達は先ほどよりも体が重くなっているような気がしなくもない。
「ロックちゃん達も結構やるんじゃないの？　お姉さん、相手した時驚いたわよ？」
「そりゃあな」
波と戦う四聖の勇者だぞ。本来は一般人なんかとは別次元の強さを持ってんだ。
くそ……呪いで能力低下してなければ、弱体化の魔法が掛かってもどうってことないってのに！
まてよ……絆の世界でこういう時に役に立ちそうな盾を手に入れてたぞ。
確か白虎素材の盾だったか。アレには援護無効の専用効果があったはず。
霊亀と同じ守護獣カテゴリーの盾だから使えるはずだ。
弱体化も援護魔法ならば今なら役に立つかもしれない。
そう思って盾を弄って手が止まる……。
強化素材が足りずに中途半端になる。強化して試しにステータスを確認した。
あー……凄く微妙。強化が足りないから完全強化の魔竜の盾に遥かに劣る。
これじゃあ弱体化を込みでも劣るな……。
「ラ――シガラキ？」
「なんですか？」
「白虎の素材で作られた武器なら弱体化を無視できるかもしれないぞ」
今度はラフタリアがステータスをチェックする。
「刀を振りまわすのに必要なステータスが足りませんし、援護無効はありません」
しょうがない。ここは、今まで通りの武器でいくしかない。
「とりあえず」
サディナは観客と運営に目を向けてから、あくまで気楽に銛を振りまわしながらウインクして俺に言う。

「やっていくしかないわね」
「ああ」
「ですね。ここを乗り越えて、村のみんなを取り戻すんです！」
「負けないよー」
ラフタリアとフィーロが同意する。
それとほぼ同時に、アンケートの集計が終わってエキシビジョンマッチが行われることが決定した。
魔法の使用が実質不可能。俺達には大きく弱体化の魔法が掛かり、敵には強化の魔法。
こんな状態で勝てとかどんだけ酷なことをしてくるんだ！
わかっちゃいたが、いい加減にしてほしいな。
奴隷商とアクセサリー商に命じて後で潰すか？
……潰せるよな？　勇者の権力も併用すりゃあ、さすがにお陀仏だろ。
どっちにしろ、今は勝つことに専念しよう。
負けてから因縁をつけても負け犬の遠吠えに見えるからな。
アンケート結果が出るよりも早く、背を向けて去っていく運営の商人の挙動が気になる。
早く試合を終わらせるべきだ。きっと碌なことをしない。
「それではぁあああああ！　勝負ぅうううう！　開始ぃぃぃぃぃぃぃぃい！」
銅鑼の音が響き渡って、マーダーピエロとかいうふざけた奴との戦いが始まった。
今は速やかにこの人形使い……か？　を仕留めるのが先決だな。
前方の二体の人形がカチャカチャと、素早くこちらに走ってくるのが不気味だ。
「行くぞ！　後方にいる本体を狙え！」
「はい！」
「いっくわよー！」
魔法の使用が不可能な状況のため、サディナは魔法を唱えずに獣人のままラフタリア達の後に続く。
速くはあるが……やはり鈍重だな。
ラフタリアとフィーロより一歩遅れ気味の速度だ。

やはり援護魔法が掛かっていたということなんだと、前に出るラフタリア達を見て思う。
って、まずはこの二体の人形っぽい奴を止めるのが俺の仕事だ！
「は！」
先頭に躍り出て、各々剣と斧を振りかぶる人形の攻撃を受け止める。
ガツンと衝撃が走った。
が、俺の防御力を突破することはできなかったようだな。
「……」
「……」
カチャカチャと動いて気色の悪い奴だな。
マーダーピエロの方は手に持った糸玉を通して人形を操っているようだ。
「恨みはありませんが、こんなふざけた試合は早急に終わらせたく思うので、我慢してください！」
「勝つもん！」
「お姉さんの尻拭い、大変よね？　だけど、事情があるから、我慢してね！」
俺が命ずるよりも早くラフタリアとフィーロ、サディナが各々武器を振りかぶって襲い掛かる。
相手は強いらしいが……さすがに俺達に通じはしないだろ。
どれだけの障害があっても俺達はそれをぶち抜いてきたんだ！
負けるわけにはいかないんだ！
「……スパイダーネット」
「な――」
「えー？」
「あら？」
マーダーピエロを攻撃したラフタリア達の武器が、マーダーピエロの前で不自然に止まる。
な、何が起こったんだ⁉
「ぶ、武器に……糸が⁉」
「と、とれない」

「これは厄介ね」
ラフタリア達の武器に絡みついていた糸が突如としてシュルシュルと姿を現す。
そして幾重にも、まるで生きているかのように、ラフタリア達にも巻き付いていく。
拘束攻撃？　蜘蛛の糸のような攻撃なんて存在するのか！
考えられるのは獣人とかの中で虫の特徴を持つ奴。
それかフィーロのように人化しているが本性は魔物とかの奴だ。
マーダーピエロは糸玉を前に掲げる。
「バインドワイヤー！」
キュウウウッという音と共に俺が掴んでいた人形から、俺目掛けて糸を伸ばしてくる。
「くそ！　放せこら！」
俺に絡みつこうとする糸を強引に引っ張ると、糸自体はアッサリと引っ張ることはできた。
だが、切れない！
元々俺自身が攻撃できないのだからしょうがないと割り切ることはできるが、それにしたって不自然なほど、柔軟さを持っている。
一体何なんだ！
「く！　この！」
「や－！」
「ラ――シガラキちゃん、ハミングちゃん！　武器を手放して！」
フィーロとサディナはそれぞれ所持していた武器を手放すことができたが、眷属器を持っているラフタリアは元から手が離せない。
「シガラキちゃん！」
「わかってます！　ですが……ええい！　瞬刀・霞一文字！」
ラフタリアは強引にスキルを放って糸を切ろうとしたが、火花が散る。
嘘だろ!?　ラフタリアのスキルを受けても切れないとかどんな材質でできてんだよ！
それともアレか。能力差が致命的なまでに開いていて切れないとかか？

こうなったらやけくそにラースシールドで焼き尽くすのも一考じゃなかろうか。
俺を縛りつける糸を力技で無視し、盾に手を添える。

妨害により変化不可能。

俺の視界に文字が浮かび上がった。
なに？
「させない」
盾には何重もの糸が巻き付き、もはや盾なのか糸の塊なのかわからないほどだ。
「チェンジシールワイヤー……」
「く……一体……」
ものすごく強いと聞いたがこれはいくらなんでもおかしいんじゃないか!?
勇者を相手にしているとしか思えない攻撃だぞ！
「ファイアパラライズワイヤー」
俺の周囲にあった糸が燃え上がって俺に伸びてくる。
くそ！　熱くはないが、司令塔である俺を倒そうとしているのは明白だ！
「ナ――ロック様！」
「早く刀を消せ！　もう片方をメインにするんだ！」
「わ、わかりました！」
まだ動きが抑えきられないうちに早く距離を稼げ！
とはいえ……どうする？
うん、流星盾で弾き飛ばそう！
「流星――」
「スキルシール」
糸が俺の首に巻きつく。まったく苦しくはない。

だが……。

「な、なに――」

スキルを唱えようとしているのだがなぜかスキルだけ声が出ない！

「ど、どうなってんだ⁉」

いくらなんでもおかしい！

このマーダーピエロ、スキルを妨害できるとか魔法にしても変だぞ⁉

状態異常にも耐性がある俺を状態異常にするということは……設置型の攻撃である可能性が高い。

ゲームにもよるが耐性関係なく状態異常にさせられる。

そういった要素がないとも言い難いし、実際にやられている。

「てえええええい！」

フィーロが糸を潜りぬけて素手でマーダーピエロに襲い掛かる。

相手は素手だと舐めているのか、それとも俺とラフタリアに意識を向けていたのか幾重にも糸を張り巡らせるだけでフィーロへの守りはおざなりに見えた。

「とー！」

ボフンとフィーロがフィロリアル形態に変身し、高く跳躍して糸を飛び越えて思い切り蹴り飛ばした。

マーダーピエロは驚いたようにフィーロの方を振り向いて瞬間的に複数の糸をばらまく。

「まだまだ！」

フィロリアル形態のフィーロが巨体なので油断したのか、糸の密度が低い。

フィーロは魔法妨害がされているにもかかわらずフィトリア直伝の加速状態になって糸を潜りぬけ、攻撃の瞬間だけフィロリアル形態で蹴りを放った。

「ッ！」

マーダーピエロはフィーロの攻撃を受けて大きく吹っ飛ぶ。

が、糸がまるで衝撃を逃がすかのように広がってマーダーピエロを包み込み、一瞬だけ繭を作って解け、問題なく地に足をつける。

解けた糸は纏まり、繭のようになって闘技場の端へと転がっていく。

「まだです！」

そこにラフタリアが追撃とばかりに刀を振りかぶる。

「霊刀・魂断！」

「……無駄」

「そうですか？」

ラフタリアの刀が糸をすり抜けてマーダーピエロに斬りつける。

「――――⁉」

と、ザザッと砂嵐のような音がマーダーピエロから聞こえた。

なんだ？　あの音は？

……何にしてもやっていくしかない。

ラフタリアの刀の中には物理的にではなく幽霊のような非実体の相手を斬れる武器がある。

「じゃあ……次はこれ」

「マインドライン」

今度はラフタリアの攻撃を受け止めるとばかりにスッと糸が生成される。

すり抜けていたラフタリアの刀に糸が絡みつく。

「まだー」

フィーロも追いついて蹴りつけようとするが、フィールド中に糸を展開されて……違う！

俺の周りにいたと思しき人形がいつの間にかフィーロの目の前に現れていた。

くそ！　俺の方は碌に動けないんだぞ！

「次――っちの番。ニードルショット！」

今度は糸玉から針⁉　糸が付いているぞ。

まるで裁縫を見ているかのような攻撃ばかりだ！

「ロックちゃん！　大丈夫⁉」

サディナが俺のところに来て声を掛ける。

武器もなく、魔法も使えないんじゃ戦う術がない……か？

というか一方的な展開になったら片方に金銭援助で武器が投げ込まれるんじゃないのか!?
そう思って見ると、投げ込まれた武器を糸が巧みに掴んでいる。
闘技場が蜘蛛の巣まみれで武器が俺達の方に届かない。
魔法援護に関してはパッと見じゃ判断できないが、運営が妨害していると見ていいな。
くそ……このままじゃラフタリア達がやられかねない。
俺自身も糸に引っ張られそうになった。
しかも俺の四肢にくっ付いて強引に歩かせようとしている。
方角からして……マーダーピエロの奴、俺をラフタリアの攻撃への盾にしようとしているみたいだ。
サディナを有数の猛者だと思ったが上には上がいるもんだな。
ま、あくまで体感であって、弱体化等の影響なし、魔法使用可能だったら余裕かもしれないが。
「お姉ちゃん！　ん……ん……」
フィーロが人型に戻って大きくバックステップしてから喉を何度か鳴らす。
それから……なぜか歌い始めた。
「こんな状況でなに歌ってんだ！」
と注意すると、フィーロは俺の方を見て、手で合図してきた。
えっと……髪の形や武器を持つポーズからして、絆か？
で、歌……って絆の世界で習得した技術か？
ハミングフェーリーの時にそういうことができるのは知っていたが、こっちでもできたのか！
そういえば子守唄とか言っていた気がする！
バシンバシンとフィーロの周りに伸びていた糸に衝撃が入る。
やがて発火して、糸はマーダーピエロの糸巻きの中に戻っていった。
やはりこの糸は魔法的な攻撃に弱いのか。
「ファイアソングー」
フィーロはただ歌っているだけのはずなのに、曲が辺りに響き渡る。
これ、魔法じゃないのか。じゃあ妨害のしようがないな。

それからフィーロは大きく息を吸って、フィロリアル形態になり、翼をメガホンのように形作ってから怒鳴った。
「エアブロックボイス！」
ドンと音がして、フィーロの口から衝撃波みたいな何かがマーダーピエロに向かって飛んでいくのが俺には見えた。
とんでもない隠し技を持ってやがる。
それをキョウ相手にかませってての！
ま、普通に魔法を使った方が優秀なのかもしれないけどさ。
「ハミング！　感謝します！」
ラフタリアがもう一本の刀を出したり消したりしながら、踊るようにマーダーピエロの妨害を潜りぬけて攻撃していく。
押している……が、それもどこまでもつか。
く……弱体化の魔法の重圧が目に見えて感じ取れるようになってきたぞ。
併せてラフタリアとフィーロの動きが悪くなっている。
「ロックちゃん」
フィーロと同じように拘束されていたサディナが、変身して拘束を解き、俺の方へと近づいてきていた。
絶賛炎上する糸に巻かれた俺に手を触れる。
「なんだ？」
「言い忘れたわけじゃないけど、この状況で魔法を使う手があるわ」
「なに？　どうやるんだ？」
「魔法の勉強してないの？」
そう言われて行商中に学んでいたことを思い出す。
妨害は個人相手にしか通じるものではない。しかし複数人で妨害することは可能だ。
つまり、複数人で詠唱した場合は？
なるほど、数人で合唱魔法を唱えれば魔法の使用はできるかもしれない。
フィーロが数回使っていたのを思い出す。

サディナは俺の耳元に口を近づけて説明した。
「だから、ロックちゃんと私が協力して合唱魔法を唱えるの」
「だが、詠唱していたら気付かれるし邪魔もされるだろ」
「そこはお姉さんを信じなさい。失敗はしないわよ」
サディナはウインクしてから詠唱に意識を集中する。
「ロックちゃんも集中して、お姉さんが協力してあげる。これから唱えるのは援護魔法よ」
しょうがない。俺は意識を集中する。
サディナから俺へと何やら魔力の流れを感じた……なんだろう。
オストと魔法を唱えた時のような力の流れ……だけど何かが異なる。
目を閉じた俺の視界に……四角いブロックのようなものが見える。
その隣には、形作られた彫像？　ちがう。パズルのピースだ。
なんだこれは？
「合唱魔法は初めて？　とりあえず、魔力を練って定められた形にするのよ」
くそ……面倒な作業を要求する。
『二つの力、彼者を支えるために力を込め、敗北への運命を覆し勝利の未来へと紡ぐ力を……』
サディナが颯爽とパズルのピースを作り上げては魔法言語に変換していくのを感じる。
「ほらロックちゃんの方も貸しなさい。お姉さんが手伝ってあげるわ」
とか言いながら俺が変形させていたブロックを成形していく。が、本来は俺がやらねばならない箇所故に作業効率は悪い。
だが……なんだろうか。
サディナの奴、オストがやったことに近いことをしているような……。
オーラを意識すると、ぼやっと一瞬だけ、オストに見せられたパズルのピースが見えた。
「雑念は捨てて、早くしないとラフタリアちゃんが大変よ」
フィーロとラフタリアがどうにか善戦しているが、それも時間の問題だろう。
マーダーピエロが投げ込まれた武器を糸で手繰り寄せて振りかぶろうとしているのがわかる。

今は魔法に集中し、そのあと強引にでも突破する術を模索するしかない。
『龍脈よ。我等の願いを聞き届けたまえ。力の根源たる我らが願う。真理を今一度読み解き、我が前の障害を乗り越える力を！』
サディナが合唱魔法を完成させて右手を天に掲げると上空に暗雲が立ち込める。
ゴロゴロと雷鳴が響き渡った。
「あら、こんな魔法が完成するのね。『雷神降臨！』」
自然と俺の口も魔法名を発し、ターゲットアイコンが視界に浮かび上がる。
「ロックちゃん。魔法を掛ける相手、誰にするかわかるわよね？」
「……そうだな」
俺は迷わず、ラフタリアを指名した。
サディナもそれは同じだったのか、ラフタリアを指差す。
雷雲がラフタリアの上空に移動し、落ちる。
「キャ――」
と、声を出して驚くラフタリア。
「……今」
その隙をマーダーピエロは衝こうと糸を伸ばす。
だが、マーダーピエロが伸ばした糸はラフタリアに絡みつくことなく、弾かれる。
それだけならともかく。
「う!?」
マーダーピエロがバチッと強く感電して若干仰け反った。
「こ、これは……」
当のラフタリアは呆気にとられた表情をしている。
俺だって、そうだ。
ラフタリアの全身を電気が走っているのだから。
「能力が大きく跳ね上がってる……!?」

「ラ——シガラキちゃん！　お姉さん達の強力な合唱援護魔法を、大事に使ってー！」
「は、はい！」
「負けない」
マーダーピエロは負けじと糸の付いた針を投擲するが……その全てをラフタリアは弾いて、先ほどの遅さがウソのような速度で懐に入る。
「受け止めてみせる！」
マーダーピエロが糸玉から蜘蛛の巣を出して距離を取ろうとした。
「無駄です！　剛刀・霞十字」
二刀流になったラフタリアがスキルをマーダーピエロに向かって放つ。
十字の軌跡がマーダーピエロと蜘蛛の糸へと近づき、糸は切断され、マーダーピエロはラフタリアの刀に斬りつけられる。
「あああああ——」
追撃とばかりに雷が走ってマーダーピエロを吹き飛ばした。
それでも負けじとマーダーピエロは受け身を取った。
「フィーロも負けないよー」
そこにフィーロが大きく息を吸って、エアブロックボイスを当てる。
「ううう……」
威力自体はそこまでないようだが、相手にダメージを与える衝撃波を出すのには十分だったようだな。
「トドメです！　合成技・雷帝刀！」
ラフタリアが一本の刀を大きく振り下ろす。
すると青白い雷がラフタリアの刀に宿って、光り輝く……。
そして稲光がマーダーピエロに向かって降り注いだ。
「ガハ——」
同時にドスンと激しい衝撃で闘技場が揺れ、地面にクレーターができあがった。
まるで儀式魔法、『裁き』が降り注いだかのように。

そのクレーターの中心に立っているのはラフタリアだけだ。
勝った……のか？
だが、マーダーピエロが倒れたはずなのに、未だに糸は強く俺を縛り続けている。
ラフタリアは刀に付いた血を拭うように振りかぶってからマーダーピエロが戦闘不能であるのを確認する。
「……？」
ラフタリアは己の刀を凝視してから倒れたマーダーピエロを刀の鞘で転がす。
「これは……」
ラフタリアはマーダーピエロの胴体をコンコンと軽く刀の鞘で突く。
反響する音がまるで木みたい……だぞ？
つーっと……マーダーピエロが持っていたはずの糸玉が転がっていく。
そう、闘技場の隅に束になって転がされ、糸でぐるぐる巻きにされた武器の山の方へと。
すごく嫌な予感がするんだが……。
「スケープドール」
そこにあった武器を纏めた糸の繭をハサミで切り裂いて何かが出てくる。
「日算だと強化は——？」
そこにはもう一人のマーダーピエロがいた。
ラフタリアが刀を向けて構える。
「……その程度じゃ——る。根本的に強さが足りない」
「何？」
声が小さくて聞きとりづらいぞ！
「もっと、何者も敵わないほどの——じゃないと、別の——に滅ぼされる。私程度で苦戦しているならば」
さっきから何を言いたいんだ？
「……料金分くらいは戦った。本当は戦う——い。また——ザザ……」
……砂嵐みたいな音が聞こえたのは気のせいか？
さっきからコイツが喋っている時に雑音が聞こえる。

「殺されないように、がんばって」
はっきりと聞こえた。そして、マーダーピエロは俺に手を振り、ボフンと煙を立ててフッと姿を消した。
忍者か何かか？　そんな感じの消え方だったぞ。
同時に闘技場内に張り巡らせてあった糸が姿を消し、フィーロが相手をしていた人形も姿を消した。
「な、何者なんだアイツは？」
正体不明なのはもとより、まるで俺達を試しているかのような言い方、そしてこの場から突然の消失だぞ。
「マーダーピエロ選手消失！　勝者！　ロックバレー一行&ナディアぁあああああああああ！」
ぱちぱちとまばらな拍手から始まり、わあああああああっと拍手喝采が巻き起こる。
どっちが勝ってもいいのか、お前等は。
「やったわね。ロックちゃん」
「やりましたね！」
「フィーロの勝ちー」
「お前はハミングだろ！」
俺が注意するとフィーロがアッと声を漏らしやがった。
まったく……教えたことをすぐに忘れるなっての！
「だが……なんなんだ？　マーダーピエロという奴は……そもそも、いつの間に入れ替わっていたんだ？」
「あの繭ができた時でしょうね。なにかおかしいと私も思っていたのよ」
「でもすっごく隠すの上手だったよ？　魔法じゃないのー？」
サディナとフィーロの分析は間違っていない気がする。
まだ戦える余裕があったはずなのに、目的は達したから去ったかのように見えた。
そして俺達の強さが足りないとばかりに……。
敵なのか味方なのか……違う。味方ではない。
なんとなくだがあの不気味さは初めてグラスと会った時のそれと重なる。
あの武器が何なのか、次に会った時に問い詰めよう。
だが、今はラフタリアの同郷の連中を優先しなきゃいけない。

俺達は勝利を宣言するように手を振りながら、選手控え室の方へと足早に向かったのだった。

十九話　闇の権力

ファイトマネーの受け取りは奴隷商の配下に頼み、俺達はサディナを先頭にゼルトブルの商店街を走り抜ける。
なにせサディナが悪徳商人の打ち合わせとは異なることを仕出かしたわけだしな。
俺が商人だったら何をするかなんて容易く想像できる。
損害賠償とばかりに高騰する本物のルロロナ村出身の奴隷を取り上げる。
まあ、元々、それが狙いだったのかもしれないけどさ。
そんな真似をされたらたまったもんじゃない。だからこうして急いで駆けつけようとしているわけだ。
「ずいぶんと弱体化の魔法が掛かっていたんですね」
「そうだな」
闘技場から出ると体が軽い軽い……あまりに軽くて最初転びかけたくらいだ。
「ロックちゃん。こっちよ」
サディナが指差す方向に向かう。
俺達はゼルトブルの、何やら物騒な連中が見張りをしている居住区の建物へと辿り着いた。
商人が用意した石造りの家って趣だな。絆の家と似た雰囲気のある建物だ。
その家の前に護送用の馬車が数台並んでいる。
どうやら俺の読みは当たりだったみたいだな。
家の中から家捜ししているような音が聞こえてくるような気がする。
「今、この建物では借金の取り立てを行っている。部外者は立ち去れ！」
で、家の扉の前には傭兵らしき連中が護衛のように立っている。
「残念だけど部外者じゃないわよ」
サディナが魔法の詠唱に入ると傭兵共は俺達が何者か気付く。

「どうやら言われた通りの連中が来たようだぞ！」

「生憎だが、お前等も通すわけにはいかないんだ。大人しく捕まってもらおう！　あの方に逆らった罰を受けてもらうためにな！」

で、どこから出てくるのか大量の傭兵その他諸々……四〇人くらいがぞろぞろと周りから出てきて襲い掛かってきた。

ご丁寧に魔法使いもいるようだ。

俺達を数で抑え込もうとか安い考えだな。

お前等、相手を見て行動しているのか？

いくら弱体化の魔法を俺達に掛けようとしてもここは闘技場じゃない。

事前に仕掛けられていない場所で、しかも有象無象の連中相手にラフタリアやフィーロが負けるわけないだろ。

「いっくよー！　じゃらじゃらー」

「う、うわあああああああああ！」

フィロリアル形態になったフィーロがモーニングスターを足に括りつけて振りまわし、傭兵共を薙ぎ払う。

「邪魔です！」

「グハ！」

そしてラフタリアが刀で斬り伏せ。

「ハイ残念！　ドライファ・チェインライトニング！」

サディナが連鎖するっぽい雷の魔法で傭兵共を感電させた。

魔法で阻止するには頭数が足りなかったようだな。

更にサディナはトドメとばかりに銛で思い切り一人の傭兵を突いてボーリングのように残った傭兵共にぶつけた。

それだけで建物の外にいた連中は沈黙する。

「ふん。こんな狭い場所じゃ、いくら数がいても無駄だ」

更に遠くから弓兵みたいのが狙撃してくるが、俺が展開した流星盾に阻まれて矢は届くことはない。

「サディナ、村の連中は奴隷紋で商人の奴隷になっているわけじゃないのか？」

「大丈夫よ。お姉さんがお金を払って奴隷紋は解除させているし、何かあったら逃げるように教えてあるわ」

「それって、ここから逃げ出したんじゃないのか？」

俺の問いにサディナは建物に目を向ける。

「んー？」

フィーロがなんか首を傾げたぞ。

「あのねー。このお姉ちゃんが何か音を出したよ」

「あら？　よくわかったわね。建物の中に何人いるか、少し調べたのよ」

超音波？

アレだ。イルカやクジラ、シャチは海の中で超音波を使って物体を把握すると聞く。

獣人だからその辺りの能力も持っているのか？　便利だな。

「……大丈夫ね。逃げる暇もなく取り囲まれて籠城するしかなかったみたい」

「どこが大丈夫なんだか……とは思うが、やるしかないな！　ラフタリア！」

「はい！」

逃げられないように外からカギを掛けられていたので、ラフタリアが扉を切り捨てて中に入る。

俺も後に続き、村の連中を捕まえようとしている奴等を殲滅する。

「ぐは！」

その後方に先ほど闘技場でエキシビジョンマッチを宣言した商人がいた。

わざわざこんなところにいるとは……丁度良いな。

「く……ナディア！　よくも契約を破りおったな！」

「そこはしょうがないじゃない。相手が相手だし、お姉さんもがんばったのよ？　それにこれはロックちゃんと決めたことなのよー」

「というわけでここで俺の登場だ。さっきはどうも。コロシアムに関してはアンケートで決まったことだし、元々何が起こるかわからない闇のコロシアムだから文句を言う気はないがな。だが、それとこれは別だ」

「ふざけおって！　お前等が出てきたからこっちは儲けがパアだ！　だからこそ、契約違反をしたそこの……奴隷紋の拘束力にすら涼しい顔をしている女が後生大事にしている金のなる木を没収するんだ！」

分が悪いのは理解しているみたいだな。

悪徳商人は忌々しそうにサディナを睨みながら、どうしてこんなことをしたのかを説明してやがる。
つーか、奴隷紋の拘束を受けて涼しい顔？
俺がサディナの方を見ると、胸を指差してやがる。
「お姉さんのおっぱーい」
「黙れ！　いいから見せろ！」
俺が胸に巻いてあったさらしを取ると、絶賛発動中の煌々と輝く奴隷紋がそこに刻まれていた。
「ケチってやっすい奴隷紋なんて使っているからよ。この程度、どうとでもできるわ」
……フィーロも前に魔物紋を無力化させたよな。
魔法が得意とかならどうにかできるものなのか？
「一歩動くごとに激痛が走っているはず！　どうしてそんなに涼しい顔をしていられる！」
「我慢できないほどじゃないからに決まってるでしょー」
え？　完全に無効化はできていないのか？
ああ、そういやフィーロの場合は魔物紋が作動しなかったもんな。
だけど、これは作動中。
軽減してはいるけど、痛みがないわけじゃない……ってすごいな。
「お前等、こんなことを仕出かして！　生きていられると思っているのか！　いや、絶対に生かしておけん！　たとえここを乗り越えたとしてもゼルトブルの闇ギルドがお前等をどこまでも追いかけると思え！」
「武器の……それは不可能だぞ」
そこに……俺達の後方から声が響いた。
顔を向けるとそこにはアクセサリー商と奴隷商が立っている。
ついでにリーシアも、若干脅えながらも一緒にいた。ラフちゃんも一緒だな。
「見ていてハラハラしましたぁ」
「ラフー」
「そうだろうな。ぶっちゃけ戦闘面での面倒臭さはキョウを超えたかもしれん」
サディナは魔法無効化とか、スキルを避けるとか、戦闘センスは完全に化け物だ。

あのマーダーピエロって奴にも色々と問い詰めたくなるが……まあいい。
「お、お前は――アクセサリーの」
「必要かと思ってこうして来ましたです。ハイ」
悪徳商人は心底驚いたように目を見開いて口をパクパクさせ、アクセサリー商を指差している。
「なぜ、お前がここに!?　だが、それは関係ない！　コイツ等をゼルトブルの闇の商人組合が許すはずもない！」
「いや、悪いが商人組合に手を出せる方ではない。先ほどのコロシアムでの戦いを見れば武器の……お前も理解できたはずだったのだが……」
自ら現場を確認せず、不測の事態が起こったからアドリブを仕込んでおいて、自分は奴隷を没収に来たみたいだしな。
「私共の一族の総意として、此度の闇のコロシアムでの問題は小さなことであり、ロックバレー一行に関しての処罰には反対を表明するそうです。ハイ」
「で、私が管理するアクセサリー組合も反対を表明する」
「な、なぜだ！」
「貴方が裏で誰を優勝させるか暗躍していたのと同じように、私共も暗躍していたからです。ハイ」
「なんだと！」
「ま、今回の大会は大会で儲けておいて……ナディアが保護している連中は、高騰のピーク時にでも強引にオークションで売って儲けようとか考えていたんだろ？　何かしらの手段でナディアを殺してな」
「そうでしょうねー。だからお姉さん、結構気を使ってたしー、裏のコネを使ってあの子達の奴隷紋を解除したんだしねー」
どうだかな。この女の考えていることはどうも掴みづらいな。
わかってんならもっと必死になれよ！
「さて、ここで商談だ。えっと、武器商人でいいのか？　明日の試合で俺達は優勝する。そこで得る金は、ナディアの借金とほぼ同額だ。その払い戻し金でナディアを身受けしてやる。だからお前とナディアが所持していたルロロナ村の奴隷を俺に寄越せ」
「ふざけるな！　誰が金のなる木を手放すと思っているんだ！　あの奴隷共が今、どれだけの金銭で取引されてい

ると思っているんだ！」

ま、受け入れられる話じゃないのは百も承知だがな。

「そんなことよりもアクセサリーと奴隷をどうやって取りこんだ！」

ああ……そういや自己紹介はしてなかった。

奴隷商のコネとアクセサリー商の悪ふざけで俺の経歴を辿るのは難しかったらしいからな。

「もうコロシアム内じゃロックバレー一行が何者だったのかわかってるみたいよ。本物かどうかは別としてね」

「ま、聞いても偽物だとか思って一笑に付したのかもしれないから教えてやるよ」

俺は悪徳商人を見下げるようにして、自分を親指で指差してから宣言する。

「俺は四聖、盾の勇者として召喚された岩谷尚文だ。高騰するルロロナ村の奴隷を取り戻すために、お前のところのコロシアムに参加した」

「本当は経歴に傷が付くからやめさせたかったんですけどね」

などとラフタリアが嘆いている。

「経歴？　知らんな。手段を選んでいる余裕がなかったんだよ。高騰するルロロナ村の奴隷を手早く取り戻すにはな」

「そ、そんな馬鹿な⁉」

信じられないとばかりに悪徳商人は言い放つ。

なんだ？　自己紹介しても証明できないとか、面倒だな。

「嘘だと思うなら証明してやろうか？　ホラホラ、ついでにエアストシールド、セカンドシールド、チェインシールド、シールドプリズン」

盾を何度も変化させ続け、同時にスキルを見せつける。

「魔法で再現するには詠唱がないとおかしいよな？」

「では信じてもらえるための切り札を投入しますです。ハイ」

と、奴隷商が俺にルコルの実を一房渡してくる。

食えばいいのか？

悪徳商人の鼻先にルコルの実を一個チラつかせて本物であるのを確認させた後、思い切り頬張った。

「あらー……」

なぜかサディナがうっとりしたように頬に手を添えている。

「これでも信じられないか？」

「そんな――く……」

悪徳商人はがっくりとうなだれて座り込んでしまったのだった。

どうも盾の勇者はルコルの実を食っても平気だというのが確実な身分証明だということになっているみたいだ。

まあ、メルロマルク近隣と一部の商人辺りにしか広まっていない話みたいだが。

知らない奴は知らないんだろうが、この商人も噂くらいは知っていたんだろう。

「というわけだ。諦めてくれるよな？　あと、強引なエキシビジョンマッチのツケは忘れたわけじゃないのを覚えておけよ？」

「な、何が望みだ！」

「そうだな……まだ村の生き残りがいるかもしれないから、本物を見つけ次第報告しろ。分割払いでも何でもいい。払ってやる。が、さっさとこのバブルを弾けさせて値段を落ちつかせるんだぞ」

十中八九コイツがサディナの願いを悪用して村の奴隷の値段をつり上げたんだろう。

なら主犯さえ押さえればこの高騰も落ち着くはずだ。

高騰が一人歩きし始めているのかもしれないが、ここに闇の商人共が揃ってんだ。どうにかなるだろ。

「例えば今回の事件を火種にして、ルロロナ村の奴隷を所持すると盾の勇者の放った刺客が来ると触れ回るとかな」

目撃者もそれなりにいるんだ。噂を燃え上がらせるには十分だな。

「なに、そこの商人二人と同じく、俺の軍門に降るなら悪いようにはしない。どうだ？」

「わ、わかった……」

こうして闇のコロシアムでの出来事は幕を下ろしたのだった。

もちろん、翌日の試合はほぼ消化試合として、速攻で勝敗が決したんだけどな。

エピローグ　アピール

サディナが囲っていた奴隷達は一五人にも上った。これをコロシアムの賞金で買い取れたかというとかなり怪しいな。
ちなみにラフタリアが奴隷オークションで見つけた本物もここにいたそうだ。
話によると同郷の奴隷がサディナに頼まれて商人と一緒に、会場で買い占めをしていたとかどうとか。
ま、本物である確信がないとできることじゃないけどな。
サディナも契約の破棄をしてもらって晴れて自由の身となった。
「さてと、ラフタリア。話は済んだか？」
「はい。みんな私の話を信じてくれました。そしてナオフミ様の領地である、あの村を再建している最中だと説明しましたよ」
「そうかそうか。後は奴隷になるか否か程度だな」
「そこは……村に来てもらってからにしていただけないでしょうか？」
ふむ……モデルケースとしてキール達を見れば、自分達も強くなりたいと思って自ら奴隷になりたがると。
ラフタリアもよくわかっているじゃないか。
「わかった。じゃあとりあえずパーティーに入るように頼んでくれ。随時ポータルで村へと送り届ける」
サディナとラフタリアの先導の元に一五人の奴隷達は和気藹々とポータルで村へと帰還していった。ポータルを経験して、最初はずいぶんと驚いた様子だったらしい。
「俺達も一旦帰るか。正直疲れたしな」
「はい」
ポータルで村に帰り、サディナを含めて元の村の連中は旧交を温めていたようだ。
フィーロは今回の武勇伝を隣町にいるメルティに話しに行った。
あんまり余計な話をしないといいが……。
「ロックちゃんの本名はナオフミちゃんっていうのね」
「ちゃん付けは相変わらずなのな」
サディナは俺を子供扱いするような口調で、相変わらず親しげに声を掛けてくる。

「それでナオフミちゃん。ラフタリアちゃんとはどこまで行ったの？」
「行く？」
「サディナ姉さん！」
この場合の行くとは何を指し示す言葉だ？
ラフタリアは下ネタは嫌いだし、サディナもその辺りは親しい間柄だったんだから知っているだろう。
ということはアレだな。どこまで出かけたことがあるかだな。
「波の先にある異世界まで行ったことがあるぞ。ラフタリアの持っている刀はその世界の……多分、この世界で言えば七星勇者に該当する武器だ」
「あらー」
サディナはラフタリアをマジマジと見つめる。
「な、なんですか？」
「そうなのかしら？　ナオフミちゃんとはそれだけー？」
「は、はい」
「兄ちゃん達どうしたんだ？」
キールが同郷の連中との再会を喜びながら俺に声を掛けてくる。
「何でもないのよ。キールくん」
「そうなのか？」
「ラフタリアの武勇伝の話だよな？」
「ナオフミ様はそう思ってくださって問題ないですよ」
なんだ？　その言い回しは。まるで最初に浮かんだ方が正しいみたいじゃないか。
「あら、ということは……じゃあラフタリアちゃん。ナオフミちゃんは私が頂くわねー」
「何を言っているんですか！」
「何を言ってんだ、お前は！」
「えー……私、本気でナオフミちゃんのことを狙ってるわよ？」
クネクネとしながらサディナは悠々と答えて俺の腕に自分の腕をからませてくる。

やめろ、気持ち悪い。
振り払うが効きやしないとばかりに、何度も絡ませようとしてくる。
くそ、しつこいぞコイツ！
「お姉さん、甲斐甲斐しく面倒見てあげましょうか？」
「サディナ姉さん……正気ですか？」
「そうよー」
サディナが当然のように言い放ちやがる。
「なんだ？　兄ちゃんのことが好きって話か？　それなら村のみんなは兄ちゃんのことが大好きだぜ！」
「俺は暴君の守銭奴だ！　馴れ合う気はないし、気の良いお兄さんでもない！」
「ここまで説得力のない台詞もすげー！」
何を言ってんだキールは！　やっぱりアホの子なんだな。
サディナは俺が嫌がるのをわかっていて、性的なアピールを露骨にしてきたんだよ！
この様子からすると間違いなく悪ふざけだな。
胸を触らせて『お姉さんのおっぱいー』とかやる奴だぞ。
まともに相手をすると疲れるだけだ。
だが、ラフタリアは真面目だからな。そんな話は特に嫌う傾向がある。
「そうよー。じゃあキールちゃん、お姉さんと一緒にナオフミちゃんを攻め落としましょうね。ナオフミちゃんをお姉さんは旦那さんにしちゃうわよー」
「誰がなるかボケ！」
ラフタリアの表情がみるみる青ざめていく。そして俺の方へ顔を向けた。
「ナオフミ様……もしかしてサディナ姉さんと飲み比べとか……しませんでした？」
「飲み比べか？　最初に会った時にバンバン飲んでたのに付き合わされたな。次に会った時も飲んだが、サディナが酔い潰れるまでは飲んではいないぞ？」
「いやーん。お姉さんを相手にナオフミちゃんは勝ったようなものじゃなーい」
ガツンと衝撃を受けたかのようにラフタリアが頭に手を当てて仰け反った。

どうしたんだ？
「ナオフミ様……サディナ姉さんは昔から、ある決まり話を村の人達に言っていたんですよ」
「はぁ……」
キールもうんうんと頷いている。
何だ、それは。
「サディナ姉さんは『私の生涯の伴侶となるのは私よりも酒が強い人！　そんな人に出会えたら、絶対に逃がさないからみんな覚悟するのよー』と」
「サディナ姉ちゃん、村一番の酒豪だったからなー。噂じゃ領地の飲み比べ大会でも優勝して、更にお酒を飲んでたって話だし」
「へー……」
「だからサディナ姉ちゃんが将来の夫に兄ちゃんを指名してるってことは、兄ちゃんが飲み比べで勝ったんだろうなってきっと村のみんな思うぜ」
「はい？」
そういや、サディナは俺にルコルの実が入った酒を飲ませたな。
その後から輪を掛けて親しげになったような気がする。
え？　それがサディナが俺を夫にしたがる理由なわけ？
悪ふざけだと思っていたんだが……。
と、俺がサディナの方を見ると、サディナの奴、人型になって頬に手を当てて照れながら俺の腕に『の』の字を書いている。
何だろうか。ビッチに騙される前の俺だったら、攻略完了、俺のモテ期到来とか喜んでそう。
「兄ちゃん、サディナ姉ちゃんにどうやって勝ったんだ？」
「勝ったかどうかは知らんが、ルコルの実を食った後からどうも親しげだな」
「「そりゃあ……」」
異口同音にキールやこの村出身の奴隷達が頷く。
サディナは村では良い姉役をしていたのだろうから、よく知っているのか？

「行商時に時々出されていただろ」
「え？　あれってルコルの実だったのか？　歓迎の印だと思ってた」
盾の勇者を名乗る偽物対策で有名になりつつある、ルコルの実を俺に食わせるというやつだ。
さすがに俺以外にルコルの実を食って無事な奴はいないらしい。
ある種の歓迎と偽物を成敗する道具だと思っていたんだが。
「というわけで私の真心よー！　ナオフミちゃんありがとう！」
「うわ！」
サディナが俺の唇に向けて唇を突き出して、素早く突っ込んできた。
咄嗟に顔を逸らす。
それでも俺の頬にサディナの唇が触れて、チュパッと音が響く。
「あら残念、じゃあ今度こそ唇を頂くわよ」
「ふざけんな！」
あっぶねー！　ファーストキスを奪われるところだったぞ！
悪いが俺はこの世界で所帯を持つ気はない！
世界が平和になったらサッサと日本に帰るんだからな。

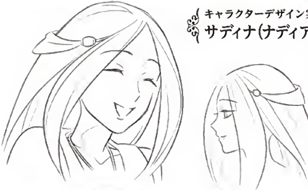


何か辺りの空気がピリピリとしてきたような……？
ラフタリアが何やら凄く不機嫌そうな顔で俺とサディナを睨みつけている。
ほら見ろ、ラフタリアは凄く真面目なんだからこういうことをすると不機嫌になる。
「ラ、ラフー……」
「ふぇぇぇ……」
「サディナ姉さん！」
「あらあら、凄く楽しくなってきたわね。これからの日々にお姉さん、期待を膨らませていいかしら？」
「できれば大人しくしていてくれ……」
「あ、そうだ！　兄ちゃん！　みんなにご飯作ってくれよ！」
「ごはん！」
「ごはん！」
「ごはーん！」
「うっせー！」
ともかく、これでラフタリアの同郷の連中を買い集めるのは軌道に乗ったと思う。
コイツ等を戦力としてカウントするかどうかは決めていないが、使える人手も増えた。
だが、一難去ってまた一難ということわざが脳裏を過ったのは……気のせいだろうか？
亜人から獣人形態になって、俺を強引に抱き締めようとするサディナと、セクハラに過敏に反応して不機嫌なラフタリアを宥めるのは骨が折れそうだと、俺は思ったのだった。

キャラクターデザイン案
サディナ(ナディア)









キャラクターデザイン案
キール







著者プロフィール

アネコユサギ

Aneko Yusagi

神奈川県出身。ゲームと読書好きが高じて、小説を書き始める。
『盾の勇者の成り上がり』を執筆し、ネット上に作品を公開。
作品発表後、連日欠かすことなく更新することで病み付きとなる読者が続出し話題となる。２０１３年８月ＭＦブックスから商業デビュー。
「書籍化によって頂いている期待に応えられるよう頑張ります！」と語る。

企画
株式会社フロンティアワークス　メディアファクトリー
担当編集
堤 由惟／今井遼介／大原康平（株式会社フロンティアワークス）
ブックデザイン
ragtime
イラスト
弥南せいら

本書は小説投稿サイト「小説家になろう」（http://syosetu.com/）初出の作品を加筆の上書籍化したものです。

盾の勇者の成り上がり　10

2015 年 3 月 31 日発行　ver.1.0

著者　アネコユサギ
発行者　三坂泰二
編集長　金田一健
発行所　株式会社ＫＡＤＯＫＡＷＡ
〒 102-8177
東京都千代田区富士見 2-13-3
03-3238-8745（営業）
編集　メディアファクトリー
0570-002-001（カスタマーサポートセンター）
年末年始を除く平日 10:00～18:00 まで

http://www.kadokawa.co.jp/

本電子書籍は下記にもとづいて制作しました
ＭＦブックス
盾の勇者の成り上がり　10
発行日　2015 年 3 月 31 日　初版第一刷発行


盾の勇者の成り上がり 10
アネコユサギ
Aneko Yusagi
MFブックス


盾の勇者の成り上がり
10
アネコユサギ
Aneko Yusagi



ナディア
ラフタリア
エクレール
リーシア
岩谷 尚文
メルティ
キール
フィーロ
人物紹介
盾の勇者の成り上がり 10


「あらあら、せっかちな子は嫌いじゃないけど、
おいたが過ぎるわね」







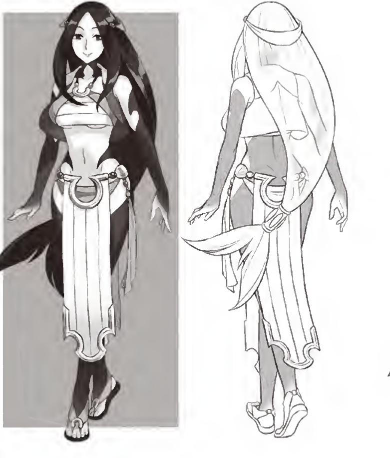








キャラクターデザイン案
サディナ（ナディア）









キャラクターデザイン案
キール







